

地域創造系
卒業論文集 2021/22
私の地域活性化プラン



兵庫県立村岡高等学校
地域アウトドアスポーツ類型 地域創造系

巻 頭 言

兵庫県立村岡高等学校

校長 牧野 徹



60期生（令和4年3月卒）と61期生（令和5年3月卒）の地域アウトドアスポーツ類型地域創造系の卒業論文集が完成しました。

地域創造系の3年間継続した学び「地域探求」は、その学年を担当していただく鳥取大学地域学部の先生方の専門分野に大きく影響を受けます。60期生は、アレクサンダー・ギンナン先生のもと、「国際的・芸術的・文化的アプローチによる地域活性 動画配信による『石碑を巡る香美の旅』」で、「ふしぎ発見～岡見公園～」「彫刻の森&兎塚伝説を巡る」「峠の謎～クイズに挑戦～」「～村高の挑戦～古墳に迫る」を発信しました。61期生は、白石秀壽先生のもと、「マーケティング手法を用いた地域活性『ひと・もの・こと』発信プロジェクト～香美の魅力を売る～」で、「自然のWi-Fiとつながろう」「シカの狩猟体験ツアー」「唐三の魅力に迫る」「村岡城下町まちづくり構想」の4プランに取り組みました。

彼らは、この「地域探求」を軸として自分たちの地域について、知識を広げ、課題を共有し、地域の課題を自らの課題として取り組むと同時に、総合的な探究の時間を中心に展開する「村高発☆地域元気化プロジェクト」の各班においても、それぞれのテーマの中で地域との協働を進めてきました。特に、集落調査は、地域創造系は全員が分担して現地調査に赴いて、地域の生の声を聞き、自分の目で集落の魅力を探る経験を積んでいます。こうした地域との協働の中で、彼らがそれぞれの視点で地域活性化プランに向き合ったのが、この卒業論文集といえます。

地域との交流の場として、みかた残酷マラソン全国大会と村岡ダブルフルウルトラランニングの全校スタッフがありますが、新型コロナウイルス感染症で大会が2年連続中止となり、60期生は1年生のとき、61期生は3年生のときしか経験していません。さらに、高校生活のほとんどがマスクをし、不安と隣り合わせて、制限だらけの日々となってしまいました。しかし、そのような中でも不平や不満を口にすることもせず、「今、自分たちにできること」を大切に取り組んでくれました。よく、人の苦しみや悲しみを知っている人ほど、人にやさしくできると言います。きっと、そんな厳しい高校生活を送ってきた彼らだからこそ、弱者の視点を大切にでき、日常では気づかないことに気づくことができるのではないのでしょうか。

村岡高校のスクール・ミッションは、『人みな使命あり』の教育指針のもと、地域を学びのフィールドとした高校生活を通して、創造的に地域と協働できる人物を育成することです。在学中の3年間に、真剣に地域課題と向き合うことで、自らの経験値を高め、考える力・行動する力・伝える力を身につけていきます。その卒業生が、これからの地域の担い手となります。この人材育成こそが、地域活性に繋がる一本の道となります。今回の地域活性化プランは、すぐに役立つものではないかもしれませんが、ただ、この経験は彼らの中に蓄積され、消えることはありません。今後、彼らがどのような形で地域と協働するかは、一人一人異なります。地域創造系の卒業生が、それぞれ一番輝ける形で、これからも村岡高校、地域、そして、社会とつながっていくことを期待しています。

目 次

☆ 巻 頭 言

校長 牧野 徹

《2021年度 地域創造系9期生》

- 体験を通して伝える香美町の魅力
- 誇れるような地域をつくる
- 元気な地域づくり
- 私が守りたい地域
- 若者の視線で地域づくり
- 香美町の事、知っていますか？
- あるものを利用した町づくり
- 地域内外の人々へ
- 住みやすく楽しい町
- 過疎地域に生きる意識
- 香美町を第2のふるさとに
- 若者の訪れる地域に
- 香美町での子育ての魅力を再発見・再発信
- 時代に合った地域活性化

- 黒田 季月…………… 2
- 田中昂支郎…………… 7
- 田中 琉偉……………12
- 鉄屋 仁……………17
- 富田 樹実……………22
- 西井 友理奈……………26
- 藤村 春奈……………31
- 松尾 桃姫……………36
- 明保能 和……………41
- 浅田 光……………46
- 井端 夕夏……………52
- 北村 海人……………58
- 坂本 実優……………63
- 西垣 大空……………69

《2022年度 地域創造系10期生》

- ◎若者が活躍する町に
- ◎人との交流
- ◎地域資源を利用した高齢者の活気促進
- ◎若者への「ほっとする時間の提供」
- ◎ネットワークでつながる地域
- ◎地域で子どもを育て、子どもが地域に活力を生む
- ◎価値となるものを見つめる
- ◎地域の一員として
- ◎村岡商店街の賑わいを復活させる
- ◎外国人は働きやすい町に
- ◎誰もが帰りたくなる町 香美
- ◎価値観の違い
- ◎地域コミュニティで地域を変える
- ◎林業を通して多くの職業がある町

- 青木 勇磨……………76
- 岸 奏実……………81
- 小谷 竜生……………87
- 田中 暖花……………93
- 西谷 楓輝……………104
- 藤原 心大……………109
- 山根 恵……………114
- 井口 空羽……………122
- 坂中 心……………129
- 田邊 怜久……………134
- 中村 優月……………140
- 西村 楓也……………145
- 宮脇 雫……………149
- 山田 竜平……………155

☆ お わ り に

鳥取大学地域学部 ……159

地域創造系 9期生

2021年度卒業

私の地域活性化プラン

～体験を通して伝える香美町の魅力～

3年1組9番 黒田季月

1.はじめに

私は今まで地域について考えたことはありませんでした。しかし、村岡高校に地域創造系があることを知り地域について学ぶことに興味を持ち、地元が好きでもっと香美町のことを知りたいという理由と地域創造系で活動する先輩方の姿を見て、私もこんな活動がしてみたいと思い地域創造系に入りました。香美町の課題である少子高齢化、人口減少について考えることはとても難しかったですが、香美町について調べて、知らなかった魅力を沢山知る事ができ、さらに香美町のことが好きになりました。

2月上旬に見られる植物です。自ら発熱できるため、雪を溶かして頭だけ出すように開花します。そして、木々の生い茂っている山間部や川や池の近くの湿地に生息しているのが特徴です。



図2. 明日香村オンライン研修

また、2年生の夏には明日香村研修をしました。明日香村には文化財にもなっている大きな石碑や石造物が沢山あり、変わった形の石碑や石造物も沢山ありました。コロナウイルスの影響で実際には明日香村の石碑を見に行くことができず、オンライン研修になってしまいましたが明日香村の石碑の素晴らしさ、地域の魅力を沢山見つけることができました。その中でも特に私が印象に残ったものは3つあります。

2.地域探求で学んだこと



図1. ザゼンソウの石碑

地域創造系では、香美町の石碑について、なぜそこにあるのか、いつ作られたのか、どのような意味があるのかなどを調べてきました。例えば上の写真の石碑はザゼンソウがよく咲くことからここに作られました。ザゼンソウは1月下旬～

1つ目は、地域の人全員が世界遺産登録のために協力しているということです。明日香村では世界遺産登録に向け、そして、文化財である石碑や石造物を守るために取り組んでいました。そのため、景観から力を入れおり、例えば建物の高さを10メートル以下にし、瓦を使用するなど

規定をしていました。またコンビニの外観も町に合わせて瓦を使用し色も町にあった色が使われたりしていました。面越しではあったものの街並みが統一されていて雰囲気がとても良く、地域の大切な石造物を守るために取り組んでいるということがよく伝わってきました。しかしそれらは、ただ統一されているのではなく、住民の協力によって守られてきているものでした。そして地域全体で協力することの重要性を知りました。村岡で景観をそろえるということは簡単にできないかもしれません。しかし、何に対しても地域全体で協力していくことは香美町でも取り組むことのできるのだと思いました。

2つ目は、明日香村では江戸時代からの石造物を取り入れた修学旅行生を対象にした民家ステイや歴史に興味のある人を対象にしたツアーをしていることです。民家ステイでは一般の家庭に滞在し、明日香村でしか体験できない遺跡巡りや収穫体験、大和野菜を使った調理体験、薪割り作業、お寺体験、稲刈り体験などの生活体験ができるようになっていました。また実際に体験している様子が YouTube にものっていました。体験しなくても楽しさが伝わってくる動画でそこで見るだけでとてもわくわくしました。また、地域の石造物を取り入れ民家ステイをすることで明日香村の良さを知ることができ、住民と生徒の間にも絆が生まれるととても良い取り組みだと思います。もし、香美町で民家ステイなどの実際に香美町の生活を体験できる機会を作ることができるのなら、移住民を増やせるいい取り組みなのではないかなと考えました。

「何度も来たいと思ってもらえるようにすること」これは明日香村の方の言葉です。この思いがあるからこそ住民の協

力に繋がり、景観がきれいに保たれ、民家ステイができていたのだと分かりました。

3つ目はボランティアとして小学生が参加していることです。明日香村では子供たちが興味を持つように小学生がツアーのボランティア活動をしています。私は小学生からそのような取り組みができるのは地元を知る機会ともなりいい取り組みだなと感じました。私自身、高校生になって地域創造系の授業を受けるまで知らなかった香美町の魅力も沢山あり、地元について知っていたつもりでもボランティア活動などを通して知る事が沢山ありました。そのため、小学生のうちからボランティア活動ができることは明日香村の魅力を知らずともなるいい取り組みだと思います。私も積極的にボランティアに参加し、もっと香美町の魅力を知りたいと思いました。

また、研修を通して明日香村は、コロナウイルスが終息したら必ず行ってみたいと思えるぐらいオンラインでも魅力が伝わってきました。香美町もそんな風に思ってもらえるようにすることが大切なのだと思いました。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私がこれまで地域で活動しきて学んだことは沢山あります。その中でも特に私が印象に残っていることは3つあります。

1つ目は、ボランティア活動です。高校生になり、今までは選手、応援として参加する側だった「ダブルフルウルトラランニング」「美方残酷マラソン」に初めてボランティアとして参加しました。全国から集まる大会で人数もとても多く大変でした。しかし、私にははるばる印象に残っている言葉があります。それは「村岡高校の生徒がいるから来た」という言葉です。そ

の言葉を聞き地域を支えられているのだと感じることができ、もっと頑張ろう、もっと地域と関わりたいと思うことができました。ボランティアを体験したからこそ楽しさや達成感を感じることができ、また大会を実施することはランナーのためだけでなく、私たち高校生、地域の人との繋がりを作ることはとても大切なことなのだとボランティア活動を通して実感することができました。そして、村岡高校は地域になくはならない存在であり、ボランティア活動をすることで高校生と地域との繋がりができ地域が元気になっていることを知りました。地域の魅力、ボランティア活動の楽しさに気付き、高校生が地域と関わることの大切さが分かりました。

2つ目は、体験することの大切さです。1つ目でも話したようにボランティア活動でも体験したからこそ感じられた達成感や楽しさがありました。

私は2年生から紙漉き班に所属し活動してきました。そこで初めて紙すきに触れました。紙漉きを体験したからこそ原料の感触や、漉く長さによって全く違う和紙ができる感覚を知ることができました。また体験を通して感じられたからこそ紙を漉くことだけでなく、原料にも興味を持つことができました。原料を生かした「ヘグリスト検定」というイベントを企画し地域の人に体験してもらい興味を持ってもらうことができました。自分で作るからこそ達成感ややりがい、特別感を感じることができ、ただ作り方など工程を知るだけでなく、体験を通して知っていくことの大切さを学ぶことができました。

3つ目は、工夫をすることの大切さです。どれだけ普及していて便利なものを使っても地域によっては効果がないことがあ

るということが分かりました。それは、紙漉き班でイベントの告知をした際に感じました。私たちは、とても普及している便利な SNS を使えば、告知は簡単にできるものだと思い込んでいました。しかし、実際は高齢者の多い香美町では一部の年齢層の人にしか知ってもらえず、またより興味を持ってもらうためには SNS ではなく、広告などのチラシ、ポストカードなどを使用した告知方法が香美町には合っているのだと分かりました。ただのポストカードではなく、本物の和紙を一部貼り付けるという工夫をしました。そうすることで SNS を使用していない人にも宣伝することができ、実際に手に取って見ってもらうことで紙漉きをもっと身近なものに感じてもらうことができます。また SNS では感じることでできない魅力にも気付くことができます。このような取り組みから地域や場所によって工夫することの大切さを学ぶことができました。

4.地域の現状で感じていること

私の思う地域の現状で感じていることは、自分の地域に自信がない人や地域の魅力に気付いていない人が多いことと地域に活気がないということです。香美町には「ダブルフルウルトラランニング」「美方残酷マラソン」など全国から集まるイベントや但馬牛などもありとても魅力的だと感じます。ですが、そのような魅力の他にも香美町には沢山の魅力があります。例えば、「射添紙」「石碑」「地域行事」です。「射添紙」は50年ほど昔に冬の産業として盛んに行われていました。香美町に住む多くの人が「射添紙」について知らない、もしくは名前だけ知っている人たちがばかりです。一度は途絶えてしまったものでもそれは自慢のできる香美町の魅力だと思います。

5.地域に必要なと思われること

私が思う地域に必要なと思うことは、「体験」のできる場所やイベントなどを沢山作ることです。私は17年間香美町で暮らしてきました。しかし、香美町や自分の住んでいる地域の魅力について考えたのも、知ったのも村岡高校に入ってからでした。ボランティア活動や学校の授業を通して体験したからこそ、地域の魅力について興味を持つことができました。だからこそ私は、小学生など小さい頃から、ボランティア活動をしたり、自分の住んでいる地域の魅力を発見できるような取り組みをしたりすることが大切だと思います。また、香美町の人だけでなく、地域外の人にも「体験」してもらえるような機会を作ることによって香美町の魅力に気付き移住してくれる方もあるかもしれません。香美町の課題である人口減少に歯止めをかけるためにも「体験」できる機会を作ることには大切なのだと思います。

6.私の活性化プラン

5で書いたように、香美町には「体験」のできる機会を増やすことが大切だと思います。また明日香村の取り組みから地域全体が協力し合いその地域にしかできない特別なもの、ことを地域外の人にも知ってもらおうことの大切さを学びました。そこで私が考えた活性化プランは3つあります。

1つ目は明日香村のように、その場所や地域でしか体験できないことを取り入れたツアーやイベントを作ることです。香美町といえば、「但馬牛」や「カニ」「スキー」というイメージがあります。しかし、このツアーではあえてそれらのものを取り入れず例えば、地域の祭りや行事、私たちが調べてきた石碑やツアーに取り入れるようにします。そして、地域外の人

加できるようにします。行事はその地域によって全然違うので地域外の人が行事に参加してもとても楽しめると思うし、人口減少が課題となっている香美町、地域にも活気がでると思います。そして、体験するからこそ「また来たい」「何度も来たい」と思ってもらえると思います。そして体験した人が発信源となり香美町の魅力を地域外の人にも伝えてくれるのではないかなと考えました。

2つ目はそのツアーに地元の小学生がボランティアとして参加することです。私は高校に入り初めて地域の行事にボランティアとして参加しました。ボランティア活動の魅力にも気付くことができ、また地域の魅力にも気付くことができました。小学生など小さい頃からボランティアに参加することで自分の地域について知るきっかけにもなり、魅力にも気付くことができると思います。魅力を知ることによって地域のことをより好きになり、たとえ進学して一度香美町から出たとしても将来帰ってきたいと思ってもらえるのではないかなと思います。そして、子供からお年寄りまで幅広い年齢層の人が繋がりを作ることができ、地域が元気になり地域活性化に繋がると思います。

3つ目は、香美町のツアーやイベントを体験している様子の動画やYouTubeなどを使用し、誰でも見られるようにすることです。私は香美町の魅力を伝えるためには「体験」することが一番大切だと考えます。しかし、今はコロナウイルスの影響で簡単には地域外から人を集めたり、ツアーやイベントを企画したりすることはできません。そこで、ツアーやイベントの様子を動画に撮って誰でも気軽に見られるようにします。そうすることで少しでも魅力に気付いてくれて、コロナウイルスが収まってツアーやイベントができる

ようになれば、動画を見た人が実際に参加してくれるかもしれません。

7.まとめ

この3年間、コロナウイルスの影響で思っていたような取り組みをすることができなかった部分もありました。しかし、地域創造系として、また地域活性化プロジェクトの紙漉き班として活動してきて、他の高校ではなかなか体験することのできないことを村岡高校に入って経験することができました。自分にとってとてもいい経験となり、地域の魅力を知る楽しさ、新しい魅力を見つけることの楽しさや嬉しさを知りました。また、地域を見る目が変わり、外を歩いているときに周りを見るようになって、自分の住んでいる地域でもこんな所にこんなものがあつたのかと新しい発見を沢山することができるようになったと感じています。石碑を見つけると「あれは何の石碑なのか」「どんな意味があるのか」などを気にして見るようにもなりました。私は自分地域を学び新しいことを知る楽しさや喜びをもっと沢山のの人に知ってもらいたいです。地域の人だけでなく地域外の人にも「体験」を通して何度も香美町に来たいと思ってもらえるような取り組みができたらいいなと思います。また、少しでも香美町や住んでいる地域について知り、自信をもってもらいたいです。3年間で学んできた取り組みを生かし、次につなげていきたいと思っています。

私の地域活性化プラン

～誇れるような地域をつくる～

3年1組11番 田中 昂支郎

1.はじめに

私が村岡高校の地域アウトドアスポーツ類型地域創造系に入った理由は、香美町をもっとよく知り、そして活性化させたい。という理由ではなく、大学に進学できるということを聞いたからです。なので、初めは地域探求の授業にあまり興味や関心がなく、「やらないといけないからやる。」という気持ちでやっていました。しかし授業を受けていく中で香美町の歴史や文化、自然や住民などに触れ、自分がこれまで知ろうともしてこなかった香美町を知ることができ、興味を持てるようになりました。そしてこの気持ちは、今香美町が抱えている問題を解決して未来に残したいという気持ちに繋がっていききました。このまま問題を解決せずに放置していけば香美町は消滅してしまうかもしれません。そこで香美町の問題の一つである「地域活性化」について3年間学んできたことを元に「私の地域活性化プラン」を述べたいと思います。

2.地域探求で学んだこと

地域創造系は学年ごとに「何に重きを置くか」が異なっています。1年次では「地域を知る」として自然(山、川、海)を学びました。

山では、実際に神鍋山などの山に入り植物や樹木について学びました。私がこれまで知っていた植物はごく一部で、学べば学ぶほど多くの植物を知ることがで

き、さらに地域の自然について理解を深めることが出来ました。また、獣被害やクマの生態についても学びました。山の植物とクマの関係や、遭遇した際の対処法などを知ることが出来ました。今思い返せばクマや危険生物に遭遇する可能性がある中で何も対策をせずに山に入っていたので、もし遭遇してしまっていたらと考えるととてもゾッとします。これから山に入る時はしっかりと対策を講じたいと思いました。

川では水生昆虫の生態を学びました。そこでは村岡を流れる昆陽川に行き生態調査を行いました。その結果、昆陽川にはカゲロウやトビケラなど多くの水生昆虫が生息していることが分かりました。生物が住みやすい環境ということは水質が良くきれいな環境であるため、これからはさらに水質汚染に気を使おうと思いました。

海は、竹野シュノーケリングセンターに行き、シーカヤックとシュノーケリングを体験しました。シーカヤックは1度体験したことがあったので比較的すぐに行きたい方向に行けるようになり、海岸沿いの地層を見て回りました。竹野海岸で見られた地層は主に流紋岩で、およそ300年前の火山活動が作り出したと思われれます。

これまでの私は地層に全く興味が無かったのですが、この体験でその土地の成り立ちが分かりました。

シュノーケリングは初めてでした。海の中ではクロダイやたこなど様々な海洋生物が見られました。しかし同時にゴミも多く見られ、このままゴミが増え続けると生物が住めなくなってしまう。この現状を少しでも周りに発信して私たちが何か一つでも心がけ、この現状を改善していきたいと強く思いました。

山、川、海のそれぞれを学び、どの自然も繋がりがあることがわかりました。山に雨水が溜まり流れ出すことで川となり、そしてその川が海に流れ着き、海の水が蒸発することで再び雨として山に降ります。この自然のサイクルがこの地球を形成し、昔から今までずっと繰り返されてきました。しかし、近代化が進みこの自然のサイクルに害を与えています。今のまま何もせず近代化が進むと、間違いなくこの自然、地球は滅んでしまうと思います。近代化を進めることで人間は住みやすくなりますが、人間が一方的に利益を求めてしまうと結局自らを滅ぼすことになると思うので、これからは自然と人間の両方に利益が出るような世の中が望ましいと思いました。この現状を変えるために行動できるのは人間しかいないので、どんな些細なことでも良いので「まずはわたしからそしてそこから周りの人へ」これを意識して行動していこうと思いました。



図 1. 授業の様子

2年次では本来なら石碑について実際に見て学ぶはずでしたが、新型コロナウイルスの影響によりたくさんの活動が中止になってしまいました。なので実際に見るのではなく、個人で不思議だと思う石碑を調べ、それをオンラインで発表するというものになりました。最初はオンライン授業というものに戸惑いもありましたが、こういう形の授業もあるのだと体験できてよかったです。また、本来なら明日香村に行き、石碑について現地の方々にお話を伺う予定でしたが、これも新型コロナウイルスの影響によりオンラインになってしまいました。明日香村は香美町と同じく、少子化問題に悩まされている町で似ている点が多くあり、香美町の活性化に繋がられるような参考になる話ばかりでした。具体的には、明日香村には「石碑」が沢山ありそれを観光に使うことで地域活性化を図るというものや、明日香村の人々の生活を体験できる「民家ステイ」という事業に取り組んでいることなどでした。これらは十分香美町に生かせることだったので、香美町だけでなくどう活性化させるかを考えるのではなく他の同じ状況にある町と協力して解決していく手立てが必要なのではないかと感じました。



図 2. 授業での発表風景

3年次では、香美町の方々にもあまり知られていないような石造物に焦点を当て、その石造物を知ってもらうために動画を作りました。私は香美町の岡見公園にある「小人の墓」というものを調べ、動画作成をしました。私が調べた「小人の墓」は崖と崖の間にあり、実際に見ることが困難な場所にありました。ですが動画を作ることで手軽に誰でも見ることができ、こういう危険な場所にあるものは動画を活用した方が良いということに気がきました。

全学年を通して感じたのは、今後大人だけが地域活性化を図るのではなく、高校生など若者の力がその地域を動かしていく主体になるということです。そして、若者たちが地域活性化に意欲的になることで、町も良い方向に進んでいくことを学びました。

3.地域の活動で学んだこと

私たちは、総合的な探究の時間に「村高発地域元気化プロジェクト」を行っています。全校生が5つの班に分かれて地域と関わり、地域を元気にしようという取り組みです。私は、地域福祉班に所属しており、老人ホームや子供教室に行く機会がたくさんありました。

老人ホームでは、高齢者の方と遊んだり、マッサージなどをして関わり合いました。そこで高齢者の中には障害を抱えておられる方もおり、ボールを握ることが困難な方や耳の近くで話さないと会話することができない方もおられました。私が老人ホームに行って良かったことは、高齢者を労わる気持ちが育まれたことです。高齢者の身体について理解を深めることができ、これまで以上に労わろうという思いが強くなりました。一方で失敗したことはコミュニケーションがあまり

とれなかったことです。私は高齢者の方と何を喋っていいのかわからず何の話も出来ませんでした。特に、遊んでいる時にあまり声を出されていなかった方や、少し内気な方とはどうコミュニケーションをとっていいのかわかりませんでした。この活動の目的として、地域の方々とのコミュニケーションは必要不可欠です。そして村岡は少子高齢化が進んでいることもあり、高齢者と関わるが多くなります。その中でコミュニケーションがとれなかったことは今すぐに直すべき課題だと感じました。

子供教室では射添小学校に行きそこで放課後残っている小学生と遊んだりして関わりました。小学生とも私はあまり関わらないのでどう接すればいいのかわかりませんでした。あらかじめどんな遊びをするかなどの計画を立てても私たち高校生の言うことを聞いてもらえずとても苦労しました。良かったことは状況に応じて臨機応変に対応できたことです。私たちが計画した遊びを子供達が楽しく遊んでくれるとは限りません。中には、「つまらない」と言われることが多々ありました。そんな時計画より早くその遊びをやめ、すぐに次の遊びをすることで少しでも子供達に楽しんでもらえるよう対応することができました。失敗したことはうまく子供達の輪に入れなかったことです。私は計画通りに進むよう違うことをしている子供に注意をしていました。しかし、振り返ってみると注意ばかりしてくる高校生と遊ぼうとは思いません。この活動では楽しんでもらえることを第一としているのでいくらコミュニケーションがとれてもそれは成功とは言えないので、しっかりと子供達の立場になってどうすれば楽しんでもらいつつ、うまく子供達を促すことができるかが大事だと

感じました。

地域福祉班では初めてのことがたくさんありとても大変でしたが、子供から高齢者まで幅広く関わることで初めて地域というものを感じることができました。私たちはその中心であり、幅広い地域の方々の架け橋のような存在であることを実感することができました。

4.地域の現状で感じていること

私が地域の現状で感じていることは2つあります。1つ目は人口減少と少子高齢化が進んでいることです。私はこのまま少子高齢化が進んでいくと香美町の産業の後継者がいなくなり、衰退していくと思います。香美町の漁業は、香住カニやホタルイカなどの漁獲量が多く、全国から注目されています。これは香美町にとって大きな利点であり、地域活性化にも充分つなげられると思うので、後継者がいなくなってしまうのはとてももったいないと思います。また、農業も有名です。香美町の土地は農業に適しており、美味しいお米や野菜などが作れます。また、棚田百選に選ばれている棚田もあり景色もとても綺麗です。しかし、後継者がいなくなっている影響で田畑が荒廃している所が増えつつあります。美味しい作物が育ち、景色も綺麗と言う2度美味しいこの産業をこのままにしておくことは香美町全体にとってマイナスです。

2つ目は活気があまり感じられないことです。私は村岡に高校1年生の時に引っ越してきました。最初は商店街があると聞いて少しは賑やかな街なのかと思っていました。しかし、来てみると物静かでとてもさびしかったです。せっかく商店街というものがあるのにもったいないと思いました。

5.私の地域活性化プラン

私の考える地域活性化プランは「スポーツと地域の特色」を組み合わせるというものです。なぜなら村岡では年に2回、全国規模のマラソン大会を開催しているからです。その大会は「美方残酷マラソン」と「村岡ダブルフルウルトラランニング」です。参加人数は美方残酷マラソンが約3000人、村岡ダブルフルウルトラランニングが約2000人と、多くの方々が参加しています。私たち村高生はスタッフとして毎年参加しています。しかし、私たちはコロナの影響により1年生の時しかマラソン大会が開催されませんでした。私は参加して下さった方々にアンケートを取る仕事をしていました。そこでのアンケートで「なぜ参加して下さったのか」という質問に対して「景色がとても綺麗だから」という答えがとても多かったです。つまり、残酷マラソンに参加して下さる方々は走ることはもちろん、村岡の豊かな自然も楽しんで下さっています。なので、このようにスポーツを通して地域を知ってもらうという活性化プランが良いのではないかと思います。香美町では海、山、川があり、冬になると雪がたくさん降ります。なので、マラソンやスキー、水泳など様々なスポーツができる地域です。そこで様々なスポーツを体験・練習できる施設、例えばプールやスポーツジム、ランニング場などを作り、その施設に隣接するように宿泊施設を作ることによってスポーツ目的の方々が宿泊施設で香美町の特色であるカニや但馬牛などを食べてもらうことによって香美町の良さを知ってもらえるのではと思いました。良さを知ってもらうことで定住を考えて下さる方々も増え、人口減少問題の解決案にもなると思います。

6.まとめ

私は村岡高校の地域創造系での学習やフィールドワークを通じて、今まで全く興味がなかった地域が気になる存在に変化しました。これまでの活動を振り返ってみると、私たち高校生に出来ることはほんの些細なことだったかもしれませんが、高校生でも地域のために出来ることが確かにあると分かりました。私たちが地域の魅力を知り、それを少しでも多くの方に SNS など発信することで、この地域に興味を持っていただきたいです。そして地域を活性化することができたらいいなと思います。これからも地域について多くのことを学び、少しでも地域に関わりたいと思います。

私の地域活性化プラン

～元気な地域づくり～

3年1組14番 田中 琉偉

1.はじめに

私は村岡高校の様々なボランティア活動に興味を抱き、村岡高校の「地域創造系」に入りました。ですが、香美町の地域活性化に興味がありませんでした。しかし、地域創造系に入り「地域探求」という学校指定科目の中で香美町について学び、考えることで香美町の特色を理解することができ、自然豊かな香美町を今よりもっとよくしたいと思うようになりました。以下「地域探求」の中で私が学んだことをまとめ、その上で考えた地域活性化プランについて述べていきたいと思えます。

2.地域探求で学んだこと

(1)地域学入門

一年次の地域学入門では「地域を知る」を目的として活動してきました。

まずは、自分たちの住んでいる地域の歴史物や不思議に感じたものを取り上げ、調査しました。私は、不思議に思った「赤岩」と呼ばれる場所について調べ、昔処刑場だったのではないかとということがわかりました。その他に地域ごとにそれぞれの特有があるということもわかりました。そして、小代区にある「名牛ぬい号の碑」やお地蔵様など、他の地域の人にも知ってほしいと思うようなことがたくさんありました。しかしながら、中にはそこにある碑について誰も知らないという問題もありました。これらの歴史をこれからも守るためにも、自分たちが地域の歴史について知る必要があると思えました。そ

のために、この授業を通して、地域の方と交流してインタビューをして地域についての知識を得ました。

歴史物の調査の次に行ったことは、香美町の自然についてです。ここでは主に山から海、香美町の地質についての学習をしました。そこで改めて感じたことは、但馬は本当に豊かな自然があるということです。山を流れる川の水は夏も冬も温度が低く、西日本で唯一、湧水湿地が村岡にあります。さらに川の調査では、サタ・チャレの子供達と一緒に水中昆虫調査をしました。講師の方をお呼びし、捕獲した水中昆虫を標本にする体験もしました。たくさんの水中昆虫がいるということは、川がきれいだという事です。そのため、但馬の川では生き物が生きる上で住みやすいということがわかりました。

これらのことから、ここ但馬の自然というのは生き物が住みやすいきれいな環境であることを知りました。今、世界的に環境問題がよく取り上げられていますが、自然を維持するために生態系の何一つを欠けさせることはいけません。だからこそ、但馬の自然を多くの人に知ってもらい環境保全に協力してもらうことが大切だと思えました。これからも人と自然が共存する町づくりをすべきだと思えました。

(2)地域探求 I

二年次の地域探求 I では「地域を深める」を目的として活動をしました。この学年から本格的な地域活性化プロジェクト

に向けての取り組みが始まりました。そのために奈良県明日香村に研修合宿に行く予定だったのですが、新型コロナウイルス感染拡大・防止の観点からオンラインでの研修となりました。このオンライン研修では、現地の人にお話を伺うことができました。

明日香村には「猿石」などたくさんの石造物や石舞台古墳といった古墳など様々な観光名所もあり、それに加え夏にはあまごのつかみどり、秋には彼岸花祭りといったシーズンごとに様々なお祭り行事があります。そして近年は学校の修学旅行先としても明日香村に行く学校もあります。これからますます知名度も上がってくる事が予測されるような地域の実際の取り組みを参考にする貴重な研修となりました。研修をして一番印象が強かった取り組みは「民家ステイ」という取り組みです。この取り組みは近隣の市区町村と連携して行っています。民家ステイで大切にしていることは「相手を思う心、自ら伝える力」「共に調理し、共に食べる」「ほんものの歴史に触れる」の3つでどれも生きる上で大切なことです。実際のホームファミリーの方はできることはやらせる精神で、実の子供のような思いで接してくれるのも民家ステイの特徴とも思いました。

年々受け入れ人数、延べ泊人数、団体数共に増えている現状にあり、明日香村のホームページには実際に民家ステイを体験した学生の感想ものせられていて民家ステイの満足度、評価ともに右肩上がりの現状にあります。

そして、私が明日香村の現地の方の言葉に深く響いた言葉は「地域が元気になるのは、地域愛に比例する」という言葉が

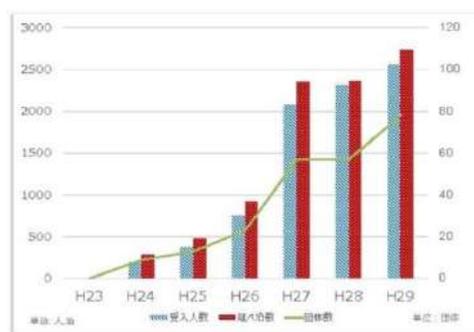


図3.民家ステイ入居者

忘れられません。¹これまで香美町に必要なものは何かと考えていましたが、まず自分の好きな香美町を紹介する姿勢が大切なのだと知って、地域と共に活性化をしていかなければいけないのだとわかりました。

(3) 地域探求Ⅱ

三年次の地域探求Ⅱでは「地域に提言する」を目的として、一つ誰もが見ることができる動画という形で残すなど活動を具体化してきました。

また、毎年行われている町長講演会では、浜上町長より、直接香美町の現状や課題、今後の取り組みについて聞きました。香美町は18歳までの医療費無料化や香美町ポスターの作成、新型コロナウイルス感染症の支援金など様々な活動を行ってきました。これらの活動はすべて素晴らしいことだと思いました。町長さんをはじめとする職員の方々が香美町を良くしようとする姿勢がよくわかりました。ここで明日香村の例をもとに私が感じたことは、香美町は町民を親身に考えることです。明日香村を例にすると、景観整備を徹底しているが役所の外観だけが適していないと村民から意見があったので景観に合った外観に改装するなど、住んでいる方々の意見を大切にし、尊重で

¹ 明日香村/奈良県公式ホームページ

きるところは本当にすごいと思います。町長や職員の方々の行動力の一番ですが、それができるだけの魅力が存在しているということも大きな要因だと思います。そして香美町には、まだスポットのあたっていないところもたくさんあります。これらのことから私は、香美町はこれからどこかの分野で評価され、たくさんの方に知られると思います。

これまで多くの講演会を聞いてきましたが、そこでわかったことは何か一つのことに着眼点を当てるということです。地域が活性化している地域として、奈良県明日香村や島根県海士町などがありますが、これらの地域に共通していることは何か一つに着眼点を当てているということです。明日香村では「生きる力」、海士町では「地方行政」のように地域で大々的に自慢できることを決めて徹底的に活動をしています。なので、香美町といえばこれ！というのを決めて、それをアピールすることが大事だと思います。

3.地域活動から学んだこと

村岡高校では「地域元気化プロジェクト」というテーマのもと、総合的な学習の時間に主に5つの班に分かれて活動を行っています。

私は環境 A 棚田班を二年間、環境 B 森の健康診断班の二種類の班に所属していました。環境 A 棚田班では小代区貫田の「うへ山棚田」で棚田の保全を目的として実際に稲作の体験を通して棚田のことについて学習しました。この棚田は日本棚田百選に選ばれていて四季様々な景色を見ることができます。香美町のポスターに採用されていたりするなど、風景を撮影する上ではとても魅力的な場所ともいえます。

さらに棚田班では作ったお米を毎年、

この総合的な学習で学んだことを発表し合う「村校フォーラム」で販売もしています。自分たちが作り、自分たちが販売するというところまでを環境 A 棚田班は一年を通して活動します。

しかしながら、すばらしい景色とは裏腹に、この棚田は大変な苦労があって保全されています。まず一つに人手不足です。地元の棚田を守るために結成された「武勇田」。ですが、高齢化が著しく進む香美町では棚田を管理していた方の生産が困難になり、武勇田の方々に土地を譲られてしまいます。武勇田の方々は普段仕事をしている方々であり、そのメンバーにも若い人は少ないです。だから、このうへ山を守っていくためには、もっと多くの若い人に棚田への興味をもってもらうことが必要になってきます。そして担い手を育成することも必要になってきます。

そのために、地元の小中学生に実際に田植え体験をしてもらうことやみかた残酷マラソンの時、応援に来られた方々に棚田ツアーガイドを行っています。

ですが新型コロナウイルス感染拡大・防止の観点から私が在学しているときは活動することができませんでした。

ですが、積極的に活動を行えば興味を持っていただけるし、棚田について知ってもらうことができます。この他に私は棚田保全募金を行うのもいい案だと思います。資金を集めることができれば、機械や武勇田の活動費にもなり、より保全活動が活発化すると思います。他にも、農業体験をしてみたい他地域の方に米を作ること、その幸福感を知ってもらいたいです。そのために私はパンフレットやホームページに専用ページを作成することが、人手問題や後継者問題を解決することができるのではないかと思います。こうい

った活動がきっかけで興味を持っていただき担い手や稲作をする方が増えて、これから先も棚田米が作り続けられて、食べられることを望みます。

他にも村岡高校では残酷マラソン、ダブルフルウルトラランニングの運営ボランティアとしても参加しています。私は名前応援やランナーの方へのアンケートを行い、名前応援では、ランナーの方から「よし！頑張る！」とコメントをいただき、とても嬉しかったことを覚えています。アンケートでも、書いていただいた皆さんから「また参加したい」、「高校生の活動が良かった」と言っていたき、マラソン大会の面白さと、スタッフとしての活動のやりがいを感じることができました。

4.地域の現状・改善

私は高校三年間の中で授業等、様々な場面で地域と関わらせていただきました。その上で私から見えてきたことは、地域内での関わりが少なくなってきたことです。現在は新型コロナウイルスの影響もあり、様々なイベント・お祭り行事が中止という風なことになっていますが、これまで各地域で行われていた伝統的な行事や活動が人口減少でやめてしまっていると聞きます。人手不足により止めざるを得ないというのは仕方のないことですが、そこから先がなく、どうにかしようとする雰囲気を感じられませんでした。だから地域内で協力し、一体となって行うべきだと思います。そうすると地域が積極的になり、地域の一人一人にやりがいを感じるようになり、おのずと地域内の繋がりが生まれて元気になると思います。

そして、人との繋がりもそうですが地域の景観も問題があると思いました。自然も豊かで田畑もあり、田舎を堪能した

いという人やゆっくりしたい人にはとてもいい雰囲気だと思います。ですが、そういう雰囲気の中に空き家が放置されているという現状もあり、自然豊かとは違い「廃れた」という方が目立ってしまっています。

これらのことを改善して、地域内の関わりを増加させるためには、空き家や空き地を再利用することが必要だと思います。例えば、空き地はこどもや地域の方々が使う遊び場、グラウンドゴルフなどに使う、空き家は地域の方がデザインし集まることのできる場所として利用するということです。これによって、地域内での繋がりや関わりも増え、地域が元気になると思います。

次に夜間の街灯を増やすことです。私の住んでいる村岡区では夜間に散歩をしている人や走っている人を頻繁に見かけます。私もよく歩いていて、通りすがりの人と交流があったりします。ですが、様々な石碑ある八幡山公園では夜間は真っ暗で街灯がありません。昼間みる石のオブジェクトと夜にみるオブジェクトはまた違う雰囲気をするとします。さらに八幡山内や周辺の清掃作業・整備が必要だと思います。これを行うことで景観が保護され、地域の新たな活気になると思います。

他にも地域の方が地域を知らないということ。各地域にある様々な魅力や観光資源、伝統的な行事などはこの地域にしかない文化で、地域の方や他地域の方に知ってもらいたいと思います。それをするためにも、まずそれぞれの地域内で地区の放送があるので、情報交換をし合うなどをしなければいけません。集落調査で行っているマップ作りのように、何らかの形で残せるものを作成し、文化や歴史が消滅しないように受け継がれて

いくような発信方法が大切だと思います。

5.私の地域活性化プラン

私がこれまで地域のことについて学んできたことから考える地域活性化プランは、「みんなのアイデアで町を元気にする」です。先ほど述べたように、香美町には地域内で関わりを増やすことが必要だと考えています。そこで、私は現在高校生が地域に空き家を再利用するなどさまざまなアイデアを提案しているように地域の人々のアイデアにも焦点を当ててみました。アイデアがたくさんあれば何が必要なのかが明確に判断することができます。まずは、地域の人が気軽に意見を投稿できるように意見箱をそれぞれの地域に設置し、アイデアを集めるということが最も現実的な施策だと思います。そして、景観整備に力を入れることも大切な事だと思います。景観というのは新たに移住をしている人に、大きな印象を与えるものだと思います。豊岡市の出石も景観で観光客を集めています。明日香村も同様に景観整備を徹底しています。まず、目に入る景観を整えることで地域が元気になる一歩だと思います。

ここ香美町をこれからも元気に、そしてより多くの人に知っていただくためにも地域一体となり、たくさんアイデアを考え、それをもとにした町づくりをしたいと思います。

6.まとめ

私はこれまでの三年間地域創造系として様々な活動を行ってきました。地域について知り、関わり、地域について考えてきたこれまでの活動は将来どこかの分野で生かせる経験でした。

香美町に関わらず、少子高齢化などの問題を抱えている地域はあると思います。

私はそんな地域が少しでも元気に活性化するために、香美町や明日香村などについて考えたように、地域を知り、そこから課題、魅力を探し、その地域にあった改善策を導きだせるように将来の活動に生かしていけたらそれが一番いいと思います。

私の地域活性化プラン

「私が住んでいる地域を知る」

～私が守りたい地域～

3年1組15番 鉄屋 仁

1.はじめに

私は、地元の消防士として生きていきたいという思いから、まずは自分がこれから守っていく地域を知ることが大切だと考え、地域創造系を選択しました。私たちの学年では、新型コロナウイルスの影響で、地域探求の活動が大きく制限されてしまいましたが、授業に取り組んでいく中で、地元の知らなかったことや、現在香美町が抱えている問題がたくさん見えてきました。これらのことを踏まえ、私が考える地域活性化プランについて、紹介していきたいと思います。

みについての獣被害講義が最も印象に残っています。ツキノワグマの身体能力や、行動データを用いてツキノワグマの基本的な性質について学びました。ツキノワグマは、目が悪く接近しないと気がつかず、嗅覚はイヌ並みに鋭いなど、新しく知識を得ることがたくさんありました。



2.地域探求で行った主な活動

私たち60期生は「国際的、芸術的、文化的アプローチ」とテーマを掲げ、地域探求に取り組んでいきました。3年間の地域探求の中で、学年ごとに様々なことを学びました。

一年生の地域学入門では、地元の自然と関わりながら、香美町の自然の代表である「山」、「川」、「海」が地域の重要な財産であることについて学びました。自然と人間が共に暮らしていくことができる地域づくりに関する授業で、ツキノワグマの出没要因と被害防止を目指した取り組

クマは山の食料がなくなると、私たちの里に食料を求め悪さをします。それを防ぐために行っているのが、「クマの学習放獣」です。これは自然と人間が共存していくうえでは、最適な活動だと思います。クマをただ捕殺するのは、共存することとはまるで違います。この活動は、クマを捕獲し、いやがる刺激を与え、人や集落を忌避するように行動パターンを修正するというものです。簡単に言うと、クマに、里に下りてきてはいけないということを覚えさせる

というものです。クマが嫌がるものとして、唐辛子スプレーやゴム弾・花火弾などがあります。私はこの講義を通じて、クマだけでなく、自然と共存することを前提とし、地域活動を行っていく必要があると思いました。つまり、「持続可能な開発」のような考え方が今後の地域、特に自然を1つの財産としている香美町は不可欠であると感じました。

2年生の地域探求Ⅰでは、地元の特徴を生かし、地域活性化を目指した取り組みを考えていきました。

明日香村オンライン研修では、明日香村が取り組んでいる地域活動について学びました。古墳の世界遺産登録を目指した取り組みや、景観保全、飲食店の増設など様々な地域活動を進められていました。その中でも私が興味を抱いた活動が2つあります。1つ目は、石造物の宣伝方法です。明日香村には、猿石や鬼の雪隠など石造物だけでも沢山の種類があります。そして、それらのレプリカを作成し東京などの大都市で宣伝するという取り組みをされていました。この宣伝方法のメリットは、実際に現地に訪れることができない人でも、実物の大きさを知ることができるなど、写真で見るより印象に残りやすい点です。私はこの宣伝方法を聞いたとき、石造物がたくさんある明日香村ならではの取り組みで、とても地域に適している活動だと思いました。2つ目は、明日香村にある建物のデザインが一般とは違うところです。明日香村は、歴史が深い地域としても有名です。その歴史的雰囲気が建物のデザインにも表れています。例えば、コンビニエンス

ストアの建物が一般の建物と大きく異なっています。ほかにも、地域局のデザインが寝殿造りのような建物になっているなど、明日香村は地元の特徴をしっかりと活用し、明日香村にしかないユニークな活動をされていることにとっても興味を持ちました。



明日香村の方々の話を聞いていく中で、地元の方々の地域愛の強さを感じました。ただ地元が好きだけで終わるのではなく、地域の問題や活動に町の人たち全員で真正面から取り組む姿勢が、明日香村の活性化に大きくつながっているポイントだと思います。そして、地元にあるものに誇りを持ち、地域を愛する姿に、香美町も負けてられないと、良い刺激を受けた研修でした。

その後、明日香村オンライン研修で学んだことを、私たちが住んでいる香美町に置き換え、私たちの地域の特徴を改めて見つめなおし、それをどのように生かしていくのかを考えていきました。その結果、多くの生徒は香美町の石造物に関心を持っていることに気が付きました。理由は、地元にある歴史的なものを調べたとき、ほとんどの生徒が、石碑や石造物を取り上げていたからです。

まず、香美町にはどんな石造物があるのか、みんなで石碑巡りを行いました。秋には、今までやってきた取り組みをまとめ、村高フォーラムで発表しました。発表内容としては、明日香村の取り組みを参考にし、今私たちが取り組んでいる石造物をメインとした地域探求の活動です。実際に見に来られた来賓の方に、興味を持っていただけたので、とても良い内容だったと思います。

そして現在、3年生の地域探求Ⅱでは、今まで調べてきた香美町にある石造物を再度詳しく調査し、それを卒業制作として動画に収めることにしました。コロナ禍でも香美町のことをさらに知ってもらえるよう取り組んでいます。

3.地域の現状と課題

地域の問題は、各地域によって様々なものがあります。その中でも今の時代、香美町を含む田舎地域の大きな問題となっているのは、人口流出に歯止めがかかっていないことです。特に田舎に住んでいる若者たちが大都市に出ていく傾向が多いように見られます。原因は様々ですが、大きく分けると2つあると思っています。まず2つ目は、子供が減少してきているのに対して高齢者の増加が進んでいること、つまり少子高齢化の問題です。2つ目は、良質な雇用機会の不足です。私はこの2つが大きな問題だと考えています。3年生の時に受けた町長講演会でも人口流出の問題を提示されていました。今後の課題としては、この大きな原因を解決し、人口を維持していくことが大切になってくると、私は

考えています。

4.地域に必要なと思われること

上記に続き、香美町には若者の存在が今後の地域活性化に大きくかかわってくると思っています。人口流出を防ぐためにも、私が必要だと考えることは3つあります。1つ目は、ワークライフバランスの実現です。良質な雇用機会の不足が人口流出の原因であるように、仕事と生活の調和や長時間労働の削減が重要になってきます。労働者と企業の間を保つため、そして地域に安定した雇用を創出するためにも、必要になってくる要素だと思います。2つ目は、香美町でしかできないことを地元の特色を生かし若者の興味をひくことが必要だと考えます。香美町の特色はやはり「山」「川」「海」の自然環境だと思います。実際に冬になるとスキー観光として訪れる都会の方々も多いです。地元の特色を最大限発揮し、さらに若者の興味をひくことができるかが重要だと考えます。3つ目は、野生動物の対策を徹底することです。香美町ではクマやイノシシ、シカ、などさまざまな動物の被害をよく耳に挟みますが近年はサルの被害が増加していると思います。私は実際サルの集団が食べ物を求めて家の近くまで来た経験があります。その時は本当に恐ろしい経験をしました。香美町は自然豊かな地域ですから、動物が出てくるのはあたりまえなので、しっかりと対策を考え、安心して暮らしていける地域を作っていくことが必要です。この3つのことが今の香美町に必要なことで、これらを解決していくことで、

人口流出の歯止めにもつながってく
ると思っています。

5.私の地域活性化プラン

私が考える地域活性化プランを紹介したいと思います。まずは、予約制のタクシーをつくり、高齢者の移動を確保することです。現在香美町には、町民バスが主な移動手段となっています。私は、集落調査に行ったときに住民たちが不便に感じていることとして最も多かった意見が、移動手段がないということでした。高齢者が多い香美町では、もうすでに免許を返されている方たちが多く、移動手段に困っている高齢者が増えています。ここで、私は疑問に思いました。なぜ町民バスは使われないのかと。実際に地域の方々の意見を聞くと、「バスでは時間が決まっ
ていてただでさえ普通のバスの本数が少ない香美町だと、ちょっと出かけるだけでも丸1日がつぶれてしまう」ということを言われていました。確かに香美町はバスの通っている数が少なく、時間が決まっ
ていて帰りたい時間にも帰れないことがあることなど、不満が高まるのもわかります。ここで私は、香美町に予約制のタクシーなどがあれば便利だ
と思いました。たまたし、ここで発生する問題があります。それは、どのように高齢者が予約するかということです。私は、高齢者の方々の家に一台ずつタブレットを配布し、専用アプリを香美町が作り、簡単に予約ができるようにすればよいと思
いました。しかし、高齢者の方々に、「使い方がわからない」といわれる方が必ず出てきます。使い方の講演会やマ

ニアルガイドなどを作成し使える
ようになってもらうことが私なりの
解決策です。今の時代、高齢者の方
でもインターネットが使えると、さ
らに地域活動の幅が広がっていきま
す。さらに、予約制のタクシーにす
ることにより、バスに比べ無駄足が
かなり減ると思っています。香美町
では、バスを利用する人数が少ない
ので、私は予約制のタクシーを作れ
ば、高齢者の移動手段の確保に最適
だと感じました。

次に、私が考える若者たちの注目を集めるものは、香美町内でeスポーツイベントを開催することです。そもそもeスポーツとは、コンピューターゲームをスポーツ競技として行うもので、最近に出てきたものになります。私は、地域の特色を生かし、地域活性化をすることはもちろん大切なことですが、若者を中心にターゲット層を広げるなら若者が興味を持てるものでないといけ
ないと思います。そんな中、今世界中から注目を集めているeスポーツは、若者の興味を引くのに最適だと思
いました。私が考えるeスポーツイベントの具体例は、まずチームで出場するイベントとします。理由は、団体戦にすることにより友達と気軽に参加できるようにするためです。そして、優勝したチームには、香美町に関連したグッズや但馬牛、お米など香美町を代表する商品を景品とし、地元のことをさらに知っていただけるようにします。今のご時世、オンラインを使ったイベントがたくさん開催されています。eスポーツはオンラインでできるものなので、そう
いった点でも若者の注目を集める地

域イベントになると、私は考えました。

6.地域探求で学んだこと

3年間の地域探求で、学んだこと、身についたことが3つあります。1つ目は、課題を自分たちの手で発見し、解決していく力です。鳥取大学との連携授業の中で、グループワークで課題をお互いに出し合い、解決するにはどうすればよいか話し合う機会がたくさんありました。地域のことを考えることはもちろん、今社会で重要視されているコミュニケーション能力が自然と身に付きました。話す力というのは、なかなか自然に身につくものではありません。そのことを、地域探求の活動で知りました。2つ目は、高校生の間に地域探求を行う重要さを知りました。村岡高校の大きな特徴である地域探求ですが、なぜ行っているのでしょうか。私が思うことは、将来社会に出ていくときに必ず役に立つ経験ができるからです。進学や就職、面接試験などの時、地域探求を行ってきた経験を話すことができます。社会に出たとき、地域探求で学んだ問題を解決する力を存分に発揮することができます。初対面の人でも、地域探求で培ったコミュニケーション能力でうまく対応することができます。このように、高校生の間に地域探求を行うことには、将来役に立つメリットがたくさんあります。これを地域創造系の活動を通じて、学ぶことができました。3つ目は、地元の素晴らしさを深く実感することができたことです。高校に入る前から、地元のことは大好きでした。そ

んな地元を消防士として守りたいという夢がありました。3年間の地域探求の中で、地元に住んでいたのに知らなかったことや、驚きと発見でいっぱいになりました。自分たちの住んでいる地域のことを知るということは、普通に住んでいるだけでは知ることが難しいと思います。地域探求でその機会を与えてくださって本当に、地域創造系に入ってよかったと思いました。時には忙しくて大変だった時期や、やりたくないこともたくさんありました。それでも私は地元が、そして村岡高校が大好きです。3年間ありがとうございました。

私の地域活性化プラン

～若者の視線で地域づくり～

3年1組16番 富田 樹実

1.はじめに

私は、幼い時から祖父母のいる関宮によく遊びに来ていて但馬地域の歴史や自然について知りたいと思っていました。また、母は村岡高校が母校であり、中学生の時にオープンハイスクールに参加したことで村岡高校に興味を持ちました。私は人前で話すことが苦手です。地域創造系で学び、自分の苦手なコミュニケーション能力をつけたいと強く思い、村岡高校の地域創造系を受験しました。入学当初は、周りに友達もいなくてうまくコミュニケーションがとれず、何から話せばいいのかなどたくさんの方に困りました。また、村岡地域特有の方言を聞き取ることに必死でした。また、授業では、一年生の時は、「地域をどのように活性化させていくか」ということなどに興味を持ってませんでした。一年・二年と地域探求でフィールドワークを行い、授業や講義を受けていくことによって三年生で「地域をどのように活性化させていくか」を考えるようになりました。3年間の地域創造系の授業を通して私は、「若者」という視点から地域活性化プランを考えてみようと思いました。また、3年間香美町の自然を学んできたことや、私なりに考えた地域活性化プランを話していきます。

2.地域探求で学んだこと

地域創造系では、一年生で地域学入門の授

業で「地域を知る」という目標のもと、各分野の専門家の視点から自分たちの住む「郷土」について学んでいきます。二年生の地域探求Ⅰの授業では、「地域を深める」という目標のもと地域を知ることによって発生した疑問や問題に対する解決方法を見つけるために調査活動を通して調べていきます。

そして三年生では「地域を創る」という目標のもと、「課題」に対する調査活動と提言書を作成します。

一年生の時は、山・川・海と歴史を調べました。①山では、但馬の地質というテーマで神鍋の山に行き、カシワやオトコヨモギやイソガンソクなどの私の知らない植物や知っていた植物(ハギや栗や赤松)などの植物の写真を撮りみんなで調べて図鑑作りをしました。②川では、昆陽川に七月中旬・下旬に水生昆虫講義と調査を西田照夫氏(地元講師)と行いました。川の調査が終わり、講義では水生昆虫の生活型(体のつくりや食物・運動方法)や種類(カゲロウの仲間・幼虫の仲間・カゲワラの仲間・トビケラの仲間・トンボの仲間・ガガンボの仲間など)をたくさん教えていただきました。③海では8月5日にスノーケリングとシーカヤックの実習を行いました。竹野の海に行きました。スノーケリングとシーカヤックは初めての体験で現地の人にたくさんのアドバイスを貰いました。スノーケリングでは、海に潜り、魚が泳いでいるのを見ることや、海の中から

写真を撮るということをしました。洞窟みたいなどころにも潜り、真っ白ないかにも遭遇しました。カヤックでは、初めに漕ぎ方などを陸地で教えていただき、沖に出たり、岩の間を進んだりしました。④歴史では、5月中旬・6月上旬・6月中旬に行った町歩きなどのフィールドワークを通して、プレゼンテーションを行い、講義を受け、まとめることを行いました。町歩きでは、村岡高校の坂道の下に兵庫県「兵」のマークのコンクリートのくいがあることや村岡商店街の中に昔は警察署があり、今はお墓に変わっている場所を巡り、村岡民族資料館『まほろば』というところにも行きました。また、大運寺や法雲寺などの寺院を見に行きました。

二年生の時は、新型コロナウイルス感染症の影響により、二年生になったら行はずだった活動ができなくなることが多くありました。残念であったことは、奈良県明日香村に石碑を調べに行くはずだった計画が新型コロナウイルスの影響で ZOOM によるオンライン研修に変わったことです。明日香村に行くのではなく会議室でオンライン授業をして質問や現地のことを調べました。直接見たい石碑などがあったのですごく残念でした。また、二年生で行った活動は、夏季調査実習インタビュー調査です。インタビュー調査とは小代区内で頑張っている若者にスポット当ててインタビューを実施し、若者の魅力を発見・発信するガイドブックを作成するというものです。私は、城山にある小代観光協会事務局長であり、若旦那の会という活動内容で民宿経営をしている松田さんのところに出向き、インタビュー調査をしました。インタビューの中で松田さんは、飲食店も出されており、コロナ禍でもお客様に食べてもらうようにインターネットで但馬牛コロッケを販売していることを知れました。また、もう一つの活動として、「香美町の石碑」というテーマで香美町に

ある石碑を調査して ZOOM 機能を使って発表をしました。私は、美方郡香美町小代区平野にある名牛『ぬい』号の碑を調べました。三年生になっても新型コロナウイルスの影響が続いていました。そして昨年度と同様、活動に影響が出ました。

三年生では、一年生のときと同じように、集落調査を行いました。今回の集落調査では、小代に焦点を当てて調べていきました。私たちの班は茅野という場所を調べました。茅野では、圧倒的に子どもが少なく、前まで行っていて祭りや地域での活動ができなくなっているところに、さらに、二年前から流行った新型コロナウイルスの影響により、月に一回行っていた地域での小旅行すらも中止することになり、今では全く活動や祭りができていないことを話してくれました。

3.地域の現状で感じていること

私が初めて村岡に来たのは、三年前の冬です。村岡高校に入学してみて第一印象は、何もないなと感じました。私は、神戸に住んでいたからこそ余計に感じてしまったのかもしれません。歩いていける距離にコンビニエンスストアがないことやバスが1時間に1本や2・3時間に1本ということを知りました。また、村岡高校の近くに他の高校がないことや村岡で遊ぶところは近くの山に登り遊ぶということでした。村岡という地域はとても不便だなと感じました。しかし、地域創造系として活動していくうちに村岡の良さ・田舎での良さを知ることが出来ました。一年生の時に行った山(但馬の植生調査)・川(水生昆虫調査)・海(スノーケリングとシーカヤック体験)で村岡・田舎の「環境」の良さを知ることが出来ました。川・海での調査の時には、初めにとても水がきれいだなと感じました。神戸とは違い、川では泳げないという概念という物ではなく、汚い水が流れていて困ることもなく、泳げ

ることを知り、環境がとても良いことを実感しました。海もそうですが、神戸では、「ここ泳げるのかな」とか「海の中のゴミが浮いていることがあるので気を付けて泳がないといけないこと」が多々あったので、竹野の海に行ったときに海が透き通っていてきれいだなと感じました。村岡・田舎の良さは環境だけでなく地域の良さもあると思います。地域の良さでは、知らない人でも声をかけてきてくれることです。入学してから私が住んでいる場所は香美町ではないですが、村岡からバスで帰ってきたときに近所のおじいちゃんとおばあちゃんが話しかけてきてくれたことです。神戸では、知らない人が話しかけてきたら怖いという印象があります。神戸と田舎では、人との付き合い方が全然違うということを経験して感じました。今では地域創造系の授業を通してコミュニケーション能力が付き、知らない人とでも話せるようになったことがとてもよかったですと感じます。

4.地域に必要なだと感じていること

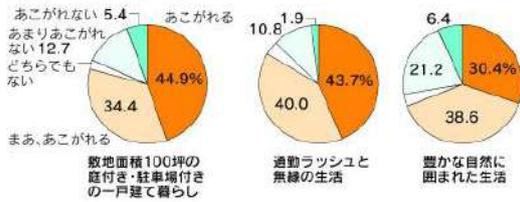
村岡という地域に必要なことは、まず、交通の便を増やすということです。バスを使って登校をしている村岡高校の生徒もたくさんいます。一つ一つのバス停が遠く、バスに乗り遅れた際は、一時間待つ場合もあります。村岡は、少子高齢化が進んでいる地域でもあるため高齢者が多いです。神戸みたいに五分後にバスが来るとかではなく、1時間に1本しかバスが通らないという現状は、よくないと感じます。1本乗り過ごしてしまってもすぐにバスがくるように交通の便を増やしておいた方が良くないと思いました。また、コンビニエンスストアや病院やスーパーマーケットなども必要だと思います。コンビニエンスストアやスーパーマーケットは高校生にも必要だと思います。病院は、村岡では村岡病院しかないし今調べている

集落調査の茅野では、車で村岡病院に来ないといけないみたいで小代にも病院を作った方がよいと思います。また、地区によって高校生や中学生・小学生がいないということ農業とかの後継ぎがいないこと、子どもたちの遊ぶ場所がないことが課題であると思います。地区によって若者がいないという解決策は、私たちが今やっている集落調査の本をたくさんの人に見てもらい、地域から出て行ってしまった若者たちを戻ってきてもらえるようにガイドブックを活用していきたいです。農業とかの後継者では若者とかに農業の良さを知ってもらえるように心掛けていけばよいかなと思います。

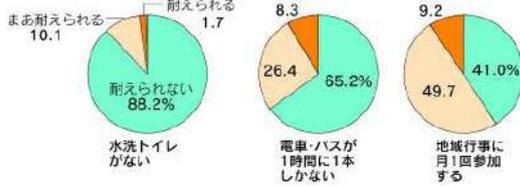
5.私の地域活性化プラン

私の考えた地域活性化プランは若者によって地域を創っていくプランです。町長講演会のときにも話をされていましたが、若者が地域を創っていくことはとても良いことだと思ったので、私の地域活性化プランは、「若者」にしました。若者は高齢者と違い行動力があると思います。日本でも少子高齢化が進んでいて、村岡も少子化の地域でもあります。日本経済新聞・500人調査（若者、地方へ）というネット情報によると、都会の人は、田舎に住みたい・住みたくないと思う人は、半分ずつだそうです。田舎に住みたいという憧れは、「例：敷地面積100坪の庭付き・駐車場付きの一戸建て暮らしや通勤ラッシュと無縁の生活や豊かな自然に囲まれた」などです。このような憧れは、ネットに載っていますがすべて50%を超えていないという現状です。また、田舎暮らしで不便なものは、「例：水洗いのトイレがないことや電車・バスが1時間に1本しかないことや地域活動に月1回参加すること」などと書かれています。

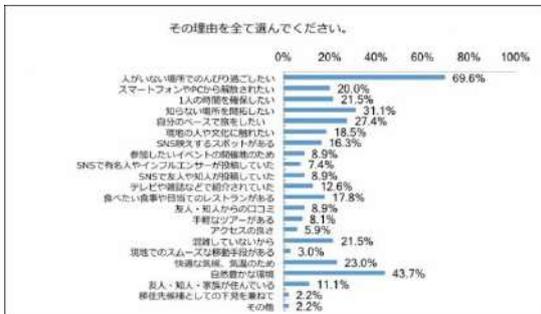
田舎暮らし、あこがれますか？



田舎暮らし、耐えられますか？



【2012日本経済新聞】



【2018日本経済新聞】

上記のグラフは、2018年の結果で六年間変わらず田舎に興味を持っていたという結果です。20歳を過ぎた若者の会社で働く方々は、時刻表を見て五分以内に電車が来ないといらだちを覚えるそうです。また、結婚をしている人達によると、大都会を夢見るのではなく、人のつながりや緩やかな時間に包まれた田舎に惹かれるという意見もあります。このことからすべての若者を対象にするのではなく、安定時期で働いている人達を対象にし、田舎に来てもらうようにすれば良いと思います。ネットにも近所になかった困るものということでコンビニエンスストアや総合病院がないのはとても不便だと感じます。これは若者・高齢者関係なく困っていることです。都会の良さを田舎に取り入れていけば良いと思います。すぐにコンビ

ニエンスストアや総合病院を建てるというのは難しいことなので停留所にタクシーなどを設置することで1時間に1本のバスなどの不便をなくせるかなと私は考えます。上記の内容をまとめると子どもや高齢者などは田舎などに適していてとても仕事をたくさんしている人たちは都会が適しているということになります。若者は高齢者に比べて携帯(SNS)をたくさん使うので、世界中の人たちに知ってもらえるようにInstagramやTwitterやFacebookなどを利用し、田舎の良さや観光したところなどを発信することで若者が少しでも興味を持ってもらえるように心掛けていくことで地域活性化にもなると思います。

6.まとめ

私は3年間地域創造系の授業を通して将来、料理関係の仕事に就きたいという気持ちが強くなりました。村岡は、海が近いことや水がきれいであるいろいろなことを学びました。一年生の時のスノーケリングで海の生き物について学び、村岡の地域で但馬牛が有名なことも知りました。私は、実家が神戸です。将来、料理人になるというときには但馬の食材などをしっかり使用し、但馬(村岡)での3年間を無駄にしないように心掛けていきます。また、村岡には飲食店が少ないので都会からUターンで戻ってきてくれた際には、飲食店を立ち上げ活動していても良いと思います。

引用文献 日本経済新聞

私の地域活性化プラン

～香美町の事、知っていますか？～

3年1組22番 西井 友里奈

1.はじめに

コミュニケーション、プレゼンテーション能力を高めたい。私が村岡高校・地域創造系に進学した理由はまさにこれだった。自身の住んでいる地域に関して知識が少ない私。そしてそれとは正反対に、「地域を知り・地域を学び・地域に活かす」地域創造系。

私が地域創造系の授業を通して知った多くのこと。そしてその知ったことから何を学び、何を感じ、どう活かしてしていくべきなのか。私の考える地域活性化プランを述べる。

2.「地域探求」で学んだこと

この「地域探求」の授業を通して私が学んだことは数えきれない程多くある。その中でも特に印象に残っていることが三つある。

一つ目は、石碑調査である。地域創造系では毎年、それぞれの年の学年に応じたテーマを決定し、そのテーマに関して深く掘り下げていく。そしてその活動を通して学んだことを、どう自分たちの地域活性化に繋げていくかという策を考える。まず「石碑調査」の「石碑」という言葉を聞いて思い浮かぶのはおそらく、ただの「石」だろう。しかし、その「石」が創られる前にどのようなことが起こったのか。いったい何の目的でそれを創ったのか。ということは、自分自身が知ろうとしない限り知ることが出来ない。

実際に私が調査した「全国植樹祭の石碑」を元に、そのことについて詳しく述べていく。まず授業の課題の一つとして、「石碑」を探してそれを調査せよ。というものがあつた。私はそこで、兎野にある天皇皇后両陛下が「全国植樹祭」の際に訪れた。ということが彫られているものを選択した。



図1.全国植樹祭の石碑

全国植樹祭とは何なのか。そしてなぜその石碑が創られたのかを知らなかった私は、祖母に聞くことにした。まず全国植樹祭とは、国民が自然や森林に愛情を培うことを目的としたものである。ここでは、毎年天皇皇后両陛下によるお手植えなどが開催されている。実際に兎野に置かれている石碑は、このような活動を行ったという証である。さらにその際、天皇皇后両陛下が訪れるということで、周辺の土地や道路がきれいになったそう

だ。

私がこの「石碑調査」を通して学んだことは、自らが進んで知ろうとすること。そして知ることの大切さである。例えば、今回はあくまでも「石碑」にターゲットを当てていた。しかし、もしそれが「地域の魅力」であればどうだろうか。移住を考えている人に、「この地域の魅力は何ですか」と尋ねられたとしよう。そんな時、自分がそのことについて知ろうともしない限り、知らないだろう。しかし知らないということは、尋ねてきた人に地域の良さを十分に知ってもらえないということだ。この「知ろうとすること、知ることの大切さ」というのを心においておくのは、地域創造系の授業や活動だけではなく、普段の学校生活や、自身が社会に出た時。また、仕事をしていくうえでは当たり前のように必要になってくることだろう。

二つ目は、夏季調査実習である。地域創造系では、第二学年になったときに行うもので、私たちの学年はコロナウイルスの影響でオンラインでの開催となった。



図2. オンラインでの夏季調査実習の様子

私たちが調査を行ったのは、奈良県明日香村である。そこにはいったいどんな石碑があるのか、そしてどんな取り組みをしているのか。ということについて学

んだ。明日香村には数多くの石碑、古墳があることを知った。その中で特に心に残っている石碑は「益田の岩船」である。この石碑は私が事前授業で調べたものでもあったが、やはり何度聞いても魅力を感じるものがある。この石碑にはいくつもの仮説があり、多くの人によって調査されている。その中でも最も仮説として有力なものは、古墳の制作途中だったのではないかと。この石碑の驚くべきポイントはその大きさにある。私は実際に目にすることはできなかったが、予想をはるかに上回るものであると言われている。また注目すべきポイントは石碑だけでなく、明日香村の人々が行っている取り組みでもある。明日香村の人々は、なるべく昔からの村の風景を壊さないためにある取り組みを行っている。その取り組みとは、町の外観に合わせた街づくりというものである。昔の外観を大切にしている。ということから、コンビニエンスストアに瓦を使用。また、高さ〇〇m以上の建物の建設を禁止するなどして、町の風景を壊さないための様々な工夫を行っていた。明日香村ならではの取り組みにすごく心を打たれた。

三つ目は、町長講演会である。地域創造系では毎年恒例の行事の一つである。この「町長講演会」ではその名の通り、町長である浜上勇人さんが実際に村岡高校にいらっしゃって香美町の現状、そして課題について講演をしてくださるものだ。私は三年間で三度講演を聞いたが、正直一年生の頃は町長さんが何をおっしゃっているのか、なぜ私たちに問いかけるのかまるで分らなかった。しかし三年生になった今だからこそ、わかり得るものがある。町長さんは地域の課題をいくつも挙げていた。私はそれを聞いたと

き、「自分はこんなにも地域の現状について知らないのだ」と、自分自身の、地域に対する知識の浅さに驚きを隠せなかった。地域のことを発信するのを目指している私からすると、自分が知らないのに他人に伝えられるはずがないと思った。知識量の少なさと、自分はもっと地域の事を知るべきだということに気づかされた。また、町長さんからは「人口減少」「少子高齢化」という課題が出た。私はそれに対して、有名な会社の本社や、起業をするのに私たちの地域、もしくは周辺の地域ですればいいと考えた。デジタル化社会が進んでいく中で、必ずしも都会に本社を置く必要がないと考えたからだ。インターネットを使用してミーティングや現状報告を得ることが出来れば、都会で働く必要がなくなる。実際に今、コロナ化でオンラインミーティングなどが大幅に増えている。これを機に、田舎に本社を置く、起業するというのを考えてみても良いのではないだろうか。そうすることによって、地域への移住者定住者が増えると考えた。「ピンチをチャンスに」これは浜上勇人さんのお言葉である。どんな状況であろうと、ピンチをチャンスに変えて乗り越えていく。人生において大切なこの言葉を、しっかりと心においておこうと思う。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

実際に地域で活動することはたくさんあったが、その中でも総合的な学習の時間での「紙漉き班」や「ダブルフルウルトラマラソン」で学んだことについて述べる。

まず私が所属していた「紙漉き班」では、紙を漉くという体験を通して、人と人の繋がりをつくっていく。この目的

を通して、地域活性化を目指し活動している。私が二年生の時、紙漉き班で「里山 meets」という企画を計画し、実際に八幡山彫刻公園で開催した。その際 SNS を使用して告知を行った。一般的に SNS という告知方法が最も身近で多くの人に知ってもらえると考えたからだ。しかしそれが大きな失敗となってしまった。SNS を通して知ってもらえるのは身近な人（地域の人）ではなく、少し離れた場所の人だった。また、若者から高齢者の方まで幅広い年齢層の方に知ってもらいたかった。だが SNS を使用している人は比較的若い年齢層の方であったため、幅広い年齢層の方に知ってもらうことが出来なかった。これらのことを踏まえて、新たな告知方法を考えた。そこで考えたのが、「ポストカード」を使用した告知方法である。



図 3. 実際に製作したポストカード

ポストカードであれば、子供からお年寄りの方まで幅広い年齢層の方が手に取りやすい。そしてこれを地域の小売店に配って自由にとって頂けるようにすれば、身近な人に知って頂くことができる。この告知方法が必ずしも正しいとは言えない。しかし、対象者によって告知の仕方を変える必要がある。ということを学ぶことが出来たのが、私にとって、そして紙漉き班にとっても大きな一歩になった

と考える。

次に、ダブルフルウルトラマラソンや残酷マラソンでのボランティア活動を通して学んだことを述べる。村岡高校では定番の活動だが、実際にマラソンに参加される選

手の方々には「ソーラン節を見て元気もらった」「地域の人に応援してくれるから最後まで頑張れる」といった言葉をかけてくださる方もいた。自分では気づいていなくても、見えないところで誰かの心の支えになっているのだと思うと、とても心が温かくなる。逆に、このマラソンがあるからこそ、地域の人々の温かさに気づいてもらえるのだと感じた。地域の人々が一体となってマラソンランナーに応援するという光景が普通ではないことに、今更気づいた。選手の中には、「応援してくれるから毎年参加したくなるよねー」と言ってくくださる方もいた。そんな風に思ってくくださる方もいる。ということを知ると同時に、この地域ならではの人の温かさをいかに上手に、かつより多くの人に知ってもらおうかを、さらに深く考えていく必要があると考えた。

4.地域の現状で感じていること

私が地域の現状をみて、感じていることを述べる。近年保育園や幼稚園で合併が増えていることや、年々小中学生の人数が減ってきていることから、「少子高齢化」や「人口減少」が進んでいることをよく感じる。しかしそれだけでなく、人口が減ってきていることもあって働く場が少なくなり、お店や街灯の数が減っているのではないかと感じる。また、人気のない場所が急激に増えてきている。そのため、もし何か起こったとしても、なかなか即座に気づくことが出来ない。これらのことが、私が地域の現状で感じ

ている大まかな事柄である。

5.地域に必要なと思われること

私が地域に必要なと思うことは、地域に笑顔を届ける人・活動ではないだろうか。実際に今でも、高校生が高齢者の方のお家に訪問してお花を届けたり、ダブルフル・ウルトラランニングや残酷マラソンのスタッフとして参加したりと、様々なボランティア活動を行っている。しかし、いくら笑顔になっても、なりすぎるといえる。ということはない。なぜなら、笑顔は免疫力をアップさせたり、気持ちをポジティブにしてくれたり、笑顔は自然と人に伝染するため、より多くの人々の幸福度が上がるからです。そうなのであれば、さらに笑顔を増やし、元気を広めていける人や活動がもっとあっても良いのではないだろうか。と思う。また、どれほど地域のことについてよく知っていても、発信する人、もしくはものがなければ始まらない。つまり、情報をより効果的に、分かりやすく発信できる何かが必要だと思う。今はコロナウイルスの影響でなかなか大人数が集まることはできない。だが実際に集まるのではなく、インターネットのオンラインでのミーティングなどを活用して、より人が沢山集まることの出来る場所を作る必要があると思う。

6.私の地域活性化プラン

まず地域を活性化させるために大切なことは、より多くの人に知ってもらうことだと考える。そのために、地域の資源である自然や食を、今よりさらに生かすべきではないだろうか。

そこで知ってもらうために必要となってくるのが、何かしらの情報を何かの手段を通して発信することだ。例えば、S

NS（香美スタリンクやユーチューブ）などの、情報をより多くの人に提供出来るツールを使用すると、効率よく沢山の人の人に見てもらえると考える。なぜなら、紙漉き班の活動をより多くの人に知ってもらうため、そして香美町の事を広めていくために実際に香美スタリンクを運営していたからである。だが香美スタリンク（インスタグラム）の場合、確実に伝えたい情報が多くの人に伝わるとは限らない。なぜなら、投稿に興味を持っていないと詳しく知ろうとしないからだ。しかしそこでユーチューブの場合、最近ではショート動画というものがあるため、一度動画を再生すると次々と動画が再生される仕組みが実際にある。このショート動画の魅力は、伝えたい情報を短時間でまとめ、読み手の関心を引くように作られていることだ。また、動画が次々に再生されるということから、ユーチューブを使用している人が、たとえ最初は興味を持っていなかったとしても、情報が自然と動画として流れてくるため、より多くの人に見てもらえる可能性があるということである。だがそのためにも、まずは相手を引き込む動画の内容や作成方法、編集の仕方などを学んでいく必要があるのではないだろうか。

もしくは、全く違った取り組みも良いと考える。例えば、本来であれば廃棄される食料や食品を、貧困などの事情で困っている人や食べ物がなくて生活に苦しむ人たちに提供、もしくは安価で分け与えれば良いのではないだろうかと考える。こうすることで、近年世界的に問題となっているフードロスの解決に少しでも近づき、生活に苦しむ人が減ると共に、香美町の取り組みに目をつけてもらえる可能性があると考えます。

7.まとめ

村岡高校での三年間の学びは、私の地域に対する思いを強くした。また、地域創造系での活動を通すと共に、自身のコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上を感じることが出来たと自負している。

高校卒業後は大学進学のため、香美町をでる。しかしだからこそ、今までとは全く異なった角度から香美町に目を向けることが大切になってくるのではないだろうか。それは、今までとは異なった視野で香美町を見ることで、新たな発見や考えが生まれてくる可能性があると考えからだ。その可能性を生かし、自分自身で何かを考え、行動していきたい。

「ピンチをチャンスに」香美町は今「ピンチ」の状況にあのかもしれない。だがそこで、いかに「ピンチ」を「チャンス」に変えるか。ということが大切になってくる。私たち一人一人が香美町で生まれ育ったという自覚を持ち、地域の外に出ても、「関係人口」の一人であることを意識して生活していきたい。

私がこの三年間村岡高校で過ごした時間は、決して無駄ではなかった。地域創造系に入ったからこそ学べたこと、村岡高校に入ったからこそ学べたこと。私はこの学びをこれから歩いていく人生に活かしていく。

私の地域活性化プラン

～あるものを利用した町づくり～

3年1組25番 藤村 春奈

1.はじめに

私は中学生のころの総合の時間で、地域を活性化する方法について学ぶ機会がありました。それを調べていく過程で、地域のことに関心を持つようになり、村岡高校の地域創造系に入学しました。

地域探求の授業では、3年間を通して地域の自然・歴史・課題などを学びました。特に気になった地域の課題は、石碑などの昔から残されている資源が、地域の方に知られていないということです。石碑はその土地の歴史や、当時の人々の思いを後世に伝える貴重な資源です。そこで私たちは地域の方々に先人の思いを知ってもらうために、石碑を調べPR動画の作成を行いました。

また、村岡の課題である地域活性化の1つの提案として、地域にある資源を使うことが必要だと考えます。例えば、自然を生かしたグランピング施設や、空き家や廃校になった校舎を活用した宿泊施設を作ることで、地域活性化に繋がると考えました。

2.地域探求で学んだこと

1年時では主に地域の自然環境について学びました。特に印象的だった活動は、矢田川での水生昆虫調査です。この調査の目的は、川にいる水生昆虫から、その川の水質を判断することです。講師の西田

先生によれば、川に生息している虫の種類から、その川の水質が分かるとお話がありました。

地域の小学生と協力しながら、水生昆虫の採集をしたり、顕微鏡等の実験器具を用いて、その虫の種類を判別しました。その実態調査結果から、矢田川の水質が優れていることが分かりました。というのは、川の石には藻が生えていること、さらに、キレイな川にしか生息していない虫が見つかったからです。講師の西田先生によると、栄養分が多い水のところの石には藻が生えるそうです。このことから矢田川は栄養分が多く、キレイな水質であることが分かりました。

また、西田先生の講義では、人間の活動によって生態系が崩れているとお話がありました。例えば、ダムが作られたことによって、魚が住めない環境が増えてきているとお話がありました。その講義から、私たちは生態系や自然環境について理解を深めることが必要だと感じました。

もう一つの印象的な活動は、神鍋の山で、但馬の植生を調査したことです。初めて見る植物がたくさんあり、その植物の名前を知ることが出来ました。また、この調査から但馬に美味しい食べ物・特産品があるのは、美しい自然があるおかげだと感じました。人間がいつまでも今までのように暮らすためにも自然を守る必要

があると感じました。但馬には特別天然記念物や、数十年ぶりに見つかった植物もあります。それらの貴重な植物を害虫や害獣から守ったり、人がむやみに植物を採集することを防ぐ必要があると、強く感じました。

2年時では香美町に点在する石碑について学びました。ただ石碑について調査するのではなく、その石碑の背景を調べることで、石碑が持つ情報を最大限に学ぶことができます。例えば、小代杉の顕彰碑でいえば小代杉のこと、ヌイ号の碑でいえば牛のことを調べることによって、その地域の自然や歴史を学ぶことができます。

この石碑の活動から、私たちが石碑を意識して探してみると、香美町に石碑が点在していることが分かりました。香美町の石碑めぐりを授業で行って、1つ1つの距離が遠く、全てを回るには時間がかかるということと、そして、石碑の多くは山奥にあり、ただそれを見つけることですら大変な石碑もあるということが分かりました。

さらに、ほとんどの石碑は看板等の目印がなく、見つけるのは困難です。そこで、より多くの人に知ってもらうためには、インターネット等を使ったり、パンフレットなどの紙バイタルを使うことを提案しました。そうすることで、その場に行かなくても、石碑について簡潔に学ぶことができます。したがって、より多くの人に知ってもらうには、その石碑を知ってもらうためのきっかけとなる仕組みを用意することが、大切だと分かりました。

オンライン研修では、明日香村の取り組みについて3つ学びました。1つ目は石造物についてです。明日香村は石造物がとても有名で石造物の世界遺産登録を目指しています。世界遺産登録がもたら

すメリットは、世界への情報発信・地域ブランドの獲得・観光関連業の発展などがあり、明日香村は村のアピール活動を積極的に行っていました。観光客を増やす取り組みにも石造物を活用しています。

図1 オンライン研修の様子

その具体的な例としては、あすかなびの作成です。あすかなびはスマートフォンアプリの一種で、それには石造物までの道のりや石造物の説明文が載っており、



何も知らない人でも楽しめるようになっています。さらに、日本語だけでなく韓国語・中国語・英語にも対応しているため外国の観光客の方でも使用できます。あすかなびは、現在進んでいるグローバル社会に対応しており、またネットを上手く使ってネット社会に対応した活動をしているなど様々な工夫がされていることが分かりました。

2つ目は民家ステイについてです。民家ステイでは昔ならではの料理を食べたり、明日香村の家業の体験といった普段できない体験ができます。明日香村の宿泊者数は年々減少傾向にありましたが、民家ステイをはじめた年から宿泊者数は徐々に増えているようでした。民家ステイにはホストファミリーが必要ですが、明日香村にはホストファミリーが数多くいて、明日香村の方々は地域が行う活動にとっても協力的だと感じました。

3つ目はボランティアガイドについて

です。明日香村を訪れた観光客に対して村の方々がガイドをしています。ガイドの1人である寺西さんは、ガイドを始めまでは明日香村に興味がなく、最初はガイドの活動は楽しいと思わなかったようです。しかし、ガイドをしているうちにその活動のやりがいを感じるようになったそうです。寺西さんがガイドで心掛けていることは、その人に合ったガイドを行っています。例えば、小学生を対象とする場合、小学生にとって分かりやすい説明をし、専門家の場合では、より詳しい説明を提供することを意識しておられるとのことでした。

オンライン研修を通して、明日香村の方々は、民家ステイ・ガイドなど地域の方々の協力のもとで行うことができている活動が目立っているように感じました。地域を活性化させるには地域の方々の協力がなくてはならない存在だと改めて感じることが出来ました。

3年時では石碑の動画作成に向けた現地調査を主に行いました。動画を見ただけで石碑の特徴や魅力が伝わるように動画を撮影するには、様々な工夫が必要でした。例えば、構成を順序立てて考えたり、字幕を付けるなどいろいろな案をだしました。

夏季調査実習では、集落調査で小代区・村岡区の集落に行き集落の現状や魅力などをインタビューしました。インタビューの調査から、子供の数が多くことや、祭りなどの行事をたくさん行っているなど、どの集落にも違った魅力があることが分かりました。私の班が調べた集落は、小学校区の中で子供の数が一番多く、行事や祭りがとても活発的でした。

一方で、インタビューの際には、言葉のキャッチボールが大切だと事前に学びましたが、それを実行することは、困難を極

めました。例えば、私たちが一方的に質問をすると会話はあまり弾まなかったり、質問すると、自分たちが知りたい内容とは違う答えが返ってくることもありました。この課題に対して、自分はあまり話さず、相手の話を聞くという姿勢を貫くことが大切だと感じました。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私が地域で学んだことは主に2つあります。1つ目は総合学習を通して地域の食材について学びました。私は総合的な学習の時間では食文化班で活動していました。コロナ渦で流通が落ち込んだ地域の食材を使用してレシピを考案しさまざまなコンテストに応募することによって地域食材をより多くの人に知ってもらうことを目的に活動してきました。

香美町には山・川・海があり自然が豊かで、ハタハタ・カニといった魚介類、神鍋キャベツ・美方大納言小豆といった野菜類、それに自慢の但馬牛があり食材はとても豊富です。しかし、知られていない地域食材がたくさんあることに驚きました。授業を通して知った地域食材がほとんどで、こんなに身の回りに地域食材があることは大きな学びでした。

また、地域食材を使ったレシピを考案し、地域の食の魅力を発信する活動がありました。レシピを一から考えるのはとても難しく、食材の味を活かせるよう味付けができるように工夫しました。料理の仕方のバリエーションは豊富で、食材を使って地域活性化を行うのは、地域食材が多くある地域の利点だと思いました。

3年間に及ぶ食文化班の活動で、地域の食材をより多くの方々に知って食べてもらいたいと感じました。それは、香美町

には多くの魅力的な食材があるからです。そこで食文化班では、調理実習だけでなく、幅広い年代の方々に地域食材を知ってもらうために地元の食材かるたの作成も行いました。かるたを作ることによって、子供にも食材について知ってもらうことができます。それは、かるたは遊び感覚で楽しく学ぶことができ印象に残りやすいからです。かるたの読み札に地域食材の特徴や魅力を使うことで、絵と照らし合わせながら手軽に食材のことを知ることができます。幅広い年代の方に知ってもらうには、遊びを取り入れることも必要だと分かりました。

2つ目はマラソン大会のボランティアを通して、村岡高校がいかに深く地域とのかかわりを持っているのか学びました。みかた残酷マラソン・村岡ダブルフルではスタッフとして参加しました。残酷マラソンでは給水所で水渡しをしました。その時「人みな使命あり」と書かれた紙を持ちながら走っているランナーの方を見ました。また、村高生がいないと大会が成り立たないと聞いたこともあります。このことから村岡高校は地域になくってはならない存在だと改めて知ることができました。

4.地域の現状で感じていること

私が香美町に在住して感じていることは、日本全国でも問題になっているのと同様に高齢化が進んで人口が減少していることです。私が住んでいる集落にも空き家が増えてきています。空き家を見ると、なんだか静かで元気がないように思えます。町を歩いているときに高齢者の方はよく見かけますが、子供はなかなか見かけません。地域を存続させ、活気づけるためにも若者や子供といった元気で活発な方が必要です。その若者が香美町の

魅力を感じてもらえるような対策を、とることが必要だと感じました。

5.地域に必要だと思われること

私が地域に必要だと思うことは、地域住民の方が地域の活動にもっと興味を持ち協力的になることです。明日香村とのオンライン研修で、明日香村の方々は地域の活動にとっても協力的だということを知りました。明日香村の宿泊者数が増加したり、世界遺産登録に向けた取り組みなどといった地域活性化活動ができるのは、住民の協力があるからこそだと感じました。そこで、まずは香美町の住民が香美町の魅力や取り組みに興味を持つことが大切だと考えます。少しでも香美町が行っている活動を理解し、興味を持ち、個々ができる範囲で協力すれば、地域活性化活動を行いやすくなりより良い町になっていくと考えました。

6.私の地域活性化プラン

人口減少を緩やかにするためには、「iターン」「uターン」をする人を増やすことが必要だと考えます。町長講演会で香美町も移住・定住をする人を増やすために空き家バンクや補助金制度を行っていることを知りました。ですが、なかなか移住者が増えていないのが現状だそうです。自然が豊かでとてもいい所だけれど住もうとは思わないといった人を聞いたことがあります。そこで私は魅力的な活動をし、まずはこの地域のことや、昔とは違った良さ・違った活動を行っていることを知ってもらうことが必要だと思いました。

まず、自然を活用した取り組みを行うことです。香美町にはキャンプをするところがたくさんありますが、グランピング施設は少ないと感じました。そこで、私は小代住んでおり小代の魅力を知ってもら

いたいと思い小代の山にグランピング施設を作るのはどうだろうと思いました。施設を作るとことで管理する人が必要になり、その他でも人手が必要になるので働く場所を確保できると考えました。また、グランピングはキャンプ道具が不要だから誰でも手軽に泊まることができ、香美町の自然の魅力をアピールすることができ、楽しんでもらえると思いました。

廃校になった校舎・使わなくなった施設・空き家を活用して宿泊施設を作ったり、カフェなどの飲食店を作ることを提案します。香美町には空き家など使わなくなった建物が増えているため、それを有効活用することが必要だと思いました。

というのは、宿泊施設やカフェなどのふれあいの場を作れば、人が集まり町の元気を取り戻せると考えるからです。しかしながら、香美町の現状は少子高齢化で子供の数も減っているといえ、学校の統合という問題も出てきているそうです。統合するデメリットの一例として、町から学校がなくなることで登下校の子供の姿が見られなくなったり、校庭で遊ぶ子供の声が聞こえなくなり、町の元気がなくなり、ますます人口減少に拍車がかかることが挙げられます。また、子供が遊べる場所が減っているように感じるので、遊具があれば親子で楽しめる施設になるでしょう。

これらの活動・取り組みを行うには人手が必要になり働く場所を増やすことができるため、地域活性化につながり、活気のある町になると考えました。

7.まとめ

私がサブタイトルを「ある物を活用した町づくり」にした理由は、香美町には空き家などの今使われていない資源を、上手く使って活性化を行うことが必要だと

感じたからです。

地域活動を通して、地域には石碑や地元食材など、まだ知られていない資源があることと、使われていない建物が多くあるということが分かりました。石碑は調べることによってその地域の歴史も知ることができとても魅力的なものなので多くの人に知ってもらいたいと感じました。

私は域活性化プランで人口減少を緩やかにするための方法を考えました例えば、自然を活かしたグランピング施設、廃校などを活用した宿泊施設を作ることです。地域の魅力を伝えるために私も地域の活動に協力したいです。

私の地域活性化プラン

～地域内外の人々へ～

3年1組27番 松尾 桃姫

1.はじめに

私が「地域創造類型」に入った理由は、生まれ育った地域のことをより多く知りたいと思ったからです。とても単純な気持ちで入った「地域創造類型」では、たくさんを知ることができましたが、大変なこともありました。「地域創造類型」で三年間過ごしてきて、自分の未熟さや地域の魅力、地域に大切なことに気づき、地域の人を含め多くの人に発信したいと考えました。

2.地域探求で学んだこと

「地域探求」では、多くのことを学びました。一年生のころには、山へ行ってその山の地層や植物について学んだり、川へ行って昆虫採集をし、川の生き物について学び、海へ行ってスノーケリングで海に潜り、海の生き物を見たり、カヌーに乗って、海岸の岩の地層についても学びました。また、地域散歩に出かけ、地域の歴史についても学びました。人物の石碑や、植物の石碑があることもわかりました。

二年生になり、私たちは多くの石碑を訪ね、近所の方や役所の方から多くのことを学びました。自分たちだけでは得られなかった情報を地域の大人から教えてもらうことで、より理解を深めることができました。夏休み中に、各自で奈良県明日香村のことについて事前調査を行い、オンラインで明日香村についての研修合宿が行われました。奈良県明日香村の方と「Zoom」で繋ぎ、明日香村の方の

話を聞きました。明日香村の方が実際に行っている取り組みについて話を聞き、香美町でも取り入れることができるものを見つけることができ、とても参考になりました。オンラインでの研修は初めてだったので、「話が途切れたりするのでは？」と不安もありましたが、無事途切れることもなくスムーズに研修を行うことができました。今まで、自分たちの住んでいる地域以外は調べたことがなかったので、奈良県明日香村というほかの地域について調べ、新しい発見を多く見つけられてとても良い経験となりました。また、事前調査で調べたことで分からなかったことも知ることができました。私たちの質問にも丁寧に答えてもらい、より明日香村のことについて知ることができました。



図 1. 奈良県明日香村オンライン研修の様子

三年生になり、二年生のころに学んだことをさらに理解するため、調査する石碑を選び、今までよりも詳しく調べました。石碑ごとに班を分け、その場に足を運び、役所の方や近所の方を招き、話を

伺いました。卒業制作として動画に残すため、インタビュー風景や調査場所の撮影も行いました。インタビューに伺う際は、事前にアポを取ったり質問内容の確認や質問事項を考えたりしました。大人の方の話聞くことで、自分たちで調べてもわからなかったことを知ることができました。過去の話や現在の話など、たくさんを質問することができ、とても良いインタビューになりました。

また、「地域創造類型」では夏季調査実習として、「集落調査」を行ってきました。学年ごとに調査する集落を分け、各集落の区長さんにアポを取りインタビューを行いました。話を聞く前に質問事項を準備したり、本やインターネットを使ってその集落のことについて学習をし、インタビューを行う準備を整えました。すると、本やインターネットには載っていない話もあり、その集落についてより詳しく知ることができました。インタビューにはたくさんの種類があるのですが、私たちは対面形式を活用することが多かったです。インタビューする方々は、集落のことだけでなく、町全体、村全体の歴史についてや、人生のことについても話してくださるので、質問の内容、質問をするタイミングなどもしっかりと考えるようになりました。

三年間で私たちは、様々なところへ出向いたのですが、出向く先々どこも、自然と隣り合わせでした。そこで香美町と自然が密接な繋がりがあることを体感しました。特産物や人とともに香美町を動かしているものが、一つでも欠けると、香美町の魅力がなくなってしまうくらい、香美町にとって自然は、とても大切な魅力なんだと感じました。有名なものや建物が少ないから魅力が見つけられないと捉えられるかもしれないけれど、

「自然」が香美町の立派な魅力だと私は考えています。



図2. 自然と隣り合わせの石碑巡り

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私が、高校時代に地域で活動して学んだことは、たくさんあります。春と秋に行われるマラソン大会にスタッフとして参加したときは、「こんな田舎で開催されるマラソン大会に、だれが参加するのか?」「参加者がいても数人だろう」と思っていました。ですが、実際は香美町に住んでいる方よりもほかの地域に住んでいる方のほうが、とても多く、アンケートを取っていると大阪や神戸からの参加者が多く、とても驚きました。また、参加者の方々は口をそろえて「こんな自然の中で走ることができてとても楽しかった。」と言われていました。この時、「香美町は自然が魅力的なんだ」と感じました。また、総合の時間の班別活動で私は、一年生と二年生では「地域福祉班」として活動し、三年生では「食文化班」として活動してきました。

「地域福祉班」では、地域の高齢者や小学生、小さな子供と交流しました。高校生が中心となって地域の方と交流することで、地域に輪ができ、高校生と高齢者だけでなく、高齢者と小学生や高齢者と小さな子供という高校生とだれかとい

う輪以外ができることを知りました。こうすることで、地域に大きな輪ができ、より地域活性化につながると考えました。

「食文化班」では、地元食材を使ってレシピを考案したり、ほかの地域に香美町の食材を伝えるという活動を行いました。すると、自分たちも知らなかった地元食材があったりしました。それを地域内外の方々に知らせることで、香美町の食材を知ってもらい、香美町に足を運んでもらえると考えました。

様々なイベントや行事に参加することで、地域と人の関わりが見えてきました。今まで、同年代の人としか関わっていなかったため、地域と人がこんなにも関わっていると思わなかったし、こんなにも香美町という地域は、魅力が多いだなと感じました。また、三年間同じ仲間と活動を行ってきましたが、一人一人、全く違う考えを持っていて、捉え方ひとつで意見が違うことがありました。そこで出た一つ一つの意見を聞いて、一人の意見だけではいいものが作れないと感じました。卒業制作として動画作成を行っていく意見が出たときも、動画作成に反対の人もいましたが、賛成派の意見を聞き納得し、制作を行いました。いろんな意見が出たからこそ、いいものが作れたと思っています。D

4.地域の現状で感じていること

私が、一番初めに地域の現状で感じていることは、香美町は「少子高齢化が深刻」ということです。香美町の現状を後世に伝えるのが若者ではなく、高齢者が多く、どれだけ地域のことを知っていて話をしても実際に体験ができないし、話を聞く私たち若者が理解しにくいと感じました。また、高齢者ということもあっ

て、若者にはわからない言葉が出てきたり、昔のこと過ぎて覚えていなかったりすることがあると感じました。高校生が理解しにくいことを、小学生や中学生が理解できるはずがないです。私自身、香美町で17年間過ごしてきて、香美町のことはある程度知っているつもりだったのですが、高校生になって「地域創造類型」に入って香美町のことについて調べていると、「何も知らないな」と感じました。高校三年間で香美町のことを実際に体験することで、香美町について今までよりも理解することができたので、小学生や中学生も実際に体験をしないと理解出来ないのではないかと感じます。

5.地域に必要なだと思われること

今の香美町に必要なのは、大人の思いを小学生や中学生、高校生に理解してもらいようにしっかりと伝え、それを後世に伝え、いつまでも香美町に残すことだと思います。そのためにも、まずは香美町に興味を持ってもらわないといけないと思います。大人と子供と一緒に楽しく活動のできるイベントを地域で考え、実行することで楽しみながら香美町の魅力を知ることができると思います。さらに、大人と子供の間に入っておとなが説明しても子供がわからないことを子供にわかりやすく説明できる人材がいることで、子供により理解してもらえんと思います。公民館や空き家、役所などの地域にある施設を利用することで、子供に大人の思いがより身近に感じさせることができると思います。

6.私の地域活性化プラン

私が考える地域活性化プランは「魅力発信」と「子育てのしやすい町」です。「魅力発信」では、私たち高校生が思

う香美町の魅力を地域内外にSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などを有効活用して発信することです。なぜかという、今の時代SNSは若者の利用がずば抜けて多いからです。SNSには、「YouTube」や「Twitter」「LINE」「Instagram」「Facebook」「Tik Tok」など様々な種類があります。現在、香美町でも「Instagram」で魅力を発信する活動を行っています。ただ、「Instagram」だけでは、「Instagram」をやっていない方には魅力発信ができません。そこで私が考えるのが、「Instagram」以外のSNSも利用して魅力発信を行うことです。例えば、「Twitter」や「Facebook」で「Instagram」と同じように画像や動画を載せ、「Instagram」をやっていない方にも魅力を発信するというやり方です。また、「Instagram」「Twitter」「Facebook」をやっていない方の中には「YouTube」や「Tik Tok」はやっている方がいると思うからです。「Instagram」や「Twitter」と違って長時間の動画を載せることができるので、画像では伝わらない魅力を伝えることができると思います。

「Instagram」や「YouTube」を見て香美町に訪れ、実際に香美町の自然を感じることで「香美町に住みたい」と感じるようになると思うし、「香美町に住みたい」と感じなくても少しは香美町に触れるきっかけになると思うからです。香美町の魅力だけでなく、香美町で行われているイベントに参加してもらうことも、少しのきっかけになると思います。

7.まとめ

私が三年間「地域創造類型」で学んできて感じたことは、香美町のことを少し

しか知らないのにすべて知っていると思いきりこんでいたことです。香美町がどのような取り組みを行っているのか、どんな問題に直面しているのか、ほかの地域ではどんな取り組みを行っているのかなど、実際に「地域創造類型」に入ってきた皆さんのことを経験してみて、初めて気づくことができました。だからこそ、地域の方にももっと香美町のことを知ってほしいと感じたし、香美町の方だけでなくほかの地域に住んでいる方にも香美町のことを知ってほしいと思いました。自分自身の目で見て体で体験して自分で考えて知ってもらいたいです。最初から最後まで、自分自身一人でもできたらいのですが、それは難しいと思います。なので、一人ではなく、地域の方や香美町について詳しい方、私たち村岡高校の生徒を頼って、香美町のことをより多く知ってもらいたいです。多くの方が香美町のことを少しでも知ってもらえるように、多くの方が「自ら進んで行動する」お手伝いができたらいいし、お手伝いすることで、自分自身もさらに香美町について知ることができ、地域の魅力発信につながると思いました。香美町だからこそその魅力をもっとたくさん見つけて発信したいと思います。

香美町は常に自然と隣り合わせです。地域との関わりや、人同士の関わり、自然との関わりを学べるのはここ香美町だけだと感じます。そんな香美町で育ったことを誇りに思い、これから先の人生でも香美町のことを学びたいと思うし、香美町から出ても、出た先々で香美町のことを多くの人に伝え素晴らしさを知ってもらい、香美町の魅力発信を続けたいと思います。

当たり前のような生活の中で、新たな発見が見つけられるようになったので、

これからもこのような考え方はきっとこれからの生活にも役に立つので、このことを忘れずにこれからも生活していきたいと思います。



図3. オンライン研修の様子

私の地域活性化プラン

～住みやすく楽しい町～

3年2組1番 明保能 和

1. はじめに

村岡高校に入学した理由は、アルペンスキー競技を存分にできる環境であることに加え、地域に密着した特色ある活動に魅かれたからです。私は、1年生の時にはアウトドアスポーツ系に所属していましたが、2年で地域創造系に移りました。理由は、大学進学のために幅広く学びたいと考えたからです。

2. 地域探求で学んだこと

1年生のアウトドアスポーツ系の授業で地域の自然や資源を使ったスポーツを体験したり、講義を受けました。具体的には、入学直後にある合宿で野外炊飯、登山、ツリーイングをしました。登山では、ただ山を登るのではなく、川の水をペットボトルに汲みそれを仲間と協力して頂上へ運び流しました。ツリーイングでは、ロープの結び方などを教えてもらい目標とする木に登りました。登って行くにつれコツをつかんだり違う木にいる仲間とコミュニケーションを取ったりしました。そして登り切った時の達成感と景色はとてもいいものでした。この合宿が終わるころには仲間との絆が深まり、アウトドアスポーツへの関心がより一層深まりました。また秋には、長楽寺の前の橋を利用した懸垂下降を体験しました。この懸垂下降体験では3年生にサポートしていただき行いました。最初は怖かったですが慣れてきたら周りの自然、風景を楽しみながら降りることができました。講義では、

理学療法士、柔道整復師、鍼灸師、栄養士の方に来てもらい、健康とスポーツについて学びました。鍼灸では針を触ってみたり刺してみたり体験しました。私は、スキーで体の調子が悪かった時に鍼灸をしたことがあります。このように、スキーに繋がること活用できることが多くありとても参考になりました。

2年生の地域創造系では、香美町の石碑を使って香美町について知ってもらい興味を持ってもらうことを目的にし、石碑(石造物)を巡る香美の旅を大きなテーマとして活動をしています。このテーマは地域創造系1年生の時から掲げているものであり1年生の時アウトドアスポーツ系だった私は、地域創造系に移ってすぐのころ何をしているのか、どう行動すればいいのか分からず、この先大丈夫かとても不安でした。しかもその頃は新型コロナウイルスにより学校が休校でした。そんな中 zoom を利用して地域創造系の授業がありました。



図1.明日香村とのオンライン研修の様子
事前に各自で身の回りの石碑についてま

とめそれを発表するというのを何度か行いました。何も分からず戸惑っていた私は友達や先生から丁寧に教えてもらい次第に取り組みの意味、目的を理解し積極的に取り組めるようになりました。休校も終わりいつも通りの学校生活になってからの地域創造系の授業は、放課後に休校中に調べた香美町の石碑を何個か実際に見に行くなどしました。(図2)



図2.小代杉の石碑を見に行った様子

また夏には、地域創造系がテーマとしている取り組みを行っている奈良県の明日香村の方と zoom を利用してお話をしました。(図1)明日香村には、文化財である『明日香宮跡』『明日香大』『石舞台古墳』などの石造物といった魅力がたくさんあります。古くからある石造物だけではなく、明日香村には、歴史あふれる建物や街並みがあり、またコンビニエンスストアでは、屋根は瓦、色は淡い色を使っており、家を新しく建てる時も同じように瓦屋根で派手でなく昔からの建物と馴染むようにしているそうです。明日香村の文化財・景観は住民によって大切に守られてきているということが分かります。地域の住民も協力しているのはとても素晴らしいことで、それほど大切に誇りを持っているのだと感じました。石造物については、1つ1つの石造物を詳しく調べるだけでなく、その石造物の周りも調べあげることによって、昔の風景や出来事、仮説がわかるそうです。石造物は、日本だけ

でなく外国産の遺物も多数発見されていて、外国とも関わりが昔からあるのはとても貴重だと思いました。明日香村は石造物を活用した事業もしています。具体的には、持ち運べる猿石です。実際の形、大きさを型にとって作ったものでそれを、展示室での展示や講演会での公開に使用しているそうです。石造物がある場所に行かなくても実際の大きさの石造物を見ることができ、石より軽いもので造られているので持ち運びが便利だなと思いました。石造物という魅力を多くの人に見てもらおう、知ってもらおうという思いが伝わってきました。他には、ツアー造成やあすかなびという活動をしています。あすかなびでは、五感で飛鳥を感じるためのナビゲーションシステムもあり、日本語の他、英語、中国語、韓国語にも対応しています。海外からの観光客も楽しむことができます。観光客も増え明日香村をもっと多くの人に知ってもらうことができます。少子化の改善や地域活性化にも良い影響を与えたいと思いました。魅力を発信するのは簡単なようでとても難しいことだと学びました。

3年生の地域創造系では、まだ完全におさまっていないコロナ禍で、石碑の魅力を動画配信によって発信する取り組みが始まりました。内容は、数人のグループに分かれ担当の石碑についての資料を集め5分ほどの動画にまとめ、DVDを作成します。その動画作りの時に、明日香村のナビゲーションシステムのように日本語だけでなく、字幕を付けたりしてより多くの人を楽しめるように工夫しています。このDVDをきっかけに香美町に興味を持ち足を運んでくれる人が少しでも増えたらいいなと思い、積極的に活動しました。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

村岡高校では、総合的な探究の時間で「村高発 地域元気化プロジェクト」という活動を行っています。8つの班があり、私は3年間民芸班に所属していました。民芸班では、南中ソーランを踊ります。授業では、ただ踊るのではなくビデオを撮って、もっとよくするにはどうすればいいかなど考えています。また、高齢者の方でも踊れるように椅子に座ったままの踊りを考えました。その他、みかた残酷マラソン全国大会や村岡ダブルフルウルトラランニングで南中ソーランを踊ったり、スタッフとして参加します。南中ソーランを踊っていると足を止め一緒に踊ってくれるランナーの方もいました。自然とみんなが元気になるように感じました。この大きなイベントに参加してより香美町の良さが分かります。小さな町だからこその人と人の距離感や思いやりがあると思いました。ランナーの方にアンケート調査をするのですが、そこにはいつも「地域の方が優しく頑張って走り切ることができた」や「学生の皆さんから元気をもらえた」などたくさんの言葉をいただきます。香美町の良さが少しでも多くの方に知ってもらえ嬉しいです。総合的な学習の時間の活動はこれからも続けていくことが大切です。

4.地域の現状で感じていること

私が地域の現状で感じていることは、高齢化を伴う人口減少です。令和3年4月の香美町の高齢化率は約40%であり、小規模集落（高齢化率40%以上、50世帯未満）が58集落あり、そのうち限界集落（高齢化率50%以上）は36集落もあります。私は小代の平野地区に住んでいますが、平野地区には、小中学生は0人で

高校生は私を含め2人しかいません。人口減少のスピードを少しでも遅くするために香美町では、移住定住政策として空き家バンクなどの取り組みを行っています。どうしてこんなに人口減少が進んでいるのか考えました。香美町の高校生は卒業後大半が都市部へ行きます。理由は、大学進学や専門学校、就職のためです。これは、仕方ないことだと思います。ですが、卒業後などに香美町に帰ってくる人も何人かいます。その人数が増えたら人口減少の減速に繋がると思いました。何より私が17年間香美町で暮らして感じる不便な事が3つあります。1つ目は、生活用品などを買う店が近くにないことです。私の思う近くとは、家から歩いて行けたり自転車で行けたりする距離を想像します。それに比べると私の住んでいる小代からコンビニやスーパーに行くには車が必要です。おそらく小代住民の多くが、食品は宅配サービスを利用していると思います。私の家では、毎回大量の食品が家に届きます。それを見ると、近くにスーパーなどあったらいいなと思います。2つ目は、多くの人が自家用車で学校に行っていることです。小代から村岡高校に通っている多くの方は、ほぼ毎日村岡高校まで自家用車で送ってもらっています。私もその1人です。バスはありますが、数が少なく運賃が高いので利用している小代の生徒は少ないです。私の父は村岡高校に通っていたらしく、当時は、スクールバスを利用していたと聞きました。現在も小代から村岡高校までのスクールバスがあったら便利だと思いました。3つ目は、廃校が増えてきたことです。ここ数年で香美町では、幼稚園や小学校、中学校が廃校になっています。ひと学年の人数が1桁だったり行事に限りがあり合併しています。廃校になった学校は、放置されていた

り壊したりしています。せつかくの建物が使われなくなるのは、悲しいです。兎塚中学校は廃校になってしまいましたが、校舎を宿泊施設として利用しています。また、射添小学校は特別支援学校として利用しています。このように廃校になった学校をなんらかの形で利用しているなと思いました。廃校の他に空き家も多いので建物を利用して地域活性化の助けとなったらいいと思います。

5.地域に必要なと思われること

私が、地域に必要なと思うことは、若者の力です。何をするにあたっては若者の力は必要だと思います。若者が戦力になることで、村岡高校が目指している地域元気化プロジェクトという地域活性化にも繋がります。しかし若者の力をどう集めるのかがこの地域の問題です。4で述べたように多くの方が香美町を出てします。そのような人たちが香美町に戻って来たいと思える様な魅力のある地域を作りその魅力を発信していくべきだと思います。

6.私の地域活性化プラン

私の地域活性化プランは、4で述べた私が17年間香美町で暮らしてよく感じることを踏まえて考えました。以下のプランの目的は香美町がもっと住みやすく親しみやすくなることです。

① 動くスーパー

② 田舎のショッピングモール

この2つのプランを説明していきます。まず①動くスーパーについてです。動くスーパーとは、各地域を回り、食材などを売りに行くトラックです。宅配サービスを利用できますが、高齢者の方には、商品選択の手続きが大変だと思いました。またテレビでも移動式のスーパーなどよく見ます。香美町にもあったらおもしろい

なと思いました。また各地域を回ることによって、人にも合うのでちょっとした交流になると思いました。香美町には野菜などの食材が豊富なので新鮮な状態で届けることができます。食材だけでなく日用品もあるといいと思いました。次は、②田舎のショッピングモールについてです。廃校を利用した取り組みです。教室が多いので、それを利用して商品を教室ごとに別けたら買い物がしやすいと思います。買い物だけでなく、音楽室のピアノを弾いたり体育館では自由に遊んだり給食室は食堂として利用できたらいいなと考えました。母は買い物をし、その間に子は遊ぶことができます。そうすることで家族で行く人も増えると思います。誰もが利用できる施設にすることで親しみやすいです。また世間でも注目を浴びると香美町を訪れる人も増えると思いました。このプランを若者が中心となり取り組んでいったら地域はもっと元気になります。これらの取り組みなどを多くの方に知ってもらうためにインターネットを存分に利用して情報を発信に力を入れていこうと思いました。

7.まとめ

5のような地域活性化プランを考えるだけでなく実践することが大切だと思います。しかし実践することは簡単ではありません。人手や場所や経費など必要なことが多くあります。人手に関して特に人口減少や都会に出てしまう人が多い香美町ではとても難しいです。香美町の魅力を改めて地元の方に知ってもらうことで、香美町に残りたい、帰ってきたいと考える人が増えると思いました。帰ってきてもらうには時間がかかるかもしれません。だからこそ今香美町にいる人、特に高校生が先陣を切って活動したら良い方向に

進むと思います。また、イベントに香美町民が積極的に参加することも大切です。実際に自分が体験することにより新たな一面を発見できます。興味関心もより一層深くなります。私も、残酷マラソンでソーラン節を踊った時に、ソーラン節を楽しみにしているランナーがいてソーラン節の魅力を発見しました。また、地元愛が深くなりました。大学に行くため香美町を離れてしまいましたが、香美町民ということは永遠の宝物です。このように思えるのは、地域と密接に過ごしてきたからです。関わってくださった人に感謝を忘れないようにしたいです。これから先の人生でこれらの学んできたことを存分に活用していきたいです。そして、地元愛をもっと深め香美町の魅力を大切に誇り高く思い、発信していきたいです。まだたくさん問題や課題があるけど香美町民一丸となって頑張れば解決に近づきます。私は、香美町に生まれ育ってよかったと心から思っています。

私の地域活性化プラン

～過疎地域に生きる意識～

3年2組2番 浅田 光

1.はじめに

私は村岡のことが好きで、村岡のことがもっと知りたいと思い、村岡高校地域創造系に入学することを決めた。

高校入学までの私は村岡の知識はほとんどなくなんとなんに住んでいて地元だから好きだったというような感じであった。高校入学後の地域創造系の授業を受けることで住んでいると当たり前と感じていたような村岡の魅力を発見、再確認することができた。地域のことを知れば知るほど地域にとって足りないものや必要なことが分かるようになってきた。

本論文では私の感じた地域の課題や地域に足りないもの。そして地域への提言を述べていく。

2. 地域活動での学び

高校在学中、地域創造系の授業以外で、集落調査やマラソン大会のスタッフとして地域に出て活動した。

集落調査では、3、4人のグループに分かれて村岡の集落に実際に足を運び、区長さんなど集落の方から集落に関する様々な話を聞くことができた。一年次は、集落ごとの特徴や歴史などの謎を紐解き、二年次は新型コロナウイルスの影響もあり小代地区の人物調査を行った。集落・人物調査では、これまで集落の一部としか見ていなかった部分に焦点が当たり、地域の細かいところを知ることが出来た。集落調査では地域に高校生が足を踏み入

れ、疑問を抱き、区長さんなどに質問することによって、私たちはコミュニケーション能力や臨機応変に対応する力が向上した。この集落調査では、集落の人たち自身も地域の魅力を再発見することができるというメリットがある。さらに、集落調査の結果は冊子にまとめるため、冊子を手にとった人たちが定住者になったりする可能性がある。そのためこの集落調査は取材される集落と取材する高校生にとってWin-Winな関係になっていると考える。この他にも自分の集落のことは知っていても隣の集落の詳しいことを知っているという人は多くない。また、調査をまとめた冊子を近隣集落の人が見ることで、近隣の集落への理解が深まり隣の集落とも親交が深まったり、地域活性にもつながる(写真1)。



写真1 集落調査の様子

二年次の地域のマラソン大会は中止になったが、一年次には、「みかた残酷マラソン」と「村岡ダブルフルウルトラランニ

ング」のボランティアスタッフを経験できた。みかた残酷マラソンでは名前応援というランナーの方のゼッケン番号から名前を特定し「〇〇さん頑張れ」という風に実際にランナーの方の名前を呼んで応援をした。選手からは好評で、「ありがとう」と手を振ってくださる方もおりとても楽しくボランティア活動することが出来た。村岡ダブルフルウルトラランニングでは、民芸班の一員として一日中ソーラン節を踊った。一日中踊るのはとてもしんどく、つらい経験でしたが、ランナーの方が一緒に踊ってくださったり、逆にランナーの方がこっちを応援して下さったりして貴重な体験ができた。これらの地域活動から、人の持つあたたかさや村岡の自然の美しさなど地域の魅力を再確認することが出来た。集落調査・マラソンスタッフを通じて私はボランティア活動の楽しさを学んだ（写真2）。



写真2 マラソンボランティアの様子

3.地域探求で学んだこと

地域探求の授業では通常の教科書などを使う様な授業はほとんどなく、校外から講師の方を招き、出された課題に対してグループ、又は個人で考えたものを発表しあうといったかたちで授業が進んでいくことが多かった。その他にも校外に出ていき実際にその土地で地域の資源を体験するような授業をもあった。一年次

には、村岡商店街周辺や御殿山の歴史をフィールドワークをしながら学び、神鍋山では但馬の植物の調査とその植物の図鑑の作成をするなど、地域の資源や魅力の確認、再発見をすることが出来た。私は歴史が好きのため、村岡の歴史の授業は特に興味を惹かれるものとなった。現在の村岡商店街は山名氏が攻めてくる輩を家臣達がすぐ守れるようにできていたことは特に印象に残っている。また、香美町には自然が溢れており、山・川・海はひとつなぎになっており、それが香美町の魅力の一つだと学んだ。（写真3）



写真3 地域学入門の様子

二年次には、鳥取大学のアレクサンダー・ギンナン准教授を講師に迎え、香美町にある石造物に焦点をあてて調査を行った。実際に村岡区萩山にある一二峠御廟や村岡区福岡にある八幡山公園の石造物などを調査した。石造物の調査をすることで石造物には建立された時代の人々の想いが詰まっており、調査をすることで当時の人々の石造物に対する想いが分かるのではないかと考えた。そして今回の石造物調査の結果を57期生の先輩方が残した成果物を参考にして映像という形で残すことが決まった。

二年次の夏季休業中には奈良県明日香村とオンライン研修をした。明日香村は古代の石造物が多数存在し、その石造物

を観光資源として地域活性を目指している。緊急事態宣言がなければ実際に明日香村に足を運び明日香村の石造物や人々の暮らしを肌で感じ、香美町の地域活性へとつなげるべく研修えたのだが、代替措置としてオンライン研修というかたちで実施されたことは少々残念であった。明日香村は村独自の法律「明日香法」を作り村の景観の保護をし、村全体で石碑・石造物を守っていこうと動いており、世界文化遺産の登録に向けて村全体で頑張っている。また、「あすかなび」という石碑・石造物の場所がインターネット上でわかるシステムや石碑の復元品を、遠隔地での講演会に用いて実際に石碑の雰囲気などを感じられるような取り組みもしていた。この他にも明日香村は、「民家ステイ」を行っており、修学旅行生や外国人観光客などがホームステイのような感じで明日香村で生活を体験するというものである。「民家ステイ」の特徴としてステイ先の家族と一緒に料理を作る、特別なことはしないという決まりがあった。宿泊客も第二の故郷のように明日香村を感じる方がいるほど落ち着くそうである。「民家ステイ」の利用者は年々増えているようで「民家ステイ」によって明日香村に活気がもたらされている。明日香村は歴史的風土の保存等の邁進を大きな目的とし、石造物を利用した観光や地域産業振興、観光来訪者の長期滞在を見込んだ古民家の活用・再生をすることによって民間活力の導入を促進するとともに明日香村の魅力が体験できるプログラムの充実や宿泊者増加のための施策を考えていた。私は地域活性を考える際には移住者を増やすことが大切だと考えていたが、地域の魅力を利用した観光客の増加を目指すことも大切だと学んだ（写真4）。



写真4 明日香村オンライン研修の様子

4.地域の現状

現在の香美町は、人口減少と少子高齢化が急速に進んでいます。昭和45年の国勢調査によると28,321人香美町に居住していたが、平成27年の国勢調査によると18,070人まで減少している。45年間で1万人以上の人口減少が見られます。令和2年の国勢調査速報値によると世帯数は5,905世帯で323世帯の減少、人口は16,096人で2,001人減少しており、平成27年から令和2年までの人口減少率は11.07%で県下1位の減少率となっている。さらに、令和2年の年少人口は2065人、高齢人口は6630人となっている。また、令和3年4月時点で町内120集落のうち、高齢化率40%以上かつ50世帯見未満の小規模集落は58、高齢化率50%以上の限界集落は36となっているのが現状である。

5.私の地域活性化プラン

私は香美町が今後活性化していくためには3つ必要だと考える。①香美町への観光来訪者を増やすこと、②香美町にある空き家を有効活用すること、③地域住民の意識改革である。

まず①であるが、香美町への観光来訪者を増やすためには香美町の魅力をうまく発信していくことが必要であると考え

る。香美町にある魅力として自然が美しいこと、カニや但馬牛など美味しい食べ物があることなどが挙げられる。しかし、その豊かな自然を活かした魅力がうまい形で外部の人に伝わっていないのではないかと考えた。YouTubeで「香美町」と調べた結果ほとんどの動画は再生数が少ないが、カニ漁についての動画は再生数が多いことがわかった。このことからカニは人からの関心が高いことが分かった。普段食べているカニ漁の様子に興味を持った人が動画の視聴をしているとコメントから読み取れた。また、再生数順に見たときに村岡区長板にある「コインスナックふじ」の動画の再生数が多いことが気になった。調べてみるとコインスナックというものは今は全国でもほとんどないもので近畿にはコインスナックふじしかないようであった。このことも香美町の希少なものであると考えたが香美町の魅力をどう観光客の方に伝えていくのかが重要である。少し目的は違うが神奈川県川崎市の事例を挙げたい。川崎市は公害などの歴史的背景から住民や近隣地域の住民からの印象が良くないことが課題だった。そこで、川崎市の魅力や現状を戦略的に発信しイメージアップを図る「シティセールス戦略プラン」を実行した。このプランとして、①対外的な認知度やイメージの向上、②市民による川崎市の魅力の再発見、市民としての誇りや一体感の醸成、③川崎ならではの魅力や活力の創出を目標として掲げた。まずは、市民が「川崎市とはどのような町か」を語れるよう地域の魅力を積極的に発信浸透させることに力を注いだ。川崎市は4種類の出版物を発行し、目的に合わせて使い分けている。また、情報発信はただ単に大量の情報を発信するのではなく、①川崎市には多彩な魅力があることを知ってもら

うために「文化芸術」「スポーツ」など情報の分類分けをして発信。また、各分野を連携させることで価値が生まれるようにしている。②伝えたいことを明確化するために統一感のある「ブランドメッセージ」を合わせて発信。例として、「音楽のまち」「スポーツのまち」などのブランドメッセージを作るときには市民にも参加してもらい、主体性を出す。といった活動をし、現在もさらなる地域の魅力を内外に周知するべく情報発信を行っている。香美町も広報を出しているが、川崎市のように幅広い分野ではなく、魅力も十分に発信されていない。内からの魅力向上のために、出版物に力を注ぐのも一つの手ではないかと思う。

次に②の香美町にある空き家の有効活用することについてであるが、町内にたくさんある空き家をリフォームすることで移住者や観光客に提供していけばいいと考える。香美町には平成30年の調査で7,380件あるうちの1030件が空き家になっていて、空き家率は14%となっている。今の日本では、都会の生活に疲れた人や、田舎の生活に憧れている人が田舎に移住したいと考える人が増えている。移住先として地方を希望している人は推計309万人というデータがあり、そのうち3%ほどが具体的に計画しているようだ。また、近年新型コロナウイルスの流行によるテレワークの増加などで田舎への移住への関心も高まっている。コロナ収束後にもテレワークを継続すると答えた企業はロイター企業調査によると、回答した248社のうち34%の会社が継続すると答えたという結果になった。そこで空き家をリフォームし、移住者に提供することによって家を建てる手間や取り壊すためのお金なども節約できると考える。また、町内には空き家が増え住民も少なくなり

寂しい雰囲気のある地区もある。私の住んでいる地区もそのような状況になっている。そこに移住者の方が入居することによって地区内の人口が増え、地区内での人と人のコミュニケーションの機会も増えるので地区内に少なからず活気がもどってくる。空き家のリフォーム費用については、香美町空き家バンクに登録していると補助金も出る。空き家バンクへの空き家の登録を促す活動もするべきである。また、移住者が求めるものとして、病院などの生活環境の充実、仕事、求人があること、住環境が整っていることが求められている。そういった移住者が求めていることの整備もすすめていかなければならない。また、平日は都市で働き、週末は地方に住む2拠点生活が増えるとも言われており、オンライン化する社会で都市に必ずしもいる必要がなくなり、いきなり地方移住はせず様子見も込めて2拠点生活を選択肢に入れている若者が増えつつあるようだ。

最後に③の地域住民の意識改革であるが、今の日本は東京などの大都市への人口の集中化が進み、都会と田舎の人口格差が広がっており、若者は進学や就職のために都会に出ていくというのが当たり前という社会になっている。そんな中で地域に住んでいる高齢者たちは、「若者が地元に戻ってきてくれたらいいな」と半ばあきらめに近い地域存続をしている。これは由々しき事態である。今の香美町内では限界集落と呼ばれる、集落としての共同体の機能を維持することが限界に近づいている集落が36もあることはすでに述べた。限界集落はこれからもっと増えていくとも予想される。今のままで本当に集落の存続はされていくのだろうか。私はそうは思わない。集落の人々が、若者が帰って来てくれること。町の政策で人

口減少が抑えられたり、定住者が増えることを期待するのではなく、集落の人々が若者が帰って来てくれるように働きかけをしていかなければならないのではないかと考える。具体的には集落に伝わる伝統の維持、継続や集落継続のために話し合いの場を設けるなどが挙げられる。例えば、祭り、民俗芸能等で時代の影響を受けて変化・消滅する可能性があるものを継承・発展させるためには、その現状や歴史、経緯等の詳細な調査により特色等を十分に把握し、伝承や普及などの目的に合った最適な記録作成を行うことや、これらの成果の有効活用によって、伝承者と支援者を確保していくことが必要である。また、現状集落の存続を若者に任せているという意識から高齢者たちも存続にむけて行動という意識に変える必要がある。確かに人口減少が進みこういった活動をするのが出来なくなってきている集落もある。そういった場合は町が補助したり、高校生が支援をしたりと、町や若者に頼った集落の存続ではなく地域の人たちが一丸となってこれからの香美町を創っていく必要がある。「地元住民の意識改革」を行うには①まず、地元住民にまちづくりを考える機会や場をつくること。②実践できる機会や場を用意すること。③そして、「よそものと地元住民の交流」の機会や場を用意することが必要である。

6.まとめ

地域創造系での活動では、通常の授業では経験することが出来ない体験をすることが出来た。村岡高校は地域とのつながりが強く、地域とのつながりを大切にしている高校なため、地域に出て活動することが多い。その中でも地域創造系では、地域に出ていく機会や地域の方たちと会話をすることが多く、活動内容を発表を

する機会も多く、コミュニケーション能力やものごとに臨機応変に対応する力を身につけることができた。地域創造系に入ったことで身体も人間としても、入学時の自分より大きく成長することが出来たと思う。今の香美町では、人口減少と少子高齢化が急速に進んでいる。それを止めるのは極めて難しいが、減少の抑制はできると考えた。そんな中で、私が地域活性化プランに挙げたように観光客の増加のために活動することや空き家の活用、地域住民の意識改革をしていけば住民の方々の活気があふれた町になると考える。地域の活性化は簡単に出来ることではなく、達成できるのかは定かではない。しかし、何事もやってみないとわからない。自分の生まれ育った地域がなくなるのは悲しいと感じ、それは阻止していきたい。自分にできることはまだまだ少ないが、地域のことを常に考え高校生活を送ってきた。日本の未来を担うためにも村岡高校の地域創造系に入ってよかったと今では思っている。

私の地域活性化プラン

～香美町を第2のふるさとに～

3年2組5番 井端 夕夏

1. はじめに

私は中学生の頃から「大人になってもここ（香美町）にいたい」と思っていました。でもその理由が自分の中ではっきりとはしておらず、心の中でどこかもやもやとしていました。そんなとき姉が地域創造系での活動を家で話していたり、近くでその様子を見たりして私も村岡高校の地域創造系に入り、地域について学びたいと思い始めたと共に私の地域に対するこの想いはどこから生まれているのか知りたいと思うようになりました。

そこで私はこの卒論で、地域創造系を通して学んだことや香美町により多くの人に来てもらうプランを述べようと思います。

2. 地域探求で学んだこと

私は大きく分けて4つのことを地域探求の中で学びました。

1つ目は積極的になることです。私はもともと人と話すこと、特にグループワークなど大人数での話し合いが苦手でした。理由は私の意見を言ったところでなにも変わらないのではないかと、みんなに変に思われたらどうしようと思ってしまうからです。そのため、自分の考えはしっかりあるのになかなか言い出せず、人目ばかり気にしていました。

しかし、高校2年生になりグループワークが一段と多くなり提案や疑問に思ったことを発言する場面が多々ありました。最初は緊張していましたが、自分の意見

を伝えると周りの人が共感してくれたりたくさん話し合いをしたりして、より良い案を考えられた達成感を感じました。自分の意見に自信を持つことができ徐々に積極的な姿勢へと変わることができました。またこの経験より、周りの人とたくさん意見交換をすることでさらに良い考えがうまれることを感じるようになりました。

また、発言だけではなく行動も積極的になりました。例えば、村高フォーラムのときにパネルでの発表を私がしたいと自分から手を挙げてみたり、先生に参加して欲しいと頼まれるといろいろなことに挑戦してみたいと思うようになりたくさんのイベントに参加させていただいたり、自然と積極的に活動したいと思うことが増えてきました。

2つ目は、視野を広く持つことです。そのことを強く感じられた体験は「奈良県明日香村オンライン研修」です。新型コロナウイルスの影響で直接現地に行くことはできませんでしたが、明日香村の教育委員会文化財課の方や現地ガイドさんの方々にお話を聞いて私はそう感じました。まず教育委員会の方のお話で、明日香村の石造物は大きくて直接見に来ていただくしか方法がなかったそうですが、どこでも持ち運べるよう復元品を作ったということです。私たちもそれ以前に石碑をどう広めるのかたくさん意見を出していました。ですが、その意見の多くがどうしたら香美町に石碑を見に来ていただ

けるのか、SNSでの発信をしてみてもどうかといった「来てもらう」「スマホやパソコンを通して見てもらう」といった“してもらおう”ことばかりだと気づきました。私はこの気づきを活かして、発信方法を考える場面があったとき来てもらうばかりではなく、私たちが他の地域に出向くことも視野に入れて、新しい発信方法を考えたいと思いました。またこの気づきと同時に考えに限界を作らず活動することの素晴らしさを感じることができました。

現地ガイドさんのお話で印象に残っている言葉は「魅力を発信するためには、まず地域の宝を知ることを楽しみと感じることが大切」です。今まで私は地域の素晴らしい石碑を知ることを楽しみと思ったことはありませんでした。ですが、人に魅力を伝える前にまず自分が学ぶことを楽しいと思っていないとより良い魅力発信はできないと感じたとき、これからは自分なりの視点で石碑について仮説をたて、調査してみようという気持ちが湧いてきました。実際に自分なりの視点で考えてみたことによってこの石碑はどんな思いで作られたのか、なぜこの場所にあるのかといった想像が膨らみ家族や友達に聞いてほしいと思うことが多くなりました。



図 1. 明日香村オンライン研修の様子

3つ目は、相手に伝えることです。私は

昔から人に説明することが苦手で常に自分の発言に自信が持てず、早口になったり目を見て話せなかったりと同じ失敗を何度も繰り返していました。しかしそんな私でも克服することができたと感じられた体験がありました。「地域創造ハイスクールサミット in 北栄」です。ここでは、数校の前でのオンライン発表でした。ですが、自分たちの活動を全く知らない大勢の人達の前で私たちが行っている活動を自信が無さそうに説明しても相手にはなにも伝わりません。そのため、私はゆっくりはきはきと話すよう心がけました。するとこの意識のおかげで練習を積み重ねていくごとに、自分の発言に自信を持つことができ、今までは硬い表情で発表していましたが本番では笑顔で楽しみながら発表することができました。その後も人前で話すことや地域創造系の授業体験にも参加させていただき、人との交流が楽しいと感じるようになり自分の成長を身に染みて感じるすることができました。

4つ目は、人とのつながりです。私は地域の石碑を調べる上で何度か地域の人にお話を伺う機会がありました。

家の近くにある石碑を調べたとき地域の方にお話を聞きに行ったのですが初対面なのに気さくに話してくださったり、お話を聞き終わった数日後に「石碑についての情報はあれだけでよかったですか、良い発表はできたか」と心配していただいたり何気ない一言でもとても嬉しい気持ちになり地域の人との交流の大切さ感じました。また兔塚地区にもインタビューをしに行ったことがあり、班の中では私だけ住んでいる地区が違いました。そのため地区が分からない時があったのですが「この地区にはこれがある」と言って地区がある方向へ指を指しながら説明していただいたり一緒に石碑があるとこ

ろに行っていたりなど、香美町の人のあたたかさを感じることができました。最近ではネット社会でほとんどのことをインターネットで知れますが、こんな社会だからこそ直接お話ししたり聞いたり見たりする“人とのつながり”の重要性を感じたと共に香美町ならではの人のあたたかさを感じられた機会でした。



図2. インタビューの様子

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私は総合的な探求の時間で、バレーボール部とスキー部で構成されている“民謡集団蘇武”に所属しています。民謡集団蘇武とはソーラン節を披露して地域に元気を与えることを目標として活動を行っています。披露するのは地域のお祭りや学校のオープニングとして踊ることがほとんどで、私が1年生のころは夏休みもソーラン節を踊る予定が多くありました。私は地域の方の前で踊っているときに見える、お年寄りの方の手拍子や、幼稚園・小学生の子と一緒に踊ってくれている姿そして地域の人との一体が感じられるあの雰囲気が好きでした。しかし新型コロナウイルスの影響で披露する場が少なくなった今、ひたすら体育館で汗を流し足が痛いと呼びながら必死に練習しても地域の人に見えていただけないことに

やる気をなくすことや悲しい気持ちになったことがありました。ですが、私のそんな思いを吹き飛ばしてくれた言葉がありました。私は集落調査である地域に行っていたのですが、そこである男性が「村岡高校のソーランを見ていると元気をもらえる」と言ってくれました。私にはその言葉がとても胸に響いたと同時に元気を与えるべきである高校生が逆に勇気づけられてどうするのだ、と思いました。また、私たちが踊るソーラン見ることを楽しみにしてくれている大勢の人がいることを忘れずに今後も練習に取り組みたいと気持ちを新たにすることができた貴重な時間でした。また私たちは高齢者バージョンといった、椅子に座っていても踊れるソーランを作りました。私も村高フォーラムのときに披露するため振り付けを覚えましたが、腕を常に動かすので疲れたりリズムが難しかったりと踊ってみたいとわからないことだらけでした。私はこの経験から、相手の目線にたって行動することの大切さや椅子を使ったソーランを通して新たな高齢者との関わり方を知ることができました。

村岡高校生がスタッフとして参加するイベントの1つに村岡ダブルフルウルトラランニングがあります。私は小学生の頃からランナーの方に向けてメッセージを書いたりしていましたが、外に出て応援したりランナーの方のサポートをしたりすることは一度もありませんでした。そのため、私にとってスタッフとして参加することは新鮮で日本全国から人が集まるということで少し緊張しました。私の当時の担当はゴールしたランナーの方にアンケートをとることでした。長い距離を走った後だったのでアンケートに答えられるほどの元気はあるのだろうか、快く答えてくれるのか心配な気持ちを抱

いていましたがそんな気持ちはすぐなくなりました。ゴールしたみなさんはとても笑顔で、アンケートに答えてほしいとお願いすると「ぜひぜひ」とみなさん明るく言ってくださいました。そしてみなさん「楽しかった、また来年もみなさんに会うため絶対来ます」と言ってくれて、村岡の自然だけではなく地域の人を大切に想ってくれている人は私たち住民だけではなく全国各地にいらっしゃることを知れた思い出に残る日でした。また、ランナーのみなさんがダブルフルを通して仲良くなった方と写真を撮ったり会話したり抱き合っているのを見て、この村岡がみなさんにとって思い出の地であり幸せになれる場所だと実感しました。ダブルフルを通して学ぶことができたコミュニケーション力や今自分が何をすべきか考え行動する力、地域一体となってイベントを盛り上げようとする気持ちをずっと大切にしたいです。また高校を卒業してからも地域のイベントに参加したいと思いました。

4.地域の現状で感じていること

様々な活動を通して感じたことは、地域の方には私たち村高生や地域創造系の生徒が普段どんな活動を行っているのか“村高フォーラム”で知っていただけますが地域外の方には知らない人がたくさんいると思います。また、地域の方とお話した時にほとんどの年代の方が「この地区にはなにもない」と言っており魅力がないと消極的に思っている人が多いと感じる機会がありました。

5.地域に必要なだと思われること

地域の現状をふまえ今の香美町に大切だと思うことは、村岡高校と地域がより連携し、新たな魅力を作ることだと考え

ます。連携とは具体的に村岡高校の地域元気化プロジェクトである5グループ(8班)を活用し、香美町のこと、そして村岡高校の活動をあまり知らない地域外の人に向けた体験型の企画を作ることです。地域外の人に向けた体験型の企画を行うとなるとよりメディアも村岡高校に注目し、たくさんの地域の方に香美町を知ってもらえる1つのきっかけになると考えます。また、香美町が注目されると地域元気化プロジェクトのそれぞれの班に携わっている地域も知ってもらえると同時に私たち地域住民も香美町に対するマイナスな思いをプラスの考えに変えていけると思いました。

6.私の地域活性化プラン

私が考えた地域活性化プランは「3日間ほど帰っておいで in 香美町」です。

ターゲットは田舎に来たことがない、自然に囲まれたところで生活したことがない10~30代です。そして10~30代は将来田舎に住みたいと思っている割合が男女とも多いのと1番SNSを利用している年齢層だと思うので宣伝にも繋がると思っています。

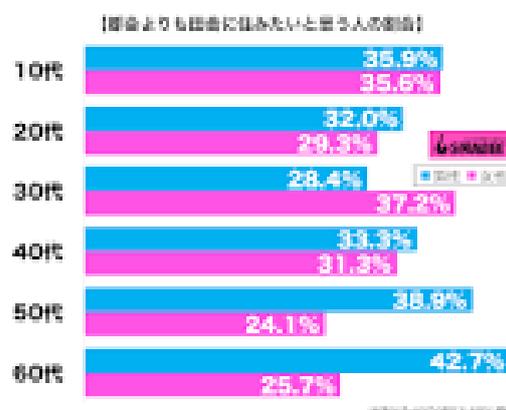


図3. 都会よりも田舎に住みたいと思う人の割合

香美町には春夏秋冬さまざま魅力があり

ますが大勢の人が来てくれるのはダブルフルや残酷マラソン、スキーといった一定の期間のみであると感じていました。ですが、春には山菜採り、夏には海やキャンプや昆虫採り、秋は紅葉や食べ物（松茸など）、冬はスキーが楽しめるなどどの季節に来て楽しめることがたくさんあります。そこでこのプランは、春夏秋冬に合わせた四季折々のプランを計画し香美町でしか体験できないこと、香美町ならではの食を楽しんでもらい田舎に住みたいと思った1つのきっかけにしてほしいと思いを考えました。

秋の香美町ツアー1・2日目	
体験1→木の殿堂での物作り (組み木・おもちゃ作り)	
昼食→自由	
体験2(選択)→棚田班と共に稲刈り →紙漉き体験(和雲)	
夜食→自由	
宿は○○か○○	“1日目終了
“	
体験1→八幡山彫刻公園 (高校生のガイド)	
昼食→自由	
体験2→とちのき村 ・野外活動(木登りなど) ・キャンプ(テント張り)	
夜食→とちのき村でバーベキュー 香美町で採れた松茸や但馬牛	
	“2日目終了
	“

図4. ツアーのイメージ図(1・2日目)

このプランの特徴は2つあります。1つ目はプランが選択型であることです。香美町には八幡山彫刻公園や木の殿堂、とちのき村など自然や文化を学ぶことができ体験もできる場所があり地域外の人には非日常を感じさせる貴重な体験ができると思います。なので、プランを選択型に

し、自分が体験したいことを選択してもらうことで、より満足度が高くなり良い思い出へと繋がると考えます。2つ目は村岡高校の地域プロジェクトをツアーに組み込んでいることです。香美町独自のツアーとして村岡高校で行っている棚田班などの稲刈りといった活動をツアーに入れ込み、後日できたお米を配送するというお楽しみ付きにします。すると近隣や家族の人にも自然とツアーのことが広まり香美町の知名度が上がると共に私たち生徒のやる気やコミュニケーションの向上に繋がると思います。また知名度が上がったり地域外の人「この景色きれい」「この体験のあれが面白かった」などツアーに来てくれた方の声が身近で聞けたりすると、自分では気がつかなかった地域の魅力にふれられ地域に対して消極的に思っている人が減ると考えます。

また施設の説明や地域のガイドを私たちが行うことで私たち自身も魅力を再発見することができ、来てくれる方も「この人の説明わかりやすかった」「次はこの季節に来てみよう」と思ってもらえると思います。地域の若者が活動(ガイドや稲刈り)しているところを実際に見てもらうことで、高校生が地域活性化に力を入れていること自体を魅力にしていくこともでき観光客の増加に繋がると思います。

香美町には宿や料理店もたくさんあります。ご飯を食べる場所も自由にする事で宿ならではの食べ物や宿の近くにある料理店を知ってもらえ、リピーターも生まれると思います。また同じ宿を何度も利用していただくとお互いに信頼関係が生まれ「おかえり」や「帰ってきたで」など言うようになるのではないかと感じました。同じ宿を何度も利用していただけるように次回使えるクーポン券を発行するのも1つの方法だと思います。また

村岡高校には食文化班もあり、食文化班とそれぞれの料理店が共同して考え・作ったその店独自のメニューを提供することで観光客にインパクトを与えられると共に、季節ごとにメニューを変えるなどの工夫をすることによってどの季節に来ても楽しんでもらえる香美町に生まれ変わると思います。

このようなプランを3日間で行うことでほどよい満足感が得られ、次はあの体験をしたいと感じていただけると考えます。他の地域の人だけではなく、香美町住民にも参加してもらい香美町のよさを再認識してもらうことも可能だと思います。

7.まとめ

地域創造系に入り一から地域について考えることによって、地域に対しての見方や考え方が大きく変わりました。また、みんなでたくさん意見など出し合い案を考えることによって地域に対する思いも高まり一体感が生まれました。この3年間は自分の中の課題を多く克服することができ、コミュニケーション能力や協調性を向上できたと実感すると共に自分の行動や発言にも自信を持つことができた貴重な時間でした。3年間で得られたことや学んだこと、香美町に大人になってもいたいと思った理由は地域の人々の温かさにあったこと、先生への感謝の気持ちなどを忘れずこれからも地域に何らかの形で関わっていき恩返ししたいです。

私の地域活性化プラン

～若者の訪れる地域に～

3年2組11番 北村 海人

1.はじめに

私は入学当初は香美町のことを全くと言っていいほど知らず、また興味もありませんでした。しかし今の地元の現状、他の地域との違いを知ることで「地元で何かできることはないか」「地元だけのものはないか」と地元を今より活気ある香美町にしたいと思うようになりました。そんな私の地域活性化プランを述べます。

2.地域探求で学んだこと

1年生「地域学入門」では「地域を知る」をテーマのもと、地元の子供たちと一緒に川に入り、水生昆虫調査を行ったり、竹野海岸に行きシーカヤック、スノーケリングを通して海の生物や環境を調査したり、熊の生態、植物調査など現地に行き、見て触れて体感することを幅広く行いました。

2年生「地域探求Ⅰ」では「地域を深める」そして3年生「地域探求Ⅱ」では「地域を創る」をテーマのもと、私たちは石碑に焦点をおいて学びました。なぜ石碑に焦点を置いたのかというと、地域創造系の事前課題で作ったプレゼンテーションで石造物を取り上げたものが多かったためです。そのため私たちは石碑を用いて地元をアピールしている奈良県の明日香村で研修を行いました。明日香村研修ではリモートで明日香村にある石碑の説明や明日香村の取り組みについて学びました。なぜリモートなのかというと、新型コロナウイルスの影響で他県に行くことが

難しかったからです。明日香村は石碑を大々的に推していますが香美町は推していないこと、明日香村、香美町共にたくさんの石碑があるなど、香美町と明日香村の似ているところ、違うところが明確にわかりました。私たちの3つ上の先輩も八幡山公園の石碑について学んでおり、パンフレットを卒業作品として製作されていました。しかし、私たちの調べた石碑（小人の墓、一二峠御廟、八幡山公園）は、実際に行くためには車が必要で、決して“だれでも“行けるような場所ではありませんでした。そこで私たちは海外で作られた「石碑を調べたDVD」を参考にして、石碑の動画だけでなく、その石碑のことに詳しい人にインタビューし、その時の様子も動画にする、石碑がある周りの景観を動画に収めるなど、動画を見るだけでその石碑が理解できるような動画を4班に分かれてそれぞれ違う石碑で制作しました。私は村岡区萩山にある「一二峠御廟」を調べました。その結果、その石造物は山名豊国公のお墓であることがわかりました。なぜ萩山に豊国公のお墓があるのかというと、三代・矩豊が城下町村岡を開くにあたり、豊国公の加護を願うために妙心寺から分祀したと言われていました。また、夏休みを利用して地域創造系全員で行う集落調査でその集落のイベントや今と昔の違いなどを聞き取り、パンフレットにまとめる活動も行いました。私は小代区の秋岡地区に行き、秋岡地区に子供が多い理由などを聞き取りました。

子供が多い理由として、Uターンが多く、秋岡地区側も戻ってきたいと思うような地元全体での子育て支援を行っている事がありました。その話を聞いて、地元全体での取り組みはとても大変だと思うし、人の子供を怒る事は躊躇することだと思うので、自分の子、人の子関係なくしっかり怒れる地域は貴重なのかなと思いました。

3年間の地域創造系の授業を通して、地元の人がどういうことを考えているか、感じて、どのような取り組みを行っているのかを知ることができました。また、地元の課題や改善案を高校生だけでなく町長や他の大人たちと話す大切さを学びました。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

村岡ダブルフルウルトラランニングや美方残酷マラソンなどの地元で行われるイベントのスタッフとして参加しました。村岡ダブルフルウルトラランニングには名前応援でランナーを応援するという独自の応援方法を経験しました。名前で応援することで、その応援が業務的ではなく、しっかりランナー自身に向けられて、ランナーの「頑張ろう」という気持ちを奮い立たせてくれるのかなと感じました。村岡ダブルフルウルトラランニングや美方残酷マラソンのゴール間近でロータッチを行うとき、ほとんどのランナーがロータッチをしてくれました。私は、ゴール手前だと疲れてタッチを返してくれる人は少ないのではないかと考えていました。しかしほとんどのランナーはどんなにしんどそうでもタッチを返してくれて人の温かさを感じました。こういった地元のイベントにスタッフとして参加することで地元と触れ合うことができ、地

域活性化につながると思いました。

また、総合的な探究の時間「村高発 地域元気化プロジェクト」では1、2年次は食文化班、3年次は環境A班に所属していました。食文化班では地元食材を用いてオリジナル料理を作りコンクールに出したり、「食べ物かるた」という地元で採れる食材の絵を描いてかるたを制作しました。私はそこで地産地消の大切さを学びました。香美町で採れた食材を売って地元以外の人に食べてもらうことは大切ですが、まず私たちがその食材の一番おいしい食べ方を知ることが大事であると考えたからです。また、食べ物かるたなど、子どもからお年寄りの方まで、遊びながらも地元で作られている食材を学ぶことができる考えるので、かるただけでなく、ほかの遊びにも応用できるのではないかと思いました。

環境A班では田植えから草抜き、収穫までを行います。私は香美町で採れる食材はどのような環境で作られているのかを学ぶために環境A班に所属しました。田植えの時に稲が多くても少なくてもいけないことに驚きました。また草抜きの時、かご一つ分では収まらず、何度もかごの中の草を投げ捨てましたが、お米一つ作るのにここまでの苦労があることも初めて知ることができました。また、棚田があることのメリットを学びました。今までは、海外はパンが主食で、日本は米が主食であることに何も疑問を持ちませんでしたが、日本では畑作がしにくいことや、水田の方が畑よりも優れていることを学び、日本の主食が米である理由を知ることができました。しかし棚田が徐々に減ってきているということも聞き、高校生が地元の人と協力して棚田を守ることが大切なのではないかと感じました。なぜ棚田を守ることが大切なのかという棚

田があることで、土砂崩れを防止する働きがあるからです。そのため地元の人と高校生が一緒になって棚田を守ることで土砂崩れを防止ことに繋がり、地域活性化にもつながると思いました。

4.地域の現状で感じていること

私は香美町にある問題は2つあると考えました。1つ目は若者が都会に出て帰ってこないことです。3年生の集落調査で秋岡地区に行き、区長さんたちと話をしているときに、「秋岡地区を出る人もいるけど、奥さんと子どもを連れて戻ってきて、伝統行事を繋いでほしい」とおっしゃっておられました。これは秋岡地区だけでなく、他の地域にも共通しているのではないかと考えられます。なぜなら、秋岡地区だけでなく、どの地域でも少子高齢化率は高くなっていると考えられ、限界集落となっている地域もあるからです。また、2つ目の問題として都会に出ていく影響で空き家が増えている事です。人は出ていくことができても家は動くことはできません。その結果、家だけが地元に残り続けることになってしまいました。2013年、総務省が実施した「住宅・土地統計調査」によると全国の空き家率が平成10年は11.5%に対し平成25年は13.5%と記録されています。この2つが香美町にある問題だと考えました。

5.地域に必要なと思われること

では上記の問題はどうすれば改善されるのか、私は2つ必要なことがあると思います。1つ目は、香美町を訪れてもらうことだと思いました。なぜならその地域を訪れないとわからないことがたくさんあると思うからです。ではどうやって地元を訪れてもらうかという問題になりますが、香美町には740件の空き家があり

ます。その空き家を活用することが大事なのではないかと考えます。

2つ目は、地域によってインターネットが繋がらない点も改善しなくてはならないと思います。今現在日本は電子機器が普及し、誰もがインターネットを扱う時代となりました。そんな中でインターネットが繋がらないとなると不便であり大変であると考えられます。私はこの2つが香美町に必要なものであると考えます。

6.私の地域活性化プラン

私は香美町を訪れてもらえるようなプランを提案したいと思います。

(1)空き家リフォーム計画

地元にあるたくさんある空き家を使うことで空き家を減らし、人を集められると考えました。例えば外観をきれいにし、内装を大きく変えてカフェを営んだり、人が居心地よく仕事や勉強をすることができる場所を造ることです。この考えに至った理由は、私の姉が高校3年生の時に、周りには勉強することができる場所がないため、高校に残って勉強していました。私はその話を聞いた時「姉だけでなく、香美町出身の他の学生もそう思っているのではないか」と考えました。そこで、空き家を使うことで場所の確保ができることを思いつきました。しかし、空き家は持ち主がいるため、勝手に使うことはできません。そこで、空き家リフォームを考えている地域が空き家を買取ることが大事だと考えます。空き家の買取りやリフォームは地域が行い、運営は志願者が行うといった地域と人が協力し地域活性化を行うことが大切だと考えます。

(2)インターネットの整備

インターネットを通して地域の魅力をたくさん発信することで人を集められる

と考えました。2018、2019年ともに13～49歳の人インターネット使用率が70%を超えており、2019年に至っては50～59歳の人インターネット使用率も70%を超えています。このことから、日本人の大半の年齢の人がインターネットを活用している事が分かります。この事実をもとに、インターネットで地元をアピールすることでインターネットを介して大勢の人の目に入ると予想されます。実際香美町の運営しているインスタグラム「kaimista_link」や兵庫県公式インスタグラムアカウント「love_hyogo」は若い世代を中心にたくさんの人の目に入っているのではないかと考えます。しかし、日本でのSNSユーザーランキングは1位がLINEで2位がTwitterとなっています。また、世界で見ると1位がFacebookで2位がYouTubeとなっています。このことから、インスタグラムだけでなく、TwitterやFacebookでの発信も大切になると感じました。しかし、香美町公式Twitterアカウントでは、あまり「いいね！」がされていないように感じました。ハチ北スキー場と比較すると、ハチ北スキー場の「いいね！」件数が400超えに対し香美町公式は「いいね！」件数が32という圧倒的に少ないことがわかります。しかしそれは香美町だけでなく私たちにも原因があるのではないかと思います。香美町公式Twitterアカウントはつぶやくことしかできません。しかし、それらを私たちがリツイート、いいね！することでさらに広げることができます。また、最近YouTubeのショートビデオというお手軽に見れる動画も増えてきています。下にスクロールすることで違う動画にいく仕様となっています。私はそのショートビデオを使って手軽にアピールすることもいいと考えます。しかしショートビデオ

とは関連したものが多く出る傾向にあり、一方通行では出てこない可能性があります。なので、様々な動画を作る必要があります。例えば正攻法である大自然の動画を投稿した後、女子高校生を用いて紹介する動画を投稿するなどです。「大自然」と検索すれば1本目が引っかけ、「高校生」「JK」と検索することで2本目が引かけると予想されます。要するにキーワードにいかにも多く引かけられるかが重要になると考えました。しかし、一部の地域ではインターネットが繋がりにくい環境にあることを友達に聞きました。今現在の日本でインターネットが繋がりにくいことはデメリットでしかありません。今地域でできることはインターネットを繋がりやすくすることだと思います。山などの起伏が激しい場所は電波が繋がりにくい傾向にあります。しかし、山の中腹などに今以上に電波塔を建てれば解決するのではないかと思います。電波塔を建てるにはそれなりにお金がかかると思います。しかしインターネット環境が整備されることで、今以上の情報発信が可能ではないかと考えました。

過疎化、少子高齢化が進んでいる現在に必要なことはこの大自然をより多くの人、特に若者に知ってもらい、田舎ならではの心落ち着く場所を提供することが大事だと考えます。若者の情報発信力はとても強く、それだけでもよりたくさんの人の目に留まることができると思うからです。だから私は、(1)、(2)で若者を呼び込むことが重要だと思います。

7.まとめ

私はこの香美町に生まれ、香美町で18年間生きてきました。しかし香美町のことをあまり知りませんでした。しかし地域創造系の授業を受けたことでこの地元

にしかないもの、この地元の問題を知り、問題のために私たちは何ができるのかを学ぶことができました。特に私はそこに石碑がある理由や背景、もともとはどういった形だったのかなど、石碑のことについて多く学ぶことができました。私たちは香美町の魅力を知り、守りそして受け継ぐ義務があると思います。地域外の人に香美町の魅力を伝え、地元の人にはさらに魅力を知ってもらい、地域活性化に少しでもつながってもらいたいと思います。この地域創造系の授業を通して、私は香美町が好きになり、もっと香美町のことを知りたいと思いました。しかし地域創造系の授業で習ったことは香美町の魅力のごく一部に過ぎないと考えます。だから私はこれからも香美町の魅力を探し続けていこうと思います。

私の地域活性化プラン

～香美町での子育ての魅力を再発見・再発信～

3年2組17番 坂本 実優

1.はじめに

私が村岡高校の地域創造系に入学した理由は、生まれ育った地元の魅力や現在抱えている問題を知り、地域の活性化方法を考えることで地元へ恩返しをしたいと思ったからだ。3年間の地域創造系での活動を通して、香美町を元気づけたいという熱い思いを持ち、努力している人が多くいることが分かった。そこで私はその方々によって大切に守られてきた香美町を今後自分も守っていききたいという思いが芽生えた。

本稿では、3年間の活動から学んだことや感じたことをまとめ、私の地域活性化プランを提言する。

2.地域探求で学んだこと

私は地域探求の授業の中で、今まで気づいてなかった地域の魅力をたくさん知ることができた。1年次の地域学入門では、香美町の山・川・海を実際に訪れて調査を行ったことにより、香美町は自然が豊かな土地で、その豊かな自然を私たちが守っていかなければならないと気付いた。NPO法人コウノトリ研究所の菅村定昌さんを講師に招いて行った但馬の植生についての授業では、自然環境における人間の役割について学んだ。「香美町には豊かな自然があるが、その自然を汚したり破壊するのは人間である。しかし要注意外来生物の駆除や絶滅危惧種の保護など自然を守るのも人間で、人間がいないと自然は守れない。」という話がと



図1. 神鍋山植生調査の様子

ても印象的だった。私たち人間が生態系にどれだけ関わっているのかを学んだことで、自然を守るための人間としての役割を果たしていきたいという思いが強くなった。

2年次の地域探求Ⅰでは、60期生の探求のテーマを「石碑（石造物）を巡る香美の旅」と設定し、香美町内にある石碑を調査した。初め、石碑にスポットをあて地域の魅力を発信すると決まった時、正直「石碑って地味だし、興味を持ってもらえるのだろうか。」という不安があった。しかし、その不安は奈良県明日香村オンライン研修やフィールドワークなどの活動を行うことで消え、地域活性化への可能性をより感じるようになった。

夏季オンライン研修では、明日香村における文化財を活用した地域づくりを学び、香美町の文化財を活用した地域づくりの方策を考えた。明日香村の取り組みで感じたことは、地域づくりは行政と住民が一体となって行うことが重要だということだ。明日香村では「明日香法」と

いう法律があり、建物の高さを10メートル以内にし、屋根を瓦屋根にするなどの規制をかけている。このように住民が地域づくりに参加しているからこそ、古くから残る美しい景観が保たれ、人々を呼び込むことにつながっているということに知り、地域のことは行政に任せるのではなく自分も香美町の住民なのだという意識をもって地域づくりに参加したいと感じた。

また、現地ボランティアガイドの寺西さんの、「魅力を発信するためには、まず地域の宝を知ることを楽しいと感じ、楽しみながら地域を活性する方法を考えていくことが大切。」という話が印象的



図2. 明日香村オンライン研修の様子

だった。この地域の宝を知るということをもまず自分自身が楽しいと感じなければ、魅力を紹介する相手に興味をもってもらうことはできないと気付いた。この気付きは、今後石碑を魅力として発信していくために、まず石碑を知ることを楽しもうという考えに変わるきっかけとなった。

オンライン研修で学んだことを念頭に置き香美町の石碑を楽しんで知ろうという思いで石碑調査に臨むと、なぜその場所にあるのか、当時の時代背景、石碑の周辺の様子など様々な視点から石碑を捉えることができるようになった。また、どの石碑も当時の人々が大切にしていた



図3. 小代杉の石碑現地調査

自然や動物などを今後も忘れずに守り続けてほしいという人々の思いが込められていることも分かった。オンライン研修やフィールドワークを通して、石碑は地味だという私の考えは、いつしか石碑は調べれば調べるほどその地域の文化・歴史・自然などの特色を知ることができる“おもしろい”ものだと感じるようになった。

3年次の地域探求Ⅱでは、これまで学んだことを形にして活用するために、石碑を紹介する動画制作を行った。私は香住区岡見公園にある「小人の墓」を担当した。動画撮影をする前に、どのような構成で動画を作成するのかやどのような内容だと興味を持ってもらえるのかを皆で話し合った。動画撮影にあたって、小人の墓だけを撮るのではなく、そこまでの行き方、周辺の海・空・地層などの自然、同じく岡見公園にあるかまたりさんなどの動画を撮り視聴者を飽きさせない工夫を施した。

私たちが制作した動画は、コロナ渦ということもあるが石碑の中には危険な位置にあるものも存在するため、まずは実際に現地に行かなくても動画で香美町内にある石碑を知ってもらいたいという目的がある。さらに、この動画を見た人には当時の時代背景であったり人々の思いなど様々な視点で石碑を捉え、そこから

地域の魅力を感じ取ってもらいたいと望んでいる。私たちが制作した動画が、一人でも多くの人に石碑を知ることの面白さ、奥深さを伝えられるものになってほしいと願っている。



図4. 香住区岡見公園にある小人の墓

3.地域活動での学び

2年次から私は、総合的な学習の時間の「地域元気化プロジェクト」で集落調査班として活動した。2年次では新型コロナウイルスが流行していたため従来の集落調査方法を変更し、小代区内で頑張っている若者にスポットを当てインタビュー調査を実施しながら若者の魅力を発見し、発信するガイドブックを作成し



図5. かみあう vol.2 表紙

た。

活動を行う中でとても印象深かったことがある。それは、小代の魅力を尋ねた際にインタビュー皆が共通して「人の温かさ」と回答したことだ。例えば、

「ド田舎暮らしオジロちゃんねる」というユーチューブチャンネルで動画を配信している長瀬優也さんは、中学時代に部活動のバレーボールで県の選抜選手となり、神戸で大会が開催された際、50人ほどの小代区の人々が長瀬さんの応援に駆けつけてくれたことがあり、こんなことをしてくれる人がいるのはこの地域だけと言われていた。長瀬さん以外のインタビューも、同じように「人の温かさ」を小代の魅力に挙げ、自身の経験とともに述べてくださった。小代で活動する中で「人の温かさ」に触れ、助けてくれたり優しく見守ってくれる安心感が小代にはあり、そこから生まれる深い地元愛が



図6. オジロちゃんねる（西村さん・長瀬さん）インタビュー活動の様子

彼らが現在の活動をする原動力になっているのだと感じた。

また、この小代区の若者の魅力が詰まったガイドブックが地元の住民の手に渡った際は、地域の魅力を再認識・再発見し、地域のために頑張っている人がいることを知ってもらえるものになってほしいと思う。外部の人の手に渡ったのならば、小代の若者が地域のために行っている活動を知ってもらい、その中で小代の住民の温かさを感じ取り小代を訪れるきっかけにしてほしいと望んでいる。

3年次には従来の集落調査方法に戻り、小代区内の集落を調査した。3年次

の集落調査で学んだことは大きく分けて2つある。1つ目は、魅力を発信するターゲットを決めることの重要さだ。集落によって魅力は異なるということに加え、パンフレットを手にする人が求める集落の魅力も異なる。そこで、まずはその集落にはどんな特色があるのかを知り、次にどのような人が暮らすのに適しているのかを考え、話し合いターゲットを決定する必要がある。その後、再度集落を訪れ聞き取り調査でターゲットが求めている情報を掘り下げて聞くことが重要であると気付いた。手間はかかるがこのことが、より多くの人にガイドブックを手にとってもらい魅力を知ってもらう秘訣なのだと考えた。2つ目は、私たちの集落調査という活動は地元の方に喜ばれているということだ。城山地区で区長さんや副区長さんに聞き取り調査を行い訪れた際、「こうやって、村高生が集落のことを知ろうとしてくれて、それを発信しようとしてくれてるのがうれしい。」と言われていた。今まで私は、地域で活動をしている私たちが地域の人々の目にどう映っているのかをあまり考えたことがなかった。しかし、この言葉を聞いて村岡高校生が地域に必要されていることを実感し、うれしく思った。「地域のため」と活動を行ってきたが、「地域のため」という言葉の中には「地域の人のため」という意味も含まれているのだと感じ、地域の人に喜んでもらえるよう今後も尽力しようと改めて思った。

集落調査の活動を通して、多くの人に聞き取り調査を行ったことで、会話の流れの中で重要なことを聞き出す能力が身についたり、コミュニケーション能力が向上したことは、自分にとって大きな成果であったと感じている。また、集落調査の活動で地域の様々な魅力を知ること

ができたが、その一方で、地域の人々の集落に対する想いを聞くと、どの地域も課題を抱えていることが分かった。

4.地域の現状と課題

現在の香美町はやはり、少子高齢化による人口減少が最大の課題だと感じている。実際に香美町では、児童数が減少しているため小学校を統廃合してほしいとの住民の声が増加していると町長講演会で知った。統廃合を求める人の意見として、学校生活を少人数で送ることは人間形成に悪影響を与えるといった考えがあるそうだ。確かに、学力を競い合ったり人間関係が固定されてしまうなど大規模校に比べて欠点となることはある。私は移住定住を考えている人は、田舎で子育てをする面でこの欠点を気にしている人が多いため香美町への移住定住を進まない人がいると推測する。だが、香美町で育ったり、子育てをした経験がある人にしかわからない、子育てをする上での魅力というものが香美町にはある。その魅力を、移住定住を考えている若者に発信し、IターンやUターンで若者の人口を増加させる必要があると考える。

今までの集落調査の活動で地域の方に聞いた田舎での子育ての良さや、外部からの移住定住を勧める取り組みを考えている方から聞いた話をもとに、以下、私の地域活性化プランを提言する。

5.私の地域活性化プラン

私は、集落調査の活動で小代区城山地区を調査した際に、現在子育てをされている林本里嘉さんに城山地区で子育てをする上での良い点をお聞きした。

城山地区は車通りも少なく、畑や田んぼも多くあり、四季折々の魅力を感じられる穏やかな地域だ。その環境の中で、

これらの香美町で子育てをすることの魅力や「香美町おためし移住」を知ってもらう方法として、一つ案がある。地域おこし協力隊に所属していた方の話で、地域おこし協力隊の方は田舎への移住定住を考えている人が集まる場で香美町の移住定住に関して話をする機会があるそうだ。その機会を利用し、これらの移住定住を促す話ができれば、香美町への移住定住者の増加の実現につながり、さらに少子高齢化による人口減少の歯止めに近づくと考える。

6.まとめ

私は、3年間の地域創造系での活動を通して、高校に入学するまで気づいてこなかった香美町の魅力や課題にたくさん触れることができた。この経験から、香美町にある課題を知り、その課題を解決するにはどんな地域活性化プランが必要なのか、そして、そのプランは誰をターゲットにする必要があるのか、どうやって発信していくのか、それによって期待される効果は何か、など物事を論理的に考えられる能力が身についた。さらに、地域創造系ではプレゼンテーションなどで自分の考えを人前で述べる機会が多く設けられていたため、人前で話す力が身につけられたことも自分の中では大きな収穫だった。

また、3年間の地域創造系の活動の中で多くの方が、授業にかかわってくださったことが私の地域創造系での学びを内容の濃いものにしてくれた。例えば、1年次に地域の自然や歴史を教えてくださいました専門家の方々、集落調査で集落の魅力を語ってくださった方々、鳥取大学の先生、そして何より、授業の日程を組んでくださったり、困ったときはいつも私たちをサポートしてくださる高校の先生

方。多くの方との出会いがあったからこそ、今こうして「私の地域活性化プラン」が述べられたり、私の香美町への思いを深いものにしてくれた。

私は将来、中学校の英語の教員になることを目指している。そして、地元に戻り、教員の立場から地域に貢献していきたいと思っている。具体的には、授業でICTを活用し、海外との交流型授業を展開したい。その交流型授業で自分の地域について英語で紹介しあうことで生徒の英語力を向上させると同時に、海外の人に地域のことを宣伝し、日本に来た際に香美町を訪れるきっかけにしてもらいたいと考えている。さらに、一度香美町に訪れ、住んでみたいと感じてもらえれば、私の地域活性化プランで述べた「香美町おためし移住」でしばらくの期間、地域の人とかかわりながら生活を送り、そこで香美町での暮らしのイメージをつかんでほしい。

このように、村岡高校での学びを活かし将来も地域にかかわっていくことで、自分が生まれ育ったふるさとに恩返しをしたいと思っている。また、私の地域活性化プランを実現させるために、大学ではしっかりと学びを深め、大きく成長して、将来は地域に必要とされる教員になりたい。

私の地域活性化プラン

～時代に合った地域活性化～

3年2組22番 西垣 大空

1.はじめに

私が村岡高校に入った理由は単に地元の高校だからというのが理由で入りました。そして、地域創造系に入った理由は、私は難しいことに自分から挑戦したことがありませんでした。だから、高校に入ると同時に自分から何か難しいことに挑戦したいと思いました。地域創造系に入る前は地域のことには一切興味がありませんでした。しかし何度も地域のことについて学習していくうちに地域のことについて徐々に興味を持つようになり、今では地元が大好きになりました。そして最終的には地域のために役に立てるような人になりたいと思えるようになったのが地域創造系に入った一番の収穫だと思います。

2.地域探求で学んだこと

私たちは地域探求でさまざまな活動をしました。中でも一番印象的なのは「集落調査」です。集落調査とは、香美町にあるいくつかの集落にグループに分かれて現地調査や、地域の方にインタビューなどを行います。そして何度か集落調査を行った後に最終的に「むらの風景」という一冊のパンフレットになります。集落調査は3年間行われます。その3年間で一番心に残っているのは1年生の調査です。1年生の頃は何もかもが初めてで、不安と緊張で一杯

でした。しかも私はリーダーという大きな役目がありました。集落調査のリーダーとして私は、地域のインタビューする方にアポイントを取り、日程を組んで送迎の手配を班の仲間と共有し、実際にインタビューする際には中心となって話を進めていきました。とても大変なことばかりでしたが、自分にとって収穫できたものもあります。それは、アポイントを取ること、中心となって話しを進めること、班の仲間と協力することは大人になって絶対に必要なことだと思います。そして何もかも自分たちで行う「自立」という力がつくと思います。他にも自分の知らない地域に行くことによってその地域の隠れた魅力なども発見することが出来ます。こうして、長期にわたって集落調査を行い最後には班の仲間ですべてまとめます。そして自分たちが調べたことがパンフレットになった時は感動と達成感で一杯でした。その完成したパンフレットを地域の方に見てもらった時に「いいものができたね」と声を掛けていただきそこでも達成感を得ることができました。このような、集落調査一つで多くのことを感じたり、学んだりできたことがとても印象に残っています。

3.地域創造系の活動

私たちの活動は石碑を様々な視点

から見て、なぜそこに建てられたのか、石碑にはどういった意味がこめられているのかなど多くのことを調べました。2年生の時に新型コロナウイルスの影響で学校に行けない日が続きました。その時自宅で香美町にある石碑を調べ、その調べたことをリモートで発表し合いました。香美町には多くの石碑があり様々な意味が込められているものばかりでした。2年生では集団研修旅行で奈良県の明日香村に行く予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で行くことができませんでした。しかし、明日香村の方とリモートでオンライン会議をしました。そのオンライン会議でたくさんのことを学ぶことが出来ました。



図1. 明日香村とのオンライン会議の様子

まず、明日香村には沢山の石碑や石造物があり、それは形が猿に似ているなど形が変わったものや、規模が大きなものまで様々でした。他にもこの特徴を生かした石碑を世界遺産登録に向けて取り組んでいることも分かりました。明日香村は景観保全を目的として、コンビニエンスストアの屋根を集落の町並みに合わせて瓦屋根にするなど、景観が住民の方々によって大切に守られてきていることも分かりました。明日香村の学習で印象に残っていることが2つあります。

一つ目は、「民家ステイ」です。明日香村には大和・飛鳥民家ステイという取り組みがあります。まず、民家ステイとは、一般の家庭に滞在し生活体験を通して、ホストファミリーと交流を深め人との関わり方、心と心の触れ合いを学ぶことを狙いとしています。対象は歴史が好きな人や、主に学生です。その学生に「ほんもの」の歴史に触れながら学習することが出来ます。民家ステイでは、親元から離れて別の環境で生活するので自立するために必要なことを多く体験でき、民家ステイに行った地域の魅力などを知ることが出来ると思います。「大和・飛鳥民家ステイ」では史跡めぐり、収穫体験、郷土料理作りなど多くのことを体験することが出来ます。なぜ、この民家ステイが印象的だったかという、民家ステイを説明していただいた時に涙の離村式というものを聞きました。それは、民家ステイを通じて班の仲間とホストファミリーの間に絆ができ、最後には感動の涙で終わるというものです。これを聞いて私はとてもいいと思いました。そしてホストファミリーから、「第二のふるさとを忘れないで、また戻っておいでね」という言葉に心を動かされました。この民家ステイを通して短期間の間に多くのことを体験し、感じ、学ぶことができたところが民家ステイの印象的だった理由です。

二つ目は、明日香村教育委員会文化財課の「辰巳俊輔」さんです。辰巳さんは明日香村のことをすべて私たちに教えてくださいました。オンライン会議の中でたくさん質問することがありました。難しい質問もあ

りましたが、辰巳さんは簡単な具体例を上げ私たちに分かりやすいように説明してくださいました。その姿や、地元のことをすべて知り、それを武器にして人に発信している姿に憧れを持ちました。私は今まで地域のことにはあまり興味を持っていませんでしたが、その気持ちが変わった瞬間でした。もっと地域のことを勉強して誰かに発信していきたいと思うようになりました。このようなことが印象に残っている理由です。

4.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私が高校時代に地域で活躍して学んだことは、二つあります。

一つ目は、「地元の素晴らしさ」です。これは村岡高校に入ってなかったらあまり気づくことはなかったと思います。もともと地元は好きでしたが、興味はありませんでした。当たり前のように外で遊んだり、冬には沢山スキーに行ったり、美味しいお米や、但馬牛などを食べたりすることがすべて当たり前だと思っていました。しかし、高校に入って外に出て学習していくうちに、今まで当たり前だと思っていたことは、実は私たちが恵まれた環境で暮らしているからだと気づくことが出来ました。

二つ目は、「ボランティア活動」です。高校に入って美方残酷マラソンや、村岡ダブルフルウルトラマラソンのスタッフとして参加しました。残酷マラソンではランナーが完走した後にアンケート調査をしました。アンケート調査をしていると、沢山の方から「村岡高校のみんなすごいね」と言っていたいただきました。この

時ボランティアをがんばってよかったなと思いました。ダブルフルでは、ランナーの方の名前を呼びながら数千人の方とハイタッチをしました。そこで感じたことは、ハイタッチをしている際にランナーの方は疲れきっているにも関わらず、みんな笑顔で「ありがとう」といっていたことです。それがとてもうれしく、心が温かくなり1日がとても早く感じました。最初、私はボランティア活動のことをマイナスのイメージしか持っていませんでした。ボランティア活動は大変で、疲れるだけで自分になんの得もないと思っていましたが、高校に入りボランティア活動のイメージが大きく変わりました。その大きく変わったこととは、ボランティア活動で多くの方と関わることで人との関わり大切さや、ボランティアの楽しさ、達成感を感じる事が出来たことです。他にも、地域のボランティア活動に参加することによって、地域に関わる機会が増えたり、魅力を再発見することが出来ると思いました。高校でボランティア活動に参加しなかったらこのようなことを体験できないまま、マイナスのイメージをもち続けていたと思うので学ぶことができたこと、大人に向けて必要なことを体験出来たことは本当に良かったと思います。

5.地域に必要なと思われること

私が地域に必要なと思うことは「若い人の力」だと思います。理由は、地域創造系で町長講演会で町長さんと交流できる機会がありました。この時、町長さんは香美町の一

番の課題は「少子高齢化と人口減少」だとおっしゃられていました。香美町では少子高齢化率が10人に1人の方が高齢者というのが現実で、この少子高齢化率が人口減少につながると思います。他にも人口減少では、高校生という過程を終了すると、進学で香美町を離れたり、就職でも香美町ではないところで就職する方が多いと思います。進学で一度地元を離れて卒業したときには地元に戻ってくる人が少なく、このようなことが人口減少につながると思います。なぜ若い人の力が必要かというと、若い人たちには大きな力があると思います。例えば、今はネット社会なのでSNSをフル活用することで地域の魅力を広めることが出来ると思います。他にも少子高齢化や人口減少は若い人たちが地域にいないと防ぐことが出来ないと思います。そこで必要なことは、それは、若い人たちが活躍でき住みやすい環境を作ることです。そして、地域に長く関わる方々と、幅広い年代の方が力を合わせることでさらに地域が良くなっていくと思います。このようなことを実現するのが今の地域に必要なだと私は考えます。

6.地域探求で学んだことを生かして

私が考える企画は2つあります。

一つ目は、地域創造系で町長講演会がありそこで「廃校」の話題に触れることができました。その時私は考えました。廃校を利用した宿泊施設などを作ってはどうかということです。なぜ宿泊施設かというと、現実的に廃校を利用した宿泊施設は他の都道府県にもあり、そこで興味を

持ちました。



図2. 実際に廃校を利用した宿泊施設(新潟県かたくりの宿) 「画像 Google 引用」

様々な年代の方を対象として、学生時代の雰囲気を楽しんでいただけるように、給食にちなんで、香美町の食材を沢山使用した食事を提供し、学生時代を懐かしむことができる教室にも泊まる事が出来るという企画です。また、学校のプールを温泉施設に開拓して誰もが楽しむことができる施設にすることも可能だと思います。そして宿泊されたお客様には香美町の魅力であるスキーや登山、その他にも様々なことを楽しんでもらいます。食事では但馬牛や蟹などの香美町の特産品を堪能していただき、香美町の魅力を発信していきます。そうすれば香美町の、観光業も盛んになっていくのではないかと考えます。

二つ目は、香美町の食材などを沢山詰め合せた「特産品セット」を企画することです。例えば香美町でも有名な但馬牛を使って、焼肉セットやすき焼きセットなどといった特産品を一つのセットにし、香美町の特産品を堪能することができるも

のです。他にも有名である蟹を使った蟹すきセットなど多くの食材が対象になると思います。なぜこのようなこと思いついたかという、この論文を作成している今現在でも「新型コロナウイルス」に多くの方が苦しめられています。何もかも思うように行かなかったり、このまま終息しなれないと多くの心配があります。そんな時だからこそ、この特産品セットを考えました。特産品セットでは実際にその場に行かなくても本場の味を自宅で味わうことが出来るので、コロナウイルスという恐怖に恐れることがないといったのが利点です。もちろんコロナウイルスのためだけではありません。子育てが大変な方や、高齢者で観光に行くのに不便がある方なども対象に出来るので、幅広い方に香美町の特産品や魅力を伝えることが出来ると思います。

このようなことが現実になるのは難しいかもしれませんが、なにより地域にあまり興味がなかった自分がこのようなことを考えられるようになったことが成長だと思います。地域創造系に入っていなかったらこのようなことは思いつかず、発想もなかったとおもいます。自分なりにたくさん企画を考えることができてよかったです。

7.私の地域活性化プラン

私の地域活性化プランでは「時代に合った地域活性化」を行うことです。例えば今の時代はインターネット社会です。そこでインターネットや、SNSを活用した地域活性化を私は考えます。具体的には、6でも言

ったとおり、多くの方が新型コロナウイルスに苦しめられ、観光業や、飲食業など様々なことが思い通りに行かなかったとおもいます。そこでYouTubeやVRなどを利用して動画などで香美町の魅力を発信できると思います。動画で香美町の魅力などを取り上げ、実際に行かなくても、行ったような感覚になるような動画を沢山作成します。すると何か1つのことがきっかけで色々な人の目にはいるようになりSNSで拡散されさらに香美町の知名度などが上がると思います。このように動画はたくさんの可能生があります。他にも自分で考えた特産品セットなども、インターネットで販売することにより、その場に行かなくても魅力を感じることが出来ます。このようにインターネットやSNSを利用して時代に合わせた地域活性化を考えます。

他のプランとして自分が地域活性化に関わることです。具体的には、地域創造系の学習で地域のことを考えたり、思ったりするだけでもそれが地域活性化につながると教えていただきました。こんな少しのことで地域活性化になると分かりました。私は将来地元に残りたいという強い気持ちがあるので、地元に残った際に自分の力や、周りの方たちと協力し地域活性化に少しでも貢献できるようにしたいと考えています。そして今までお世話になった地域に「恩返し」をしていきたいです。

このようなことが私の考える地域活性化です。できるかできないかではなく考えることが大切だと思うので行動に移せるよう努力していきます。

8.まとめ

私は地域創造系で三年間学習して多くのことを経験し、学ぶことが出来ました。他の学校では体験できないようなことをこの地域創造系ですることができました。ボランティア活動や、集落調査など地域と密接になって活動することにより、地域の魅力や暖かさに気づくことが出来ました。沢山の場所で様々な人に出会うことができ、何の知識もなかった自分に多くのことを身につける機会になりました。人の前にたって発表する力や、地域のことを色々な目線から見るなど三年間で大きく成長しました。そして何より地域にまったく興味がなかった自分が、将来地域のために役に立ちたいと思えるようになったのが大きな収穫であり成長です。そして地域創造系の仲間に出会えていろいろなことに挑戦して活動できたことや、地域創造系の際に多くの講師や先生方に出会えたことが、自分にとって一番の喜びです。地域創造系に入って本当に良かったです。

地域創造系 10 期生

2022 年度卒業

「私の地域活性化プラン」

～若者が活躍する町に～

3年1組1番 青木 勇磨

1. はじめに

高校入学以前から私は、香美町には豊かな地域資源がある一方で、町外の人に認知されていないと感じていました。そのような地域の現状を変えるために、何かしたいと思い地域アウトドアスポーツ類型地域創造系に入学しました。地域探求の授業で地域について学んでいく中で、香美町の豊かな地域資源を存続させたいと考えるようになりました。そのためには、マーケティングの手法を用いて香美町の魅力である地域資源を売り出していくことになりました。以下地域探求の授業で学んだことを踏まえた私の地域活性化プランを述べます。



2. 地域探求で学んだこと

私たちは、鳥取大学の白石秀壽先生監修のもと、「ひと・もの・こと魅力発信プロジェクト～香美町の魅力を売る～」を行いました。このプロジェクトは、マーケティング手法を用いて地域資源を製品化・ブランド化させ、商品の分析や販売促進をします。この活動では、班ごとに探究テーマ(地域資源)を設定し、地域の方と連携して企画から実践まですべて高校生が行いました。唐辛子発酵調味料「唐三」、吉滝キャンプ場、ジビエ、村岡城下町の4つの地域資源の中から私の班は、「唐三」という唐辛子発酵商品をマーケティングの手法を使うことでさらに売り出していくことにしました。このテーマにしたきっかけは以前、夏季調査実習で小代地区の東垣集落を訪れた際に「唐三」という発

酵食品を知ったことです。この調味料は地元の食材を使い、地元の人がすべて手作業をしていることに魅力を感じ、「唐三」についてさらに調査することにしました。社長へのインタビューやインターネットを用いて調査を行いました。また工場にも見学に行きました。調査を終え、ホームページのコンセプトや社長の話などの情報から、地元の食材を使い地元の人が手作業で作る「地域に根差した商品」であることに焦点を当てました。具体的には道の駅を訪れた方や「唐三」のホームページを見た方向けに私たちが動画を作ってもらうことで認知度を上げようと考えました。

私は、この活動を通して学んだことが2つあります。

1 つめは自分が住んでいる香美町にはまだ知られていない魅力がたくさんあることです。私は地域探求で扱っている「唐三」という商品を小代地区の東垣集落を訪れるまでは知りませんでした。また地域探求で地域について学ぶなかで、自分も知らなかった地域の魅力に気づくこと

が多くありました。地域について様々な視点から学ぶことで、新たな地域の魅力を発見できます。また、地域のイベントに積極的に参加し、地域にかかわることも地域の魅力について知るには効果的です。地域のイベントによって地域にかかわる一人一人が地域に興味を持つことで地域活性化にもつながると考えました。

2 つめは地域資源を使って何ができるのか考えることです。香美町には豊かな地域資源があるのにもかかわらず、その魅力を発信できていません。地域の魅力をより多くの方に知ってもらうためには情報発信が不可欠です。情報発信をする際に必要なことが幾つかあります。まずマーケティング手法を用いてテーマとして設定した地域資源の現状から将来像を考えることです。次にどのような顧客に何のサービスを提供するか、また顧客にとっての価値は何か価値提供の切り口は何かを考える必要があります。つまり顧客にとって価値あるモノを創造し、自然とモノが売れる仕組みをつくる必要があります。そのような仕組みをつくることにより香美町の豊かな地域資源を認知してもらうことができ、地域資源の存続にもつながると考えます。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私は地域で活動することで地域の方とのつながりの大切さを学びました。総合的な探究の時間の活動では地域福祉班に所属していました。地域福祉班では、花の定期便や射添小学校放課後子ども教室など、地域の方との交流する機会が多くありました。花の定期便の目的は日頃お世話になっている地域の方々に花を届けることで地域のつながりを深めることです。また、射添小学校放課後子ども教室で

は、子どもたちとのかかわりを通して世代間交流の機会の提供につなげることを目的として活動しました。これらの活動を通して花を受け取ってくださった方々の笑顔や、子どもたちが楽しそうに遊んでいる姿を見ることができました。しかしその一方で、コロナ禍で地域社会の人と人とのつながりが希薄になっていることも感じました。なぜなら高齢者と小学生では交流する機会がコロナ禍の影響で無くなってしまったからです。このような状況でも高校生であれば立場の違う人々をつなぐことが出来ると考えています。例えば高校生が様々な世代を超えた交流の場をつくります。そうすることで、私たち高校生が地域の人と人とのつなぎ役になり地域のつながりを深めることができます。

4. 地域の現状で感じていること

私が地域の現状で感じていることは、町内の農業の若い担い手がないことです。近年では社会構造の変化により、定年退職後の新規就農希望者が少なくなっています。その背景には定年退職後の新規就農者の年齢が5年から10年遅くなったことがあります。農業が出来る期間が短くなることで投資金額を回収できず、新規に農業機械を買って農業を始めることが少なくなっています。そこで地域の自治体では、地域の農地を守る中心的な担い手を確保するために、関係機関と連携しています。就農を希望する方の就農モデル相談・定住支援等の相談体制を整える「地域の新規就農サポート宣言」を行っています。具体的には就農相談会の開催、就農相談と移住・生活支援に関する相談窓口が連携してワンストップの相談対応を実施しています。受入体制を整えることで就農意欲を喚起しています。そのほ

かにも、就農準備の支援、就農後も技術や経営管理についての指導や相談を継続し、生活に関わる支援など定着支援をしています。一方で私たちが生活する中で若い世代が農業をしているところを目にすることは少ないです。香美町の少子高齢化の進行することで、町内の農業は衰退するばかりです。そのためには町内の農業を守っていくこと、農業従事者と若い世代がつながれる仕組みをつくる必要があります。

5. 地域に必要なと思われること

香美町には豊かな地域資源や他の地域にはない魅力がたくさんあります。その一つとして香美町独自の特産品が多くあることです。例えば、香美町産コシヒカリ「とろかわの恋」があります。「とろかわの恋」は良質な湧き水と昼夜の温度差のある環境で育ったお米です。第10回米・食味分析鑑定コンクールで総合部門金賞を受賞し、他数々のコンクールでも受賞実績のあるお米です。その一方で「射添紙」のように戦前までは盛えていたものの現在は廃れてしまった産業もあります。町内の農業や産業が衰退してしまうことで地域の活気がなくなり、香美町イメージダウンにつながる可能性は否定できません。また、町内の農業や産業を身近に感じることができなくなり、若い世代がそれらに興味を持つことがなくなってしまう。地域を活気づけるためにはこのような現状を変えていくべきだと考えます。そのためには香美町の魅力ある特産品を守るために、農業や産業の担い手を確保することが必要だと考えています。多くの若い世代に町内の農業や産業に興味を持ってもらうこと、そうすることで担い手を確保できると考えます。まとめると香美町は、農業従事者や

事業者などの若い世代をつなぎ、より多くの方に町内の農業や産業に興味を持ってもらうための取り組みをする必要があるということです。

現在の香美町の町づくりには問題点が幾つかあります。2021年に行われた国勢調査の産業別就業者数によると、平成2年と令和2年は第1次産業の就業者数は大幅に減少しています(図2)。農業に焦点を当てても就業者数の減少が際立っています。

●産業別就業者数 (単位:人)

産業	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
第1次産業	2,853	2,608	1,844	1,901	1,108	1,124	838
農業	2,170	2,057	1,363	1,311	740	759	562
林業	42	42	52	0	53	38	37
漁業	641	505	429	360	315	327	247
第2次産業	4,712	4,444	3,847	3,267	2,748	2,459	2,108
鉱業	10	3	6	3	4	4	7
建設業	1,304	1,387	1,539	1,284	914	881	770
製造業	3,398	3,054	2,302	2,003	1,838	1,605	1,325
第3次産業	5,718	5,926	6,139	5,720	5,325	5,209	4,943
電気・ガス・熱供給・水道業	40	34	70	47	39	58	29
運輸・通信業	541	465	400	301	324	233	247
卸売・小売業・飲食店	1,826	1,840	1,853	1,464	1,293	1,164	995
情報・娯楽業	270	265	254	179	184	131	114
不動産業・物品賃貸業	16	9	9	4	23	25	23
サービス業	2,565	2,835	2,910	3,323	3,074	3,179	3,023
その他	460	478	471	462	408	409	410
分類不詳	3	18	18	20	28	17	117
総数	13,286	12,996	11,845	10,928	9,203	8,831	7,802

資料:国勢調査

図2. 産業別就業者数(「2021 香美町統計データ」より)

香美町の町づくりの課題の一つめに、農産業従事者の確保ができていないことが挙げられます。その背景には急速に人口減少が進んでいることがあります。2021年国勢調査での香美町の人口は、昭和45年28,321人、令和2年は16,064人であり50年間で12,257人減少しています。(図3)

●人口と世帯

年次	世帯数(世帯)	人口(人)						
		総数	番住区		村岡区		小代区	
			男	女	男	女	男	女
昭和45年	6,753	28,321	7,514	8,054	4,323	4,664	1,808	1,958
昭和50年	6,907	27,571	7,490	8,114	4,031	4,398	1,685	1,853
昭和55年	6,901	26,694	7,510	8,010	3,819	4,111	1,528	1,716
昭和60年	6,846	25,984	7,355	7,977	3,651	3,976	1,429	1,578
平成2年	6,833	25,136	7,171	7,771	3,509	3,813	1,349	1,523
平成7年	6,816	24,298	6,935	7,567	3,384	3,686	1,282	1,444
平成12年	6,878	23,271	6,715	7,283	3,185	3,448	1,245	1,395
平成17年	6,630	21,439	6,184	6,755	2,906	3,209	1,086	1,297
平成22年	6,449	19,696	5,717	6,254	2,625	2,906	1,022	1,172
平成27年	6,228	18,070	5,410	5,807	2,333	2,555	916	1,049
令和2年	5,912	16,064	4,816	5,272	2,030	2,236	790	920

資料:国勢調査(昭和45年~令和2年)

3. 人口と世帯(「2021 香美町統計データ」より)

15~64歳階級別人口に注目すると若い世代になるにつれて人口が少なくなっ

います。(図4)

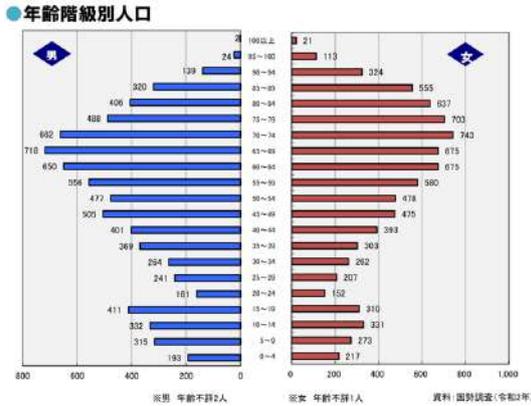


図4. 年齢階級別人口
(「2021 香美町統計データ」より)

これから分かるように若い世代の人口が少なくなることで、急速に人口減少が進んでいます。また人口減少が原因で農産業従事者の確保ができないという現状も考察できます。さらに人口減少が進むことで、農産業従事者の確保がより難しくなっていきます。

香美町の町づくりの課題二つめに観光客の減少があります。新型コロナウイルスの感染拡大したことで、観光客入込数が近年大きく減少しました(図5)。

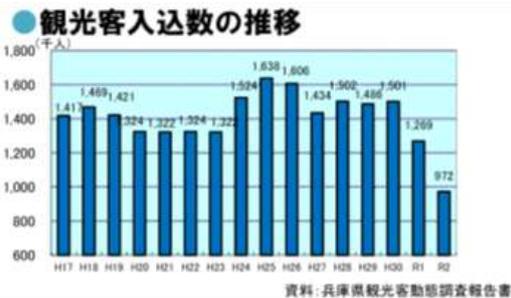


図5. 観光客入込数の推移
(「2021 香美町統計データ」より)

そのため、近年では町外から観光客を呼び込むことが難しくなっています。そのような状況は町内の観光の事業転換や

規模の縮小に繋がります。だからこそ新型コロナウイルス終息後を見据えた政策を考えるべきです。

香美町の町づくりの課題三つめに香美町の魅力を見つけ情報発信することです。私自身香美町に住んでいても、地域創造系で学ばなければ、知ることのなかった魅力が多くあります。そもそも人に知られなければせっかくの魅力も意味を成しません。そのため町外に情報発信していくことはもちろんのこと、町内にも香美町の情報を発信していく必要があるのです。ここで挙げた課題をまとめると、以下の3つになります。

- (1) 農業や伝統産業の従事者や事業者と若い世代のつながりがないため、若手の担い手がいない。
- (2) 新型コロナウイルスの影響による観光客の減少
- (3) 香美町の豊かな地域資源を活かした情報発信ができていない。

これら3つの課題を自治体が主体となり、町内の農業従事者や事業者と連携して解決することで地域活性化を図ります。

6. 私の地域活性化プラン

香美町の町づくりにおいて、町内の農業従事者や事業者と若い世代がつながることで、町内の農業や産業を身近に感じる必要があります。また地域資源を活用した情報発信することで、資源を活かした町づくりを実行できると考えました。そこで、前述した3つの課題に対する地域活性化プランを提言します。

はじめに、(1)の地域活性化プランとして、個人事業主が求人情報を掲載できる

インターンシップ募集サイトを開設することを提案します。そこに農産業従事者や事業者が求人情報を掲載することで、町内で就職を希望する方の支援を行います。またその募集サイトのターゲットを大学生に絞ることで、次の担い手の育成を促進することに繋がります。担い手を育成することで「とろかわの恋」や「射添紙」など地域の特産品として長く存続させブランドの価値を上げます。

つぎに(2)の地域活性化プランとしては大学生向けのツアープランを考えました。企画名は「農業・伝統産業体験日帰りツアー」です。ツアーは農業体験と伝統産業体験から選択できるようにします。農業体験は、「とろかわの恋」が作られている棚田で行い、田植えや稲刈りを体験します。伝統産業体験は、「射添紙」の紙漉きを体験します。このツアーでは、香美町の農業や伝統産業を体験してもらい、身近に感じてもらうことで若者の興味を持ってもらうことが目的です。また実際に農業体験や伝統産業体験をすることによって、体験すること楽しさや魅力を発見してもらいます。ツアー終了後には、香美町の農業や伝統産業に興味を持った方はインターンシップを検討してもらいます。このインターンシップの手続きは募集サイトを通じて香美町が行います。

これらの新たな施策を「地域の新規就農サポート宣言」として提案します。将来的には大学生だけではなく、転職を考えている社会人をターゲットに募集をかけてみることでツアーの参加者増加が図れると考えます。町内の個人事業主と町内で就職を希望する方が、つながることで人同士のつながりも形成されます。

最後に(3)の地域活性化プランです。身近なツイッターやインスタグラムを活用して情報発信していきます。

7. まとめ

私は高校生活の経験を通して、地域について学び考えを深めていきました。

この活動で一つめに感じたことは、地域を様々な視点から見る事や地域の方と関わることが大切であることです。

二つめに感じたことは、香美町では町内の農業や産業に興味を持つ若者が少ないことや、豊かな地域資源を活かした情報発信ができていないことです。香美町の魅力が知られていないということは、地域にとってとても大きな問題です。それを解決するためには、町内の農業や産業をどう売り出すかが大切だと感じました。

三つめは町内の農業や産業を活発にして香美町にしかない特産品を存続させるべきだということです。

これからの町づくりでは、町内から町外までの人同士のつながりを深めることや、地域の魅力について考えを深め、情報を発信し香美町の資源を最大限に活かした人材を育成するべきだと思います。

私の地域活性化プラン

～人との交流～

3年1組 10番 岸 奏実

1.はじめに

私は香美町のことをもっと深く学びたい、新たな魅力を発見したいと思い、地域創造系に入りました。地域の新しい魅力を発見し、地域に対して知識が増えていくなかで、他の人にも情報発信したいと思うようになりました。ここでは香美町の現状や課題をどう学んでいったのか。また今まで学んできたことを踏まえて、どうすれば香美町がもっと良くなり、地域が元気になるのか自分なりに考えまとめました。

2.地域探求で学んだこと

地域探求では、まずマーケティングについて鳥取大学の白石先生に教わりました。マーケティングは、顧客の立場に立って考えることが大切で、顧客が望むものを企業が提供することが一番いいと学べました。また、顧客がどのような動きをするのか具体的に予想することも大切だと感じました。マーケティングではセグメンテーションを用いてターゲットを決めます。セグメンテーションとは、顧客をいくつかのグループに分けることです。そのグループから一つ選び出してターゲットにします。そして、そのターゲットにどうやって売り出していくのかを考えていきます。2年生の夏には、徳島県上勝町へ行きました。上勝町では株式会社いろどりが葉っぱビジネスを展開していました。この葉っぱビジネスとは、料理などの装飾として使われている“つ

まもの”を高齢の方が生産し販売するビジネスです。

またこれ以外にも、「焼却、埋め立てによるごみの処理を限りなくゼロに近づける努力をする」というゼロウェイスト宣言に基づいてゼロウェイスト運動が行われていました。上勝町では、ごみ収集車が廃止されているため、各家庭でゴミステーションに行き、ごみを45種類に分別します。そして、その分別したものはリサイクルされ別のものへと生まれ変わります。生ごみは、自宅でコンポストという生ごみ処理機で処分しているそうです。



図1.ごみステーション見学の様子

普通ならごみとして処分されてしまうものを資源としてリサイクルしていることに驚きました。今手元にあるごみも、もしかしたら地域活性化できる資源なのかもしれないと思いました。また普段何気なく暮らしている中でも、多くの資源が隠れていることに気づくことができました。

この研修の中で印象に残っていることは、講義をしてくださった方々の言葉です。

一つめは、足元にあるものに目を向けるという言葉です。自分の足元にある大事なものに気が付いていない人が多いそうです。自分の足元には自然があり、野生動物が住んでいて、虫たちが飛んでいます。このような普段当たり前だと思っていることに目を向けてみることで、新しい発見があるかもしれないということを改めて学ぶことができました。この研修を通して普段何気なく生活している中にも地域活性化のヒントが隠れているかもしれないと意識し、周りに目を向けて行動しようと思いました。

二つめは、自分で考えて行動することを習慣化させるということです。親や先生から言われて行動するのではなく、自分の意志で行動し、責任を持つことが大事だと気づかされました。何かする際に待っているだけでは、何も始まらないと思うので自分の力で考え行動を起こしていく力は、これからの人生に必要な不可欠な力だと感じました。



図 2.株式会社いろどり横石氏による講義の様子

三つめは、最初から完璧でなくていいということです。最初から完璧を目指そうとすると目の前のものに囚われてしまうためいいものが仕上がらなくなってしまいます。むしろ後から付け加え、訂正することでよりよいものに仕上がるそうです。私も何かする際に、最初から完璧を目指すのではなく、今持っている最大限の力で何回も付け加え訂正したり

しながら作り上げていこうと思いました。

四つめは、未来（夢・目標）から逆算して今できることを考えるということです。この考え方をバックキャストといい、この方法を使うと想像した未来を実現しやすくなるそうです。将来なりたいものや、やりたいことを実現するために今何をすべきなのか、この方法を使うことでよりわかりやすくなります。何をすればいいのかわからなくなったときに、この考えを活用していこうと思いました。

五つめは、見たままを真似するだけではうまくいかないということです。「あの町が〇〇しているからここも〇〇しよう」としてしまうと自分の町の特徴が消えてしまいます。また自分の町の実情にあった政策ではないため、かえって状況が悪化してしまう可能性があると思いました。ただ真似をするだけでなく、自分の町らしくアレンジしていくことで、うまくいくのではないかと思います。徳島県上勝町へ研修に行くことで、成功した政策を聞くことができました。何が地域の資源になるのかしっかり考える癖をつけておかないと、チャンスが通り過ぎて行ってしまうことが分かりました。

研修後に私たちはテーマを「人・モノ・コト発信プロジェクト」に決めました。その後ありふれた資源の中から「キャンプ」「唐三」「商店街」「ジビエ」の4つの資源に絞り班で分かれ取り組み始めました。私は「ジビエ」の班で、鹿の獣被害や命の大切さを知ってもらうために活動しました。まず鹿がもたらす環境への影響について、良い部分や悪い部分を調べプリントにまとめました。また地域の方の手を借り、鹿肉のハンバーグを班

員と作り食べました。その際に人と関わることで楽しく笑顔でいられる時間が大切であることを改めて学びました。

3.高校時代に地域で活動したことから学んだこと

村岡高校に入学して地域の方々に関わることが多くなり、地域の方々の温かさを改めて知りました。みかた残酷全国マラソンやダブルフルウルトラランニングなどのボランティア活動では、何も分からない私たちに対して地域の方々が優しくアドバイスしてくださいました。この他の総合的な探究の時間での活動では地域福祉班に所属していました。その活動の中では地域の高齢な方々と交流する機会が多くありました。その際に昔の村岡高校の話をしてくださる方や、「頑張っ

て」と応援してくださる方もいて心が温かくなりました。私はこの経験から改めて人と会話することの楽しさに気付くことができました。最近ではコロナウィルスの影響で地域の行事や地区の行事が中止になっています。そのため地域の方との会話できることや、地域の方に応援してもらう機会は、減っていています。一つ一つの機会を大切にしていけないと思いました。

地域創造系での活動では、地域に関する知識や、地域の魅力を伝えていく方法を学びました。私自身が香美町に住んでいます。地域の知識や魅力について、小学校や中学校でも教えてもらわないことが多くあるのだと学びました。地域創造系の授業の中で印象的だったのは、野生動物の増加や行動範囲の拡大、被害についてです。野生動物の被害について車と衝突してしまったり、畑を荒らされたり、夜は鳴き声で眠れないなどの被害がよく耳

にするようになりました。しかし野生動物がいることは悪いことだけではないです。野生動物は私たちに食を与えてくれることも学びました。この授業を通して食のありがたさを実感しました。今までの地域創造系の授業を通して学んだことは、自分が地域の魅力を知り、その内容を誰かに話し伝えることで他の人へも知識が繋がることです。他の人に魅力を伝えていくなかで、地域をもっと好きになっていくことも学びました。

高校生活を送る中では、自分から何か行動を起こすと新しい出会いがあることを学びました。アルバイト活動に挑戦することや、学校の委員会に入ること、新しい人と出会い、人との交流する範囲が広がり毎日がより楽しくなりました。また多くの人との出会いは、同時に自分自身の新しい発見にも繋がることを学びました。

高校生活の経験からどんなに小さな行動でも普段やらないことをすることで、新たな発見があることを学びました。例えば家の近くを散歩してみるとします。普段とは違うルートを選んで散歩してみると、

「こんな場所もあるんだ」と新たな発見があります。また同じように散歩している人に出会うこともできます。高校卒業後もどんな小さなことでも普段やらないことをすることを心がけていきたいです。

4.地域の現状で感じていること

私が香美町の現状で感じている課題は、少子高齢化、人口減少（特に若い人）、野生動物の増加です。まず少子高齢化についてです。幼稚園、小学校、中学校の統合が進んでいます。私の住んでいる地区も子供の人数が年々減り、少子

化がより身近に感じられるようになりました。つぎに少子高齢化の進行と共に人口減少も進んでいます。香美町内の子供の多くは、高校卒業後香美町外に進学し、就職してそのまま帰ってこないそうです。

年 別	自然動態		
	出生	死亡	増減
平成22年	130	296	△ 166
平成23年	129	272	△ 143
平成24年	119	312	△ 193
平成25年	107	315	△ 208
平成26年	118	293	△ 175
平成27年	104	275	△ 171
平成28年	94	327	△ 233
平成29年	85	310	△ 225
平成30年	103	272	△ 169
令和元年	73	319	△ 246
令和2年	61	285	△ 224

図 3.香美町の人口の動き

(2021 香美町統計データより)

若者や子供が減ることで、このままでは出生数はどんどん少なくなり、香美町は若い力、元気な力を失ってしまうと感じました。すでに住人が少なくなり、限界集落になってしまった集落もあるので、人口減少、過疎化は大きな問題だと一層感じました。最後に野生動物に関しても、生息数が増加傾向にあり、畑を荒らしたり、事故してしまったりと被害が出てくるのが以前と比べて多いように感じています。私がした経験としては、庭に植えていた花を野生動物によって食べられたことがあり、その時はショックを受けました。原因は、人が山に行かなくなったからだと言われました。人口減少と関係ない野生動物による被害も、実は関係するのだと感じました。

5.地域に必要なと思われること

私が地域に必要なと思うことは、多くの人にもっと地域を知ってもらうことで

す。香美町外の方に知ってもらうのはもちろんのこと、町内の方にも知ってもらうことも必要だと思います。地域創造系で学んできたなかで、自分自身が知っていることよりも知らなかったことのほうが多くありました。せっかく香美町に住んでいるのに知らないのはもったいないことだとも思いました。地域の方々が知らないことは地域外の方も知らないはずなので、まずは町内の方々に知ってもらえたらいいと思います。私は人に何かをお勧めするとき、いい点やアピールポイントを見つけてからお勧めします。そのためいい点やアピールポイントを知る、見つけることから始めていったほうが相手にも伝わりやすく、自分自身ももっと好きになれると思いました。地域に住んでいる人が、地域を知ることによって愛着が湧き、ここに住んで暮らしてよかったと思ってもらえることで地域活性化につながるのではないかと思います。また地域のことを知り、他の人にも伝えることで都会からの移住やUターンなどが期待でき、人口減少もやわらげることができると思いました。

6.私の地域活性化プラン

私は香美町に住み、生活をする中で少子化を感じることはあります。一方で人口減少を感じることはありません。データによると、平成17年に総人口が21,439人だったのが令和2年には16,064人に減っており深刻な問題になってきています。

●人口と世帯

年次	世帯数 (世帯)	人口(人)						
		総数	香住区		村岡区		小代区	
			男	女	男	女	男	女
昭和45年	6,753	26,321	7,514	8,054	4,323	4,664	1,808	1,958
昭和50年	6,907	27,571	7,490	8,114	4,031	4,398	1,685	1,853
昭和55年	6,901	26,694	7,510	8,010	3,819	4,111	1,526	1,716
昭和60年	6,846	25,964	7,395	7,977	3,651	3,976	1,429	1,576
平成2年	6,633	25,136	7,171	7,771	3,509	3,813	1,349	1,523
平成7年	6,816	24,298	6,935	7,567	3,384	3,686	1,282	1,444
平成12年	6,878	23,271	6,715	7,283	3,185	3,448	1,245	1,395
平成17年	6,630	21,439	6,184	6,755	2,908	3,209	1,086	1,297
平成22年	6,449	19,696	5,717	6,254	2,625	2,906	1,022	1,172
平成27年	6,228	18,070	5,410	5,907	2,333	2,555	916	1,049
令和2年	5,912	16,064	4,816	5,272	2,030	2,236	790	920

資料 国勢調査(昭和45年～令和2年)

図 4.香美町の人口と世帯(2021 香美町統計データより)

その問題を解決し、地域活性化するためには、人口減少を止める必要があります。まず町内の人を他の地域に出る行かせないようしなければいけないです。次に必要になるのは一時的に出て行ってしまった人にまた帰ってきてもらうようにすることです。最後に新しい移住者に来てもらうことも必要だと思います。その解決策として住民と移住者との交流を行うことが大切だと思います。

具体的な例として、まず役場の方々と地域の方々が交流します。地域の方々が香美町の改善してほしいことを役場の方に伝え、その意見を行政が取り組み改善していく。そうすることで香美町から出て行ってしまう人も少なくなると思います。交流は4か月に1回、年に3回実施します。また、3か月に一回、香美町の暮らしについて住民の不満や不安をアンケートで集めます。その内容を元に交流し、解決します。

また移住希望者に対しては、香美町在住の方々の家に民泊することで移住者の方と住民と話せる場を開きます。移住希望者を募集すると同時に、香美町の住民に民泊させてもらえるかのアンケートを取り、民泊を実施して頂ける住民には事前準備してもらいます。民泊を実施する目的は、香美町の方々が温かい心を持っていることを知ってもらうこと、また住

民と交流することで、この人が住んでいるなら私も住んでみようかなと思ってもらうことです。実際に民泊を行った際には、香美町に住んでいて思うことや、1番いいことなどを共有します。これらの取り組みにより移住者が移住で不安なことを解消します。この他にも香美町には、移住者をサポートする制度があります。その中には「移住の下見のための交通費の負担」があります。その制度を利用し、交流会に参加してもらうことができれば、移住の下見の際の出費を少なく抑えることができます。移住者でお金心配な人でも迷わず参加できます。移住者は、I ターンの移住者だけに限らず、U ターンの移住者も参加できるようにすることで、「なぜ1度香美町を出て行ってしまったのか」や「なぜ戻ってきてくれたのか」などの意見を聞けます。この取り組みは1度違うところに住んだ人の住んでいる人とは違う視点で香美町を捉えることが出来ると思います。

以上の内容を全て踏まえて行動することで、香美町がこのまま伸ばしてほしい点、もっと改善してほしい点などを見つけることができます。また改善していくことで今よりももっとよりよい町になり、人口も増えていくと思います。将来的には移住が目的ではない方にも、民泊を利用できるようにして香美町の財源にしていけたらいいなと思っています。住民や移住者との交流を行い、住民の声を聴いて取り入れてくれるような密な関係にすることが、移住者を増やす一番の施策だと思います。

7.まとめ

私は朝、近所の方と挨拶をします。私は、挨拶や会話をすると、「よし、今日も頑張るぞ!!」と元気で溢れます。近所

の人がいなくて挨拶ができないときは、元気になるのに時間がかかります。このことから、人とかかわることの大切さに気づきました。だから私はモノを通して活性化するのではなく、人と人とのつながりから地域を活性化させたいと思いました。人と人とが交流する際ことで一番大きなことは、相手も自分も笑顔になることです。例として地区の祭りや総合的な探究の時間での出来事があります。地区の祭りでは地区の人同士で一緒にご飯を食べたり、話したりします。その際に皆さん色々な人と交流することで笑顔になっていました。また総合的な探究の時間の地域福祉班での活動では、自分たちの手で花を届けた際に、地域の人が笑顔で受け取ってくださり、自分も笑顔になりました。香美町全体も祭りの時のように、明るく笑顔で溢れている誰もが暮らしやすいと感じられるような町になったらいいなと思いました。

地域創造系に入って、香美町のことや村岡のことを学んでいくなかで、答えのない問題を考えること、色々な人にインタビューすることの難しさを感じ、大変だと感じることもありました。しかしその経験を通して香美町についてより深く学ぶことが出来ました。また香美町について深く知ることで、香美町も香美町に住んでいる人もより好きになり、香美町に住んでいたいと思う気持ちが以前より強くなりました。まだどれだけ自分が地域に貢献できるか分かりませんが、より良い地域になるように貢献していきたいと思っています。高校生活で学んできたことを大人になっても忘れずに生きていきたいと思っています。

私の地域活性化プラン

～地域資源を活用した高齢者の活気促進～

3年1組13番 小谷 竜生

1. はじめに

私が地域創造系に入学しようと思ったきっかけは、地域に住んでいた先輩の話からです。その先輩は村岡高校の地域創造系の活動を通して、地域の魅力や地域活性化について学べたとのことでした。私は自分の住んでいる地域にどんな魅力があるのか、また地域活性化にはどのようなことが出来るのかに興味があり、地域創造系に入りました。以下ではこの地域創造系の活動を通して学んだこと、また自分なりにどうすれば地域活性化できるのか考えたプランを書いていきます。



写真 1. 水生調査の様子

2. 地域探求で学んだこと

地域創造系の1年次の活動では、村岡の自然と社会と歴史について学びました。その授業の中で印象に残っている授業は4つあります。

1つめは水生調査の授業です。まずこの授業では、どんな水生昆虫が村岡に住んでいるのか講義形式で学びました。次に実地調査として、地元の小学生と一緒に昆陽川で水生調査を行いました。この授業で学んだことは2つあります。1つめは村岡が豊かな水質や生態系であふれていることです。普段見ている昆陽川には、世界的に見ても珍しい水生昆虫が住んでいる事実を知り驚きました。2つめは何かを調べる時に、調べるものさしを持つことでした。川の水生調査では、水生昆虫というものさしを使うことで川の水質等を調べる事が出来ました。

2つめは但馬の植生についての授業です。まず但馬の植生について講義形式で学んだあと、ハチ北の湿地に行きました。この授業で学んだことは2つあります。1つめは植生が環境の変化による影響を受けることです。もともとあったハチ北の植生は、スキー場による湿地の減少やシカ等の被害で変わってきています。だからと言って他の地域に生えている植物を直接植えるのではなく、地元の植物を守っていくことが大切だと改めて感じました。2つめはなにが地域資源になるか分からないことです。ハチ北には「ウリハダカエデ」という植物が群生しているものの、全く注目されていませんでした。しかし近年では、このウリハダカエデは、メイプルが採取できることで注目されています。このことから普段当たり前に見ているものも、新しい地域資源になる可能性を秘めていることが分かりました。



写真2. 植生調査の様子

3 つめは獣被害の授業についてです。この授業では獣被害の対策方法やツキノワグマの生態について学習しました。学習したことは、ツキノワグマは但馬地域特有の生態を持ち、また身近な存在であることです。村岡には多くの柿の木があります。クマはその柿の実を目当てに、山から下りてくるそうです。そのためツキノワグマは私たちの住んでいる身近な場所でも目撃されています。身近な存在である分、熊鈴を準備するなど気をつけないと遭遇してしまう可能性があるとも思いました。

4 つめは香住の海で行ったシュノーケリングとシーカヤック体験です。この授業で学んだことは、但馬特有の自然とその豊かさです。シュノーケリングでは海中の豊かな生態系を、シーカヤックでは但馬特有の海岸の地形を観察しました。しかしその豊かな生態系や自然も、海流によって流れてくる様々なごみによって無くなる危険があります。この美しい自然を守るためにも、ごみを海に捨てない等の当たり前のことを続けていく必要があるとも感じました。



写真3. シーカヤック体験の様子

これらの講義を通して、山・川・海ともに豊かな自然があることが、但馬地域の豊かな生態系につながっているのだと感じました。この豊かな生態系を維持するためにも、山・川・海すべてをきれいな状態にすることが人間の務めなのではないかとも改めて感じました。

3. 高校時代に地域で活動して学んだこと

私は総合的な探究の時間では、2 年次から環境 A 班に入っていました。この環境 A 班では、小代区貫田にある「うえ山の棚田」の棚田の保全を目的として活動をしています。この「うえ山の棚田」は貫田の中でもかなり山奥にあるため、「天空の棚田」といわれています。その美しい景色から日本の棚田百選にも選ばれており、遠方から写真撮影に来る方もいる素敵な場所です。この棚田には美しい景色以外にも、優れた部分があります。それは防災機能です。棚田が持つ貯水能力によって、地下水が急に増えるのを防ぐだけでなく、地盤が固くなることで土砂崩れを防ぐ効果があります。

しかしこの棚田は大きな課題を抱えています。それは少子高齢化の影響等で担い手が不足していることです。

現在「この景観はどうしても守りたい」「耕作放棄地なんかにしたくない」と思う有志によって棚田を守るための組織「武勇伝」が結成され、生産が困難になった農家の棚田を譲り受けたりしています。ただその武勇伝のメンバーの中でも、若者が少ないという現状があります。今後うえ山の棚田を守っていくためには、若者たちに興味を持ってもらうこと、棚田を保全するボランティアスタッフの数を増やすことが大切です。



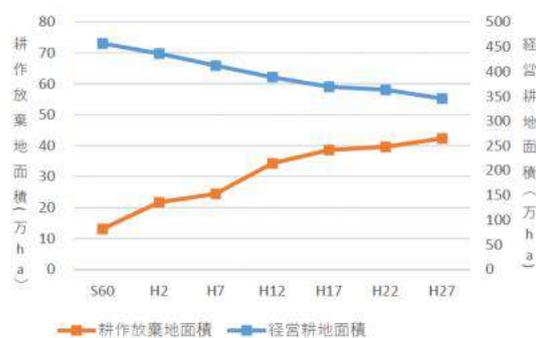
写真 4. 環境 A 班での活動の様子

環境 A 班の活動ではまず実際に自分たちの手を使って稲を育てる活動を行いました。次に棚田を保護するボランティアスタッフ募集のパンフレットなどの作成に関わりました。その際にはどうすればボランティアに人が来てくれるかを班に分かれてグループワークをしました。内容が難しいこともありなかなかいい案が出ませんでした。その時に地域創造系の授業で行っていたグループワークの経験を活かして、班のメンバーそれぞれのアイデアを紙に書き、意見を共有しました。アイデアを共有することで、たくさんのアイデアが生

まれとてもいい経験になりました。この経験から環境 A 班と地域創造系の授業、全然接点のない授業であっても同じアプローチをすることが大切なのだと学びました。また水生昆虫の授業で学んだ、何かを調べる際のものさしを持つことの大切さも改めて学ぶことが出来ました。

4. 地域の現状と課題

香美町が抱えている問題は高齢化です。この高齢化によって起こっている問題は耕作放棄地の増加です。この耕作放棄地問題とその現状について以下で説明していきます。耕作放棄地問題は、香美町だけでなく日本全国の過疎地域が抱える深刻な問題となっています。現在全国の耕作放棄地面積は、昭和 60 年までは、およそ 13 万 ha で横ばいだったものの、平成 2 年以降増加に転じ、平成 17 年には東京都の面積の 1.8 倍に相当する 38.6 万 ha とな



っています。それだけ耕作放棄地が増える一方で、農地として経営している経営耕地面積は減少しています。

図 1. 経営耕地面積・耕作放棄地面積の²推移

² 耕作放棄地について
<https://www.pref.chiba.lg.jp/noushin/kous>

akuhouki/what.html

この耕作放棄地によって以下の問題が発生しています。

- ①病虫害の温床
- ②鳥獣被害の拡大
- ③雑木・雑草の繁茂や火災雑木
- ④産業廃棄物などの不法投棄
- ⑤景観の悪化
- ⑥農地の利用集積の阻害や水利施設への支障

これらの問題をなくすためにも、雑草の刈り取りを定期的に行い農地の適正な管理をすることで耕作放棄地を減らす工夫が必要になります。



図 2. 農林水産省農村振興局調べ耕作放棄地に関する意向調査(平成 21 年)³

しかし耕作放棄地には管理するうえでの問題点も多くあります。そのなかで際立って問題となっているのは、高齢化による労働力不足です。農林水産省農村振興局調べ耕作放棄地に関する意向調査によると、どの地域でも高齢化による労働力不足が大きな割合を占めています。ついで、「生産性が低い」、「農地の受け手がいない」、「土地条件が悪い」等が占めています。限界集落の一部では土地の管理がもうできないため集団で農業をやめてしま

うところもあります。

上記で取り上げた耕作地放棄問題以外にも取り組まなければいけない課題があります。それは高齢化問題です。高齢化も問題の解決策としては、国家レベルの施策も必要だと思います。その一方で増え続ける高齢者がどうすれば高齢期において働き続けられるか考えることも重要だと思います。なぜなら仕事は生計維持のためだけでなく、社会の役に立つという自己肯定感も生まれるからです。この自己肯定感は日々の生活への張り合いに繋がります。この後の章では耕作放棄地問題の解決策と、高齢者の働き方について述べていきます。

5. 私の地域活性化プラン

私の考える地域活性化プランは、病院や老人ホームで暮らしている高齢者の方に管理難しい土地を管理してもらう方法です。具体的にはまずの農家さん、地主さんから管理が大変な土地を無償で貸していただきます。次に病院や老人ホームに住む高齢者の方向けに、土地を管理するプログラムを企画・提案します。最後に実際に毎月 1 回集団で農業をしてもらいます。この方法では、土地の所有者と高齢者の双方にメリットがあります。土地の所有者は土地の管理をしなくて良い、耕作放棄地になってしまわないといったメリットがあります。高齢者の方については、農業で体を動かしてもらうことで健康促進、また農業の体験を通して仕事に対するやりがいを感じてもらえると思います。実際このようなことを行っている有料高齢者住宅は存在しており、一部地域では

³ 農林水産省農村振興局調べ耕作放棄地に関する意向調査

<https://www.pref.chiba.lg.jp/noushin/kousakuhouki/what.html>

仕事付き高齢者住宅という名前で運営されています⁴。



写真 5. 高齢者が仕事をしている様子

集団で農業をする際にどのような農地がいいのか考えた場合、高床式砂栽培農業施設を用いた「クロスハートファーム」での野菜栽培事業がいいと思いました。この高床式砂栽培農業施設は、東レ建設株式会社が開発した「トレファーム(R)」⁵のシステムを採用したものを使用したものです。栽培方法の特徴としては、主に3つあります。

1. 砂栽培
2. 高床式ベッド
3. IoT 自動灌水システム

砂栽培については、土壌が硬い土よりも砂だと作業自体が楽になります。



写真 6. トレハートファームの写真
高床式ベッドについては、写真のように

⁴ 『トレファーム®』による介護付き・仕事付き高齢者向け住宅の開発が、高齢者の生きがいに大きく貢献！
https://agri.mynavi.jp/2018_09_18_39465

作業をする場所が、建設足場材によって高くなっているため腰をかがめる必要もありません。そのため高齢者や車椅子に乗った人でも座ったままで作業が可能です。IoT 自動灌水システムについては、水やりや肥料やりが自動化されたものです。そのため遠隔管理操作も可能となっており、毎日野菜のメンテナンスが必要といった煩わしさからは、一定程度開放されることとなります。

これらのメリットを持った「クロスハートファーム」で野菜栽培に取り組むことで野菜の収穫を目標にします。収穫できた野菜は高齢者の方に販売してもらいます。農業を通じた仕事によって、少しでも多くの高齢者の人生が最後まで幸せになってもらいたいと思います。また多くの幸せな高齢者がいることで、地域経済の活性化にも有効だと思います。

6. まとめ

私は3年間の地域創造系活動を通して、入学した当初よりも少し発想力が豊かになりました。そのことで以前は思いつかなかった視点から、地域を見ることが出来るようになったとも思います。香美町はあまりいい場所ではないと思っていましたが、授業を受けていくうちに香美町ってこんなに魅力的だと思えることがしばしばありました。この他にも空き家バンクを通して大きな家が安く借りられるなど、香美町は住みやすい場所だと思う様にもなりました。

地域の魅力以外にも、地域創造系の授業で実践したグループワークを通して、

/ ⁵ 東レ建設株式会社
<https://www.toraytcc.co.jp/construction/torefarm/index.html>

自分の意見を持つことやそれを人に伝える重要性も分かりました。将来私はこんな魅力的な香美町に何か貢献できるような人になりたいです。

香美町の観光活性化計画

～若者への「ほっとする時間の提供」～

3年1組15番 田中 暖花

観光客の集客方法について述べていく。

1. はじめに

私は村岡高校に入学するまで香美町で生まれ育ってきたにも関わらず、香美町のことをほとんど知らなかった。しかし、村岡高校に入学して、1年次の地域学入門の授業の際に、外部講師の方に香美町について山や川などの様々なテーマで講義していただいたことで、それらの魅力を詳しく知ることができ、香美町のことが好きになっていった。

また、2年次からの総合的な探究の時間では集落調査班に所属し、集落の魅力を調査した。その中で香美町には魅力が多くあるにもかかわらず、地元住民にも観光客にも、地域が持つ魅力について知られていないことが多いことに気が付いた。

このように、香美町の魅力が観光客にも地元住民にも知られていないことに気づいたことから、私は将来観光業で香美町の産業を活性化したいと考えるようになった。村岡周辺の地域にはまだ発掘されていない魅力が多く残っているため、それらを見つけて発信し、観光客や地元住民に認知してもらうには、自分の肌で感じられる体験ツアーが必要となってくる。そのために、大学進学後に地域住民や自治体、企業などと連携した活動の中で、地域の魅力をより良く売り出していくための方法を学び、各々の魅力に合わせた売り出し方ができるような対応力を身につけていきたいと考えている。

本論文では、地域探求や総合的な探求の時間で学んだことを踏まえて、集落調査班で作成したガイドブックを活用した

2. 地域探求で学んだこと

地域学入門と地域探求を通して、地元の魅力とともに、マーケティングを活用した魅力を売り出していく方法を学んできた。3年間の学びから自分が身につけてきた能力を以下に詳しく記述していく。

2. 1 地域学入門

1年次の地域学入門では、まず香美町にある山、川、海の魅力や課題について外部講師の方に講義をしていただいた。香美町が持つ資源として山の植生や山陰海岸ジオパークの地質、川の水生昆虫など、座学の講義と実際にその地に足を運び体験を通して、香美町が持つ資源について全身で学ぶことができた。山では獣被害、川では水生昆虫の種類の減少、海では海洋ごみの問題など、多くの課題も抱えていることを肌で感じてきた。地域学入門では、山、川、海はすべてつながっており、それぞれが影響を及ぼしあっていること、また人間が自然環境を変化させ、もともと住んでいた生物が生きられなくなってしまう状況を生んでいることを学んだ。山、川、海の資源がどれか1つでも欠けると住んでいる生き物たちは生きられなくなってしまうため、環境を守るために私たち自身の行動が重要になる。

また、村岡が持っている歴史的な資源について、まち歩きを通して学んだ。山名氏の菩提寺である法雲寺や旧村岡町にある古墳からの出土品が多く展示されてい

る村岡民俗資料館まほろばなど、村岡には多くの歴史遺産がある。しかし、これらの歴史遺産を観光の目的として訪れる人は少ない。この魅力を観光客に認知してもらうために、他地域と差別化をすることで発信していくことが大切である。

2. 2 地域探求 I

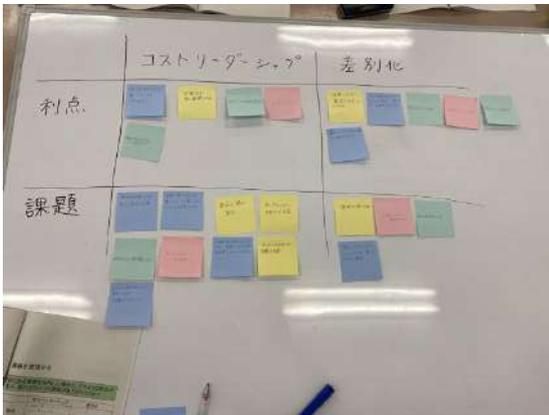
2年次の地域探求 I では、鳥取大学の白石秀壽准教授からマーケティング理論を学び、夏季休業期間には徳島県上勝町での研修を行った。まず、マーケティング理論を学んだ中で重要だと感じたことは以下の2点である。

1つ目は、特定の顧客に売り出すために、セグメンテーションを活用してターゲットを決定する方法である。セグメンテーションとは、ある分野や市場において特定の基準をもとに細分化または分割した一つ一つの要素のことをいう。ターゲットを決定することによって、顧客が求める情報を伝えるための発信方法や発信媒体の雰囲気などを定めることができるため、マーケティングで魅力売り出していくための基礎となり、最も重要と言っても過言ではないだろう。セグメンテーションによって選定されたターゲットに商品売り出し、成功した例として、シーブリーズという制汗剤の商品がある。この商品はもともと中高年の男性が使うものとして売り出されていた。売り上げが下がってきた際に、「スポーツをする」「高校生、大学生」という2つの要素までセグメンテーションで細分化してターゲットを再設定したところ、売り上げを上げることに成功した。この際に、パッケージを若者が好むような、爽やかでカラフルなものにすることで、商品の売り上げをさらに伸ばすことができた。このように、①セグメンテーションによるターゲット

の細分化を行い、②ターゲットに応じた情報発信方法や商品のパッケージを変える工夫を行うという2つの要素が、商品売り出すには不可欠である。

2つ目は、他社の商品と自社の商品とを比較することによって、自社だからこそ持っている商品の強みを引き出す政策を考えることができることである。自社のある商品を他社の類似品と比較したときに、値段や品質などの商品を構成する要素の中から自分の会社はこれだけは負けないという強みを理解することで、特定の顧客のニーズに合わせて商品を作ることができ、顧客に商品を手にとってもらいやすくなる。このような他社商品の類似品との「差別化」によって成功した雑誌の例として、コロコロコミックがある。コロコロコミックは小学4~6年生の男子をターゲットに「恋に目覚めた男子は追わない」ことで、他の漫画雑誌との差別化を図っている。恋愛要素を入れないことでターゲットを絞り込むことができ、ターゲットが好む内容を変えないことで、一定の顧客を得ることができている。このように、特定のターゲットに向けた内容を他社と差別化することで、顧客のニーズを満たす商品を作ることができる。

2. 3 上勝町研修



徳島県上勝町研修では、「葉っぱ産業」

写真 1 他社の商品との違いを比較している様子

と「ゼロ・ウェイスト」の取り組みについて学び、これらの取り組みの中で以下の2点が印象に残っている。

1つ目は、新しいものばかりを作ろうとするのではなく、今ある資源から魅力を見つけ出すことが大切だということだ。葉っぱ産業を行う株式会社いどり代表取締役の横石氏から「魅力的な資源は自分の足元に転がっていることが多い」という言葉をいただいた。地域資源を客観的に見ることで地域の魅力を発見することができるため、現在の当たり前な生活を当たり前せず、視点を変えてみることが大切であることを学んだ。

2つ目は、自分で考えて行動する習慣を身につけることで多方面から物事を考えられるようになることだ。自分で考えて行動することで、失敗した際になぜ失敗したのか、どのように改善していくべきなのかを自分で理解しやすくなるのではないかと考えた。この状況の一例として、私が自ら行った集落調査班でのアンケート調査がある。アンケート調査をすることで、ガイドブックの認知度や興味

を持ってもらっているかどうかの現状を知ろうとしたが、アンケートの調査結果を比較すること以前に、アンケートを回答する人が少ないという課題にぶつかった。そのため、アンケートをより多くの人に回答していただくために、アンケートの質問数を最小限にして回答者がアンケートに答えやすいようにしたり、アンケートを行う目的をより明確に示したりすることで、アンケートの回答者数を増やすことができた。現状を自分で理解し、解決策を考えて行動に移すことができたといえる。このように、自分で考え、行動して、失敗から学んで解決策を考えることで、自分では気づかなかった新たな視点から考え、行動することができた。

2. 4 地域探求Ⅱ

地域探求Ⅱでは、株式会社奥但馬代表取締役である平井氏に協力していただき、株式会社奥但馬の商品である「唐三」の認知度を上げるために商品紹介動画の作成に取り組んだ。その過程で学んだことを2点以下に述べる。

1つ目は、誰に、どのような媒体を用いて魅力を売り出していくかが重要になることだ。地域探求Ⅰのマーケティング理論でも学んだように、ターゲットが明確に定まっていないと魅力を伝える方法を考えることができないため、まずはターゲットを細分化して決定することが必要である。さらに、ターゲットに魅力を伝え、「唐三」という商品を認知してもらうためにはどのような媒体を使うことが1番効果的なのかを考えることが大切である。これらを踏まえてターゲットを決定した結果、「唐三」を売り出すターゲットは30～40代の男女に、商品紹介動画を作成して視聴してもらおうと考えた。このターゲットはお酒を飲む際のおつまみとして

「唐三」が合うと考え、また、ユーチューブなどの動画を視聴する人が多いと考えたため、このターゲットと発信方法に決定することができた。

2つ目は、「唐三」のより良い商品紹介動画を作成する際に、自分たちも楽しみながら作成することが大切であることだ。動画の構成を考える際には、見る人に、端的にわかりやすく魅力を伝えることが大切であると考え。この要素に加え、自分たちが面白いと思える動画の構成を考え、楽しんで撮影を行うことがより良い商品紹介動画を作成することに重要であることを学んだ。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

村岡高校での高校生活の中では、地域創造系での授業以外の時間にも、地域と関わりあった授業が多かった。私は総合的な探究の時間の集落調査班での活動やボランティアサークルでの活動、マラソン大会のスタッフとしての活動など、地域住民と関わり、住民の生の声を聞く機会が多くあった。このような活動の中で、私は様々な「人とのつながり」を作ることができたことが、現在まで行ってきた活動にも、これから地元と関わりあっていく活動にも生かされていくのではないかと考える。このような「人とのつながり」を持って活動していく経験を積んだことで、様々な立場の人の視点に近づいて考えることができるようになったと感じている。これらの活動の中で学んだことを、以下に詳細に述べていく。

3. 1 集落調査班での活動

私は総合的な探究の時間の授業では集落調査班に所属しており、小代区・村岡区の集落に出向いてインタビュー調査を行

った。集落調査班の活動で学んだことは3点ある。

1つ目は、集落の魅力を聞き出すためのインタビュー方法の工夫である。以前集落の魅力を聞き出すための1回目のインタビューを行った際に、その集落の過去の歴史について多く話していただいたことがあった。しかし、その集落の歴史的な魅力が現在はもう残されていないのであれば、その集落の現在の魅力としてガイドブックに書くことができなかった。そのため、集落の魅力を聞き出すための質問をする前に、「なぜ集落調査を行っているのか」という趣旨を説明することが重要だと学んだ。また、「現在から未来へのベクトル」で集落の魅力を聞き出すための質問を考えたり、インタビューの質問事項に対して、自分の経験を交えながら質問したりすることで相手は答えやすくなることを学んだ。

2つ目は、自分で考えて行動することで、新たな考え方を発見できることである。集落調査班の活動の目的は「消滅の危機にある集落の魅力を、高校生の視点で見つけ、発信することで、地域に活気を与えることである」と定義されていた。しかし、集落調査班で活動を行っていくうちに、集落調査を行う目的を「自分たちの視点で発見した集落の魅力を、ガイドブックという媒体を用いて地域住民に集落の魅力発信し、魅力の再確認を行ってもらうとともに、地域住民が知っている魅力と観光客が見つけた魅力を伝え合える相互関係を作り、集落に活気を与えることである」と考えるようになった。以前の集落調査の目的は大きな漠然とした目的であったが、集落調査班で考えなおした後者の目的に定義しなおし、班員で共有することで、より明確な目的を持って自分たちが集落を調査できるようになると考える。このように、元々定

義されていた目的を自分の中で噛み砕いて考え直すことで、新たな考え方を身につけることができたと感じている。

3つ目は、情報を的確に伝えるためには、情報を整理することが大切だということを学んだ。インプットとアウトプットは魅力発信の両輪となるため、アウトプットするためにはインプットも工夫しなければいけない。以前、地域創造系の生徒にそれぞれの班に分かれて集落調査を行ってもらった際に、集落調査を行う目的や手順について自分たちで説明しなければいけない機会があった。この説明をする際に、ガイドブックに書いてある趣旨説明をするだけでなく、自分が活動から学んだことをインプットし、順序立てて説明することが大切であることを学んだ。また、聞き手により理解を促すために、自分が活動の中で失敗したことから学んだ経験を交えて話すことも重要であることを学んだ。この一例として、初めて集落調査を行う地域創造系の1年生に向けて、自分たちで集落調査の方法を説明する際に、自分たちがガイドブックを作るときに写真が少なすぎて冊子を作るのには苦労したという失敗から、インタビュー調査の際にできるだけ多くの写真を撮っておいた方がよいことを1年生に伝えることができた。魅力を調査した後は、魅力をより良く伝えるための文章構成が必要である。ガイドブックには写真だけでなく、そこに添える文章も大切となる。写真も魅力を伝える大切な資源の一つであるが、写真に写っているものの情報しか伝わらない。しかし、文章は相手に想像を膨らませることができ、写真以上の魅力を伝える力がある。そのため、何度も文章を書く経験をする中で、文章構成力を身につけることができた。このように、まず自分が集落の魅力や集落調査についてよく理

解し、インプットしたうえで、情報を伝えていくアウトプットをしていくことが大切であることを学んだ。



写真 2 集落調査後に集落の魅力を再抽出している様子

3. 3 みかた残酷マラソン

3年次には地域で行われているマラソン行事に初めてボランティアスタッフとして参加した。その中で学んだことは2点ある。

1つ目は、地域行事に参加したことで、高校生が地域に必要とされていることを感じることができ、地域住民とつながる大切さを学んだ。私は入学当初から新型コロナウイルスの影響で学校外に出て活動を行う機会が少なく、地域住民との関わりがあまりなかった。しかし、地域住民と関わる機会が少なかったからこそ、3年次に初めてみかた残酷マラソンのスタッフをした際に、地域住民から「高校生が給水所を担当してくれると活気が出る」と言ってもらい、より嬉しさを感じることができた。私は高校生給水所の設営を担当したが、そのような声を聞いたことで元気をもらい、自分も給水所の自分の役割を全力で果たすことで地域に活気を与えようと考えた。このように、自分たちが実際に地域住民と関わり、共に活動することで新たなつながりや関わりが生まれ、地域住民に高校生が必要とされているこ

とを実感することができた。

2つ目は、ランナーとの関わりの中でコミュニケーションの大切さを学んだ。給水所では自分たちがランナーに向けて声援を送ったが、それ以上にランナーから「村岡高校ありがとう」と感謝の言葉をいただいた。私たちが笑顔で応援し続けるとランナーに笑顔で声をかけていただけるが多かったことから、つらいときに両者を元気づけることができるコミュニケーションの大切さを学んだ。

このように、みかた残酷マラソンのマラソンスタッフとしての活動を経験できたことによって、自分たちと地域住民、ランナーの三者に喜びを分け与えることができ、良い影響を及ぼしあえる関係を作ることが、マラソンスタッフをする意義であると学ぶことができた。

3. 4 ボランティアサークル

最後にボランティアサークルでの活動の中で学んだことを2点以下に述べる。

1つ目は、ボランティア活動は「相手のため」だけでなく、「自分のため」になる経験ができることを学んだ。活動の中で最も印象に残っているのは村岡福祉まつりでボランティアスタッフとして参加したことだ。イベントの最後に参加していた地域の方へ花の手渡しをしたときに、地域の方に笑顔になっていただいたり、喜んでいただいたりしたことで、自分自身の行動が人のためになり、また、ボランティア活動へのやりがいや喜びを感じた。

2つ目は、自主的に行動することで新しい価値観や障がい者の視点での考え方を学ぶことができた。実際に地域の手話サークルの方と交流したときに、耳が聞こえない方と手話を通して会話をすることで、笑顔になったり、楽しそうに話してくださったりしているのを見て、自分

の中の「障がい者と健常者は違う」という偏見を減らすことができ、自分の中での新しい価値観が生まれたと感じている。また、耳が聞こえない方は見た目では障がい者であることに気が付きにくいため、周りの人は気が付いたら声をかけてあげる大切さを学んだ。手話を少しでも知っていると、聴覚障がい者は話すときに安心感を持ってもらうことができることを学んだため、部活動の中で手話について学びを深めるために自分たちで手話の本を買い、集まって練習するなどして積極的に活動を行っていくことができた。



写真 3 地元の手話サークルの方に手話を習っている様子

4. 地域の現状で感じていること

香美町は大学進学や就職によって10代後半から20代の若年層が町外へ転出超過が課題である（図1）。



図 1 香美町の人口移動の様子

その上、私は現在の香美町は一度転出した若者が大人になっても帰ってこないことが原因であると考えられ、また 20～30 代の若者の流入数が少ないため、結果として転出人口の方が多くなり若年層の人口減少が起こっているという分析をしている。

若年層の転出超過の要因は、

1. 仕事の種類の少なさ
2. 地元の魅力を見いだせていないことだと考える。この 2 点について以下に詳しく述べていく。

1 つ目は、仕事の種類の少なさだが、魅力を感じられる仕事は人それぞれ違う。しかし、現在の香美町は職業選択の幅が狭く、地元の若者が香美町に帰ってきてつきたいと感じる仕事は少ないという印象を持っている。香美町で仕事をしようと考え、公務員や土木業、介護や医療など社会福祉業が多い。しかし、若者がやりたい仕事は 1 位プロスポーツ選手、2 位ユーチューバー、3 位イラストレーター、4 位美容師、5 位パティシエなどの調査結果が出ている（13 歳のハローワーク、人気職業ランキングより）。これらの仕事を香美町ですることは難しく、都市部に進出するからこそできると考えられているだろう。だから、私は現在香美町が持つ職業に加え、香美町に残ったり、訪れたりして仕事をしたいと思ってもらえるような環境づくりや香美町の魅力発信ができる仕事を作ることが必要であると考え。現代はインターネットの普及によって、どの場所においても仕事ができる時代になっているため、インターネットを自由に使うことができる環境を作ることによって、香美町に住みながらできる仕事が増えてきた。また、香美町の魅力を売り出していくことによって、地域住民には香美町の魅力を再認識してもらうとともに、

地元に戻ってきて仕事がしたいと思ってもらい、都市部に住んでいる人に対しては、香美町を訪れて仕事をしてみたいと思ってもらえる機会が増えるのではないかと考えられる。

2 つ目は、地元の人自身が地元の魅力を見いだせていないことだ。集落調査班での活動で集落の魅力についてインタビューを行った際に、地域住民の第一声で「何もない」と言われたことが印象に残っている。自分が住んでいる集落に魅力を見出してもらうことで、現在住んでいる人に対しては地域に愛着を持ってもらい、長く住んでもらうことができるため、人口の流出を防ぐことができる。

5. 地域に必要なと思われること

前項では、人口減少が課題であることを述べた。この課題解決のために、必要だと考えられることは

1. 観光客に対する魅力発信
 2. 地域住民に対する魅力発信
- だと考える。この 2 点について、以下に詳細に述べていく。

1 つ目は、観光客に対する香美町の魅力発信だ。私は香美町と環境が似ている新温泉町と比較して考えた。香美町は神戸営業所を置いてメディアに香美町の魅力を伝えテレビに出演したり、ふるさと納税の返礼品とともに直筆の手紙を入れたりするなど、魅力のアピールに力を入れている。これは新温泉町では行われておらず、魅力を発信するための手法は香美町の方が上回っていると考え。しかし、ユーチューブの登録者数や再生回数は新温泉町の方が上回っていた。登録者数や再生回数によって、魅力が伝わっているかどうかははかれるわけではないが、新温泉町の動画は最後まで楽しく見ることができたが、香美町の動画は自然風景

と音楽のみの動画で、興味をひかれなかった。このことから、発信するために様々な方法をとっていても、発信内容や見せ方を見る人の誰にでも伝わるように作成すると、逆に誰にも魅力を伝えることができなくなってしまう可能性がある。そのため、ターゲットに合わせて魅力を伝える発信媒体や方法を変化させることで、動画を見てもらうことができるようになると考える。

2つ目は、地域住民に対する地域の魅力発信ができていないことだ。徳島県上勝町研修の際に、地域の魅力は地元の人ほど気づきにくいということを学んだ。このことは私が集落調査を行った際にも感じたことである。香美町の観光客に魅力を伝えるために、私は地域住民に香美町の魅力を伝える宣伝人になってもらうことが必要であると考え。地域住民に自分が住んでいる集落の宣伝人になってもらうことで、香美町の魅力発信者が増え、観光客へのアピールがより効果的にできるようになると期待される。そのためには、地域住民に香美町の魅力を認知してもらうための政策を考えていくことが必要である。これは自治体だけでなく、地域住民同士での魅力の共有ができるような政策を考えていくことで、より良く魅力が広まっていくのではないかと考えた。この政策については次項で述べていく。

6. 私の地域活性化プラン

香美町が持つ人口減少と魅力発信の課題から、私の考える地域活性化プランは、集落ガイドブックを活用して、

1. 手に取ってもらう工夫をすること
2. 魅力を他の人に伝えたいとする仕組みを作ること

の2つである。私は、地域住民に対する魅力発信を改善していく方法を中心に、

上記の2つの政策を軸に以下に詳しく述べていく。

まず、集落調査班では集落の魅力を自分たちの視点で発見し、発信するためにガイドブックを作成している。調査を行っていくなかで、地域住民は自分の住んでいる地域の魅力を知らない人が多くいるように感じた。ガイドブックを用いて地域の魅力を発見し発信しているにもかかわらず、地域住民に地域の魅力を知られていないことから、集落ガイドブックは地域住民に手に取ってもらえていないことに気が付いた。このことから、集落ガイドブックを手に取ってもらえるような工夫をすることが必要である。ターゲットを明確にするために、どんな方が集落ガイドブックに興味を持っていただいているのか、どのように改善していくべきなのかを知るために、道の駅に設置したデジタルコンテンツを用いて、アンケート調査を行った。アンケートの質問は、

1. 性別、年齢、住んでいる地域
2. 香美町を訪れた目的
3. ガイドブックへの印象と改善すべき点

として、ガイドブックの内容と設置場所をより良く改善していけるような質問にした。このアンケートの結果を以下に示す。

1. 性別を教えてください
男性 5人
女性 3人
2. 年齢を教えてください
男性

20代前半 1人
30代後半 1人
40代 3人
女性
20代前半 1人
40代 1人
50代 1人

3. 住んでいる地域を教えてください

香美町内 4人
香美町外 4人

4. 香美町にどんなものを求めて訪れようと思いましたが

- ・山に囲まれていて、自然が豊かであること
- ・食事がおいしいこと
- ・自然を使ったアクティビティを楽しむことができること
- ・鳥取県に行く休憩として、道の駅ハチ北に立ち寄れること

5. ガイドブックについて、どのような印象を持ちましたか

興味が湧いた 4人
少し興味がわいた 3人
あまり興味が湧かなかった 1人

6. なぜそのような印象を持ちましたか

- ・知らない土地のいろいろな情報が見えてよかった
- ・場所ごとに写真付きで紹介されていて見やすかった
- ・高齢化が進む地域と、そうでない地域の差、魅力があると理解されている地区の差がはっきり出ている、その理由に

興味が湧いた。

7. どこにガイドブックを置くことでより香美町の魅力が広まっていくと思いますか

- ・道の駅
- ・駅
- ・観光スポットの食事をする場所
- ・移住者を増やしたいならば、移住者が相談に訪れる行政機関やコーディネイト施設。観光客を増やしたいならば、県や市のホームページの観光ページに載せるといいと思う。

これらの結果から、香美町民にはガイドブックに対していい印象を持ってもらうことができたが、香美町外に住んでいる人にはあまりいい印象を持ってもらうことができなかった。よって、ガイドブックは香美町外の人よりも、香美町民に対して発信していくべきものであると考えた。地域住民に手に取ってもらう方法として、私は地域住民を年代や性別、その人の趣味や求める情報などに応じて細分化し、ターゲットに合わせたガイドブックを作成していくべきだと考える。例えば、保育園児を持つお母さんに対して、集落ごとの子育ての利点を知ってもらうことで、自分が良いと思った情報を自分の子育てに役立ててもらえることができる。また、ママ友同士のコミュニティで良かった情報が共有されていくことによって、よりガイドブックが必要とされ、手に取ってもらいやすくなり、集落の魅力も伝わっていく。このように、ターゲットを定めたいえで地域住民に自分の集落以外の魅力を知ってもらうことで、地域住民に地域の宣伝人になってもらうことができる。

次に、ガイドブックを読んで知った魅

力を他の人に伝えたいくなるような仕組みを作ることが必要である。香美町の自分が住んでいる地域に魅力を感じている人ほど、訪れた人との会話や、SNSを通して魅力を発信しようとしている。そのため、他の人に伝えたいくなるような、ここでしかできない体験をしてもらえる仕組みを作ること、より香美町の魅力を理解してもらえると考える。その体験として、私は集落ガイドブックを用いたサイクリングツアーを提案したい。香美町の魅力は自然豊かで原風景が残っているところだと私自身は考えている。そのため、集落ガイドブックを活用してサイクリングツアーを行うことで、香美町の代表的な魅力である但馬牛や香住ガニを味わってもらい観光体験となるだけでなく、集落の中にある細道を通ってみたり、ガイドブックに記載されている魅力を見つけるために探検したりすることで、香美町の自然と地域住民の魅力も見つけることができると考えた。このサイクリングツアーを提供するにあたって、ターゲットを香美町に住む家族（父、母、子供）として、楽しんで集落を巡ってもらうことを目的にしたい。また、コースをいくつか設定することによって、自分たちが知りたい魅力に合わせて集落をまわってもらうことができる。このように、家族で体験してもらうことによって、親世代は自分たちが住んでいる地域を見つめなおすきっかけとなり、子供にとってはこの体験が思い出となり、将来この地域に帰ってきたいと思ってもらえるようになると思う。また、香美町の集落を巡ってもらうことで、香美町人だからこそ知っている魅力を見つけ、香美町民に宣伝人となってもらうことが期待される。

私は将来起業して香美町を観光業で活性化させたいと考えている。香美町にあ

る魅力を、「体験」を通して知ってもらえるようなツアーを作り、ターゲットに合わせた宣伝をしていくことで、香美町民に香美町の魅力を知ってもらおうとともに、香美町を訪れ、香美町と関わりを持つ観光客を増やしていきたい。また、香美町だけでなく、但馬地域という広い視点で香美町の魅力と但馬が持つ魅力に繋がりを作ること、観光客に豊岡市から香美町まで足を運んでもらう流れを作りたい。

7. まとめ

村岡高校の地域創造系の授業では香美町の良さに加えて、その魅力を売り出す技として「マーケティング」を学んだ。私は将来、地元での「ほっとする時間」を香美町に来る人に提供したいと考える。私は生まれてからずっと香美町に住んでいるため当たり前になっているが、家に帰ってきたときに近所の人から「おかえり」と言ってもらったり、帰り道は地域住民の家から晩御飯のにおいがしてきたり、夜は騒音がなく虫の音が聞こえたりすることが日常となっている。このような日常が香美町の魅力であると感じているため、この「日常」を多くの人に味わってほしいという思いがある。将来、このような魅力に加えて人のあたたかさも味わってほしい。これらの魅力を味わってもらうために、香美町を訪れる際にまずゲストハウスに泊まってもらうことで、香美町の魅力である美味しい食べ物に加えて、人のあたたかさや自然をすべて自らの体で感じることができる。将来は香美町の魅力を体験できる観光ツアーを作っていくことで、今ある香美町を長く残していきたい。また、香美町に住む人々がいきいき暮らすために、高校生が地域に出向いた活動を続けていくことで、高

校生の元気を地域住民の方々に与えていきたい。

高校での学びや経験を活かして、大学ではフィールドワークの中で広い視野と多面的な考え方を身につけていき、さらに地域活性化の方法を学んでいきたい。大学での学びを香美町に結び付けながら活動を行っていき、将来は地元の活性化に携われるような人材となることを目指して、高校での「人とのつながり」に感謝してこれからの生活に活かしていきたい。

私の地域活性化プラン

～ネットワークでつながる地域～

3年1組21番 西谷 楓輝

1. はじめに

私は、小学校のころ私の地元である兎塚の歴史について学び、この地域の名前の由来や昔の伝説などを知っていく中で、自分の住んでいる地域への関心が強くなりました。そのことからこの地域についてもっと学びたいと思い、村岡高校の「地域創造類型」に入りました。これから述べる地域活性化プランでは地域探求の授業での体験に加えて、現在社会における課題を踏まえて香美町の町づくりにおけるこれからの役割について述べます。

2. 地域探求で学んだこと

私たち地域アウトドア創造類型地域創造系では、地域探求Ⅱの活動の中で「課題」に対する調査活動と提言書の作成があり、今回私たちは「ひと・もの・こと」発信プロジェクトという地域の魅力的な人や事や物に焦点を当てて、香美町に存在する資源を製品化し、発信をしていくプロジェクトを行いました。まずはどんな香美町の魅力を発信するのかを決めました。自分たちが普段感じている魅力はもちろん、一年次の地域学入門の活動で行った、水生昆虫、シュノーケリング、植生や村岡商店街の歴史について学習をしたことも踏まえて何を売り出すのかをそれぞれ出し合い、そこから4つのグループに分かれて活動に取り組んでいきました。私たちのグループは山名氏の古くからの歴史を持った村岡商店街をテーマとしました。

私たちはここから商品を出さうと、必要となってくる知識である、マーケティング手法について学びました。需要と供給のグラフの関係や、市場の細分化（マーケットセグメンテーション）を行った後、その市場に対してターゲットを絞ってマーケティングを展開するターゲットティング、ほかの地域や企業と差別化を図り、顧客に対してアピールできるような自社製品の提供価値を決め、顧客にとってどのポジションを狙うか決めるポジショニングなど様々な方法や実際に活用している企業製品の例を学び、実習を行いより深めていきました。



図1. マーケティング手法の講義の様子

そして実際に私たちが決めた村岡商店街をどのように売り出していくかについて話し合っていました。まず私たちは天候や時間、人数や年齢など様々な条件を出していき、2つを選びその条件に合う人は何を求めているのかについて考えていきました。そこで出た意見としては、高校生が学校終わりに行く場所の選択肢が少ないことからカフェなどの気軽

に通える場所を作ることやこの地域ではバイク乗りが多いことを聞き、その人たちの走っている姿を撮ってあげるサービスなど様々なアイデアが出てきました。そこで出た意見を踏まえて商工会の方に活動を提案して、協力を依頼しました。そして商工会の方の意見を参考にして、ターゲットングを行い、2つの意見に絞り活動をしていきました。

まず1つ目は、地域内の人をターゲットとして、だれでも気軽に通えるようなアクティブカフェを作り月1でイベントを行い、それと並行して移動販売をしてもらい何か飲み物を食べながらゆっくりできるような地域の方々の憩いの場を作るといふものです。

2つ目は、商店街を訪れる方々に歴史ある場所として興味を持ってもらうために、歴史あるものの前に看板を立てて、QRコードで説明を簡単に調べられるようにし、それに加えてその看板をめぐるスタンプラリーを行い山名氏の歴史を身近に感じてもらうといふものです。

これらの活動をしていく中で学んだことは、商店街における課題です。課題というのは村岡商店街の歴史について知っている人が少ないという現状です。実際に私も村岡中学校に通っていて、村岡商店街の存在も少なからず知っていました。しかし、村岡高校に入学して、地域創造系の授業を受けるまで、村岡商店街は山名氏の古くからの歴史があり、商店街の造りも攻めにくいように設計されていることを全く知りませんでした。このような生徒は少なくないと思います。

(どのくらい村岡商店街の歴史について知らない生徒がいるかのデータが欲しい) それに加えて、村岡商店街を訪れる人口が少ないということも課題としてあります。(1日に訪れる人数の統計デー

タがあればほしい) このような課題を解決するためにこの2つのアイデアを出しましたが、人が訪れてもらえる仕組みづくり、土台作りがすごく難しく、私たちが大学に通い来られなくなっても、続けていけるような仕組みづくりを考えるのが一番苦労しました。しかしこの活動は高校生だけでするのは、実現が難しいですが、鳥取大学の先生が言っていた、地域の方々と協力してみんなでこの地域を盛り上げていくことが大切で、どれが地域活性化だという言葉の意味をこの活動を通して感じることができました。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私は高校時代に地域の現状と課題について、考える場がたくさんありました。その中の1つとして、地域創造系の生徒は1年に一度香美町の町長さんに話をさせていただく機会を設けていただいでいて、その活動の中で香美町の現状を教えていただきました。その中でも人口減少の課題は大きく、2018年3月に公表された推計値では、2045年の人口は2015年の約半数(9077人)になると予測されています(図2)。

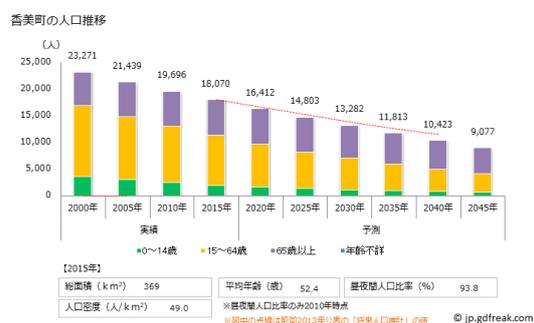


図2. 香美町の人口推移と世帯

このように人口減少は激しく、特に大学、専門学校の進学や就職における若者の都会への人口流出による少子化が大きな問

題と考えられる。この問題の解決に向けて、Iターン・Uターンを促す必要であり、町長さんからのお言葉にも、必要な知識、力をつけて香美町に戻ってきてほしいとUターンを促していました。

また⁶集落調査班の生徒や地域創造系の生徒が夏休みの期間に集落調査を行い、その集落に隠れた魅力を高校生視点で発信をする、香美町集落ガイドブック‘むらの風景’の作成を行いました。その活動の中で感じたことは、まず地域とのつながりです。協力をお願いする中で、快く引き受けていただけたことや楽しそうに私たちに話をしてくれている姿がすごく印象に残っていてこの地域の大きな魅力の一つだと感じました。そして、このガイドブックは子育て世代や田園回帰や海外の方に向けていて、どれもIターン・Uターンを進めているものが多く、ここからもIターン・Uターンを増やしていく必要があるのだと感じました。

4. 地域の現状で感じていること

今現在の地域の現状として感じていることは、2つあります。

まず1つ目は、前述にもありますが、少子高齢化が進んでいるということです。香美町では、高齢化率が40%以上であり、私の住む村岡区では、少子化の影響で28年度までに3つの小学校を1つに統合する方針だと発表がされた。自分が通っていた小学校がなくなるというのは、しょうがないことではありますが、自分の思い出の場所がなくなるのは、やはりどこか寂しい気持ちになり、それに加えて改めて少子化の問題が深刻だと感じ、このままだと自分の故郷がなくなってしまうのではないかと思います。

2つ目は商店街の現状です。前述にもありましたが、村岡商店街に人通りが少ないと感じることが多く、活気が失われているのが現状だと思います。そして、学生が学校帰りにどこかに寄り道するような場所がすごく少なく、部活があり帰るのが遅くなることも原因としてありますが、部活のない日にもほとんどの生徒が商店街の中に寄り道することなく帰っています。私は学校終わりに友達とどこかに寄り道として遊びに行く生活に凄く憧れていて、今高校生として生活しているからこそ感じることもかもしれません。

5. 地域に必要だと思われること

私が地域に必要だと思うことは、Iターン・Uターンをしやすい環境が必要だと感じます。私が故郷に帰ってくるうえで、どのような環境であってほしいかを考えると結婚をして子供がいると、子供を育てやすい環境である必要があると思います。例えば、故郷に帰っても、同じように仕事ができる環境であるということ。また子供をここで育てたいと思える環境かどうか大きいと思います。実際に学校の先生も以前、子供を育てる環境として住む場所はかなり考えたと言っておられました。このようなことから子育ての環境はかなり大事だと考えます。また子供を育てる環境として、活気のある町であってほしいと思います。村岡商店街の現状としては、あまり活気のある場所とは言えず、小学校や中学校、高校がある村岡区からしても身近にある商店街のイメージは大事だと思います。商店街が地域の人たちの中でもにぎやかでのイメージがあればこの地域を思い出すきっかけになるし、暮らすうえで候補に挙がって

⁶「村高発 地域元気化プロジェクト」の班

くるのではないこと考えます。他にもたくさんポイントはありますが、この二つに焦点を当てて考えたいと思います。

6. 私の地域活性化プラン

上記のことを踏まえて私の地域活性化プランについて考えていきたいと思ひます。まず私は仕事に関する面での課題をなくしていきたいと考えています。実際仕事に対する面でIターン・Uターンをすることができない人は非常に多いです。特に就職先が故郷以外に決まったためというのが大きいです。(図3)

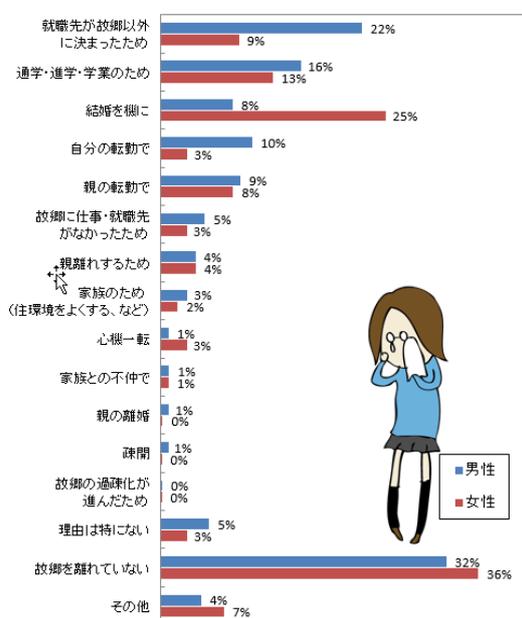


図3. 故郷についてのアンケートランキング、故郷を離れた理由

しかし、現代社会では新型コロナウイルスの影響で働き方というものが変わってきていて、リモートワーク、テレワークによりどこにいても仕事ができるそんな社会に変わりつつあります。これはIターン・Uターンにおいてはとても有利に働くことができ、都会では家賃が高く、故郷や地方への移住を視野に入れている若者が増えてきています。そのためネットワークの整備が非常に大事だと思います。実際に企業では、Wi-Fiや光回

線を使用している事業所が多いですが、在宅では費用面の問題から低速回線を使用しているケースが多いです。都心から地方に来た人たちは、回線速度の遅さにストレスを覚え、仕事の効率が悪くなる可能性があるため、良質な通信回線の確保は、非常に大切だといえます。私は家においてのネット環境を気にすることなく働けるように、ネットワークを整備した第二の会社のような施設である、「デジタルワーキングプレイスを兼ねたシェアオフィス」を作りたいと考えています。このプランについて、具体的に説明していきたいと思ひます。

まず活動の場所としては、商店街への関心を持ってもらうために、商店街を活動の拠点にしたいと考えています。社内の構想としては、三階建てにして。三階は一部屋の広さが一坪弱ほどの広さの個室の部屋を8つほどと半個室の席を6つほど用意して、一人で仕事をしたい方やセキュリティの面において、ほかの人との直接的な接触を避けたい方に向けた施設を設けたいと考えています。(図4、図5)

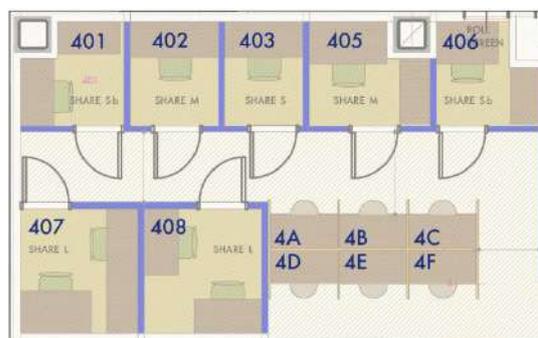


図4. 三階の簡易レイアウト



図5. 三階のイメージ写真

二階は、三階と同じく半個室をさらに6席ほど設けて、それに加えて、会議や打ち合わせなどができる6畳ほどの部屋をに部屋ほど設けたいと考えています。

そして、一回は広いカフェスペースを設けて、仕事の休憩の合間にコーヒーを飲んだり、そこで仕事をしたり、地元の仲間と近況の話などができる、コミュニケーションの場となるスペースを設けたいと考えています。それに加えて、そこに通う社員の皆さんの士気を高めるためにこの会社をこの商店街の歴史をモチーフとした、おしゃれなレイアウトにしたいと考えています。

このようなシェアオフィスの前例としては、「bace Co+志木」という企業さんが実際にやっており、この活動を参考に活動していきたいと考えている。

これを実現する上での大きな課題となってくるのは、セキュリティだと考えま

す。違う仕事をする上ではセキュリティに対するリスクは非常に大切になってくると思います。私が考えているのは、仕事をする場所は、前述にもあったように、各部屋個別にしておき、直接的な面での対策をして、さらにメールなどにおける盗聴や改ざんなどのリスクの対策も整えていきたいと考えています。これを実現すれば、新たな試みとして注目をひき、Iターン・Uターンの検討として、考えてもらえるほか課題である在宅の回線問題も解決でき、さらに地元の仲間とのつながりも大切にできるのがメリットと考え、このアイデアを実現していきたいと考えています。

7. まとめ

地域おこしは、誰か一人や行政だけでは限界があり、地域の人たちみんなですべてう繰り上げていくものだと思います。地域全体で商店街のにぎわいを取り戻すために、一人一人が協力の意思を持つことが大切だと思います。私はこのプランを実現するために大学にいき、このプランの一番の課題である、セキュリティについて学んでいきたいと考えています。私の生まれ育った故郷をみんなで守っていききたいです。

私の地域活性化プラン

～地域で子供を育て、子供が地域に活力を生む～

3年1組23番 藤原 心大

1. はじめに

私が地域創造類型に入学を決意したきっかけは、地域をもっと深く知り関わりたいと思ったからです。もともと村岡という地域について、小さい頃から山や川などの自然でよく遊んでいたため知っていました。ある日小学校の授業で山名氏や御殿山について教えてもらいました。その授業で教えたもらったことについてより詳しく学びたいと思い村岡高校を志望しました。

上述した理由から地域のことはある程度知っている、分かっていると思っていましたが、地域創造系での活動を通して自分は地域についてまだまだ知らないことばかりだと実感させられました。様々な地域活動を通して学んだことを踏まえて、この卒業論文では私の考えた地域活性化プランを述べます。

2. 地域探求で学んだこと

村岡高校の地域創造系の授業では、まず1年次の「地域学入門」では「地域を知る」をスローガンに地域の歴史や自然について学びました。具体的には、昆陽川での水生昆虫調査や、竹野でのスノーケリング・シーカヤック体験、ハチ北での但馬の植生調査、香住での但馬の地質調査、村岡商店街での村岡歴史探検などです。この授業を通して村岡の歴史や自然について学ぶことができました。

2年次の地域探求Ⅰでは、「地域学入門」での学びを基にテーマを設定し、探求学習を行います。私たちの学年は『ヒト・

モノ・コトを売り出し大作戦』を探求テーマとしてマーケティング理論を活用した地域活性化について、四つの班に分かれて探求活動をしました。

その一環として、2年生の7月に徳島県上勝町へ日帰り研修に行きました。上勝町は人口約1400人、面積約110km²、高齢化率は50%超の山に囲まれた町です。実際に上勝町に行き「葉っぱビジネス」や「ゼロ・ウェイスト」などの取り組みについて学びました。「葉っぱビジネス」とは1980年頃、上勝町で町の産業が厳しいときに当時農協職員だった横石知二氏が高齢者や女性が活躍できる仕事として発案したものです。研修では、まず「葉っぱビジネス」を成功させた横井氏に講演をしていただきました。話を聞いた中で心に残っているのは「地域づくりはみんなでするより少人数でしたほうが上手くいく」という言葉です。横石氏は地域づくりをみんなでしようとする、考えがまとまらなくなってしまいます。町の中の一人、一軒の店が輝くようになれば町はよくなるということを述べておられました。地域づくりはみんなでおこなうのが理想だと思っていました。なかなかそう上手くはいかないのだと感じました。次に「ゼロ・ウェイスト」について学びました。「ゼロ・ウェイスト」とは、2020年までに焼却ごみをゼロにしようとすることを目標でした。しかし現実には甘くなく失敗に終わったそうです。上勝町での研修を通して学んだことは、どのような仕組みで葉っ

ばビジネスが成り立っているのか。また住民の意識など目に見えない部分が大事なことや、普段当たり前のように目にしているものも資源になり得ることを学びました。

3年次の地域探求Ⅱでは、実際に地域活性化案を考え実行しました。私たちの班はキャンプに焦点を当てて活動しました。現在「吉滝キャンプ場」を利用する多くの人々が但馬外に住む方です。もっと利用者を増やすためには、地元の人にも利用して欲しいと考えました。そのためターゲットを地元の高校生に絞ってモニタリングツアーを実施しました。

活動するにあたって「自然のWi-Fiと繋がろう」をテーマにしました。具体的には脱スマホを目指して木を使っての工作、手作りでカレーを作る、星を観察するというものです。11月24日には地域創造系のメンバーで、モニタリングツアーに参加してもらいました。カレーを作る人、竹の器やコップ、スプーン、箸を作る人に分かれて作業しました。作業に夢中で時間が過ぎるのがあっという間でした。その後アンケートを実施した結果「時間を忘れて楽しめた」や「非日常の体験に満足した」などの声が多く聞かれました。一方で怪我の対策が課題として挙げられました。今後は軍手をして作業することを呼びかけなければならないと感じました。このモニタリングツアーを通して、地元にもこんなにも素晴らしい場所があることを知りました。またこの場所がもっと地元の人に知ってもらえるように努力したいとも思いました。



図1. モニタリングツアーの様子

3. 地域で活動したことから学んだこと

高校3年間地域で活動した内容は大きく3つあります。

1 つめは活動地域創造系で行った集落調査です。毎年「集落の魅力発信プロジェクト」として集落を調査しています。高校生が実際にそれぞれの集落に赴くことで、「高校生ならではの視点」で集落の魅力を発見し、それらを発信するという活動です。1・2年次は小代地域で、3年次は村岡地域で行いました。この活動の中で地域の方にインタビューする機会があります。最初は準備していた質問だけしかできず、話を深くまで聞くことができませんでした。また昔の話やマイナスな意見が多いため、「今」の魅力を聞き出すのに苦労しました。しかし地域の方との会話の回数を重ねることで、自分が聞きたい情報を引き出し、深い話ができるようになりました。この活動を通して自分が地域について知らないことが多いことが分かりました。また地域の方々がどのようなことを不便に思っているのかを知ることができました。

2 つめはマラソン大会でのイベントスタッフの経験です。村岡高校は、毎年「残酷マラソン」や「村岡ダブルフルウルトラ

ランニング」などでイベントスタッフとして活動しています。1,2年次はコロナウイルスの影響で参加できませんでした。3年次は参加することができました。私は「名前応援」といってエントリーナンバーをパソコンに打ち込み名前を呼んで応援する係でした。名前を呼んだときに驚いてくれた方、「ありがとう」と言ってくれた方、わざわざ立ち止まって「名前呼んで」と言ってくれた方などがいてとても印象に残っています。多くの参加者の方々が高校生スタッフに対して感謝の気持ちを持っていること、高校生の頑張りが届いていることを知りました。この経験から改めて高校生の活動が地域の力になっていること、地域に必要なのだと感じました。さらに自分たちが応援し、ランナーに力を与えていただけでなく、自分たちも力をもらいました。このような「相互作用」の関係性を地域でも実行したいと考えるに至りました。

3つめは「総合的な探求の時間」での活動です。1年次は民芸班、2,3年次では紙漉き班に所属していました。この活動の中で紙漉き班での活動が特に心に残っています。そもそも私が紙漉きのことを初めてきっかけは、1年次に参加した村高フォーラムの発表でした。そこでの発表を聞いて紙漉きについて興味を持ちました。また紙漉きのことを知らない人にどうすれば紙漉きを伝えられるのかについても興味がありました。紙漉き班に入った後は紙漉きを知ってもらうため、紙漉きを媒介としてコミュニティの場をつくるために活動しました。具体的には、令和3年の8月に長楽寺でオンラインのワークショップ、10月に兎塚の森でワークショップを行いました。紙漉きワークショップでは、初対面の人ばかりなのに不思議と会話が弾んだり、心が落ち着いた

りと紙漉きには不思議な力があると感じました。この他にも紙漉きのことをもっと地域の人に知ってもらうために道の駅やお店にポストカードを設置しました。ポストカードにした理由は、高齢者の多い村岡ではネットを使うよりも、ポストカードを設置した方がより多くの人に知ってもらえると考えたからです。設置から数週間には村岡高校の保護者の方からポストカードを見たという話を聞きました。この他にもポストカードを設置して頂いた場所の職員さんなどから興味深そうにポストカードを持って帰ったといった話も聞きました。ポストカードを設置したことで紙漉きのことを少しでも多くの人に知ってもらうことができ良かったと感じました。その他にはマイプロジェクトアワードへの出場、小学生との紙漉き体験、大方高校とのオンライン交流などを行いました。これらの紙漉き班での活動を通して、「楽しかった」や「またしたい」などの意見が聞けたことで達成感や満足感を覚えました。それと同時に紙漉きのことを、ひいては地元のことを大切にしたいと思いました。

4. 地域の現状で感じていること

近年は香美町全体で、祭りといった伝統行事が失われつつあるように感じます。その例として直近2年間は、むらおかふるさと祭りが開催されていません。また村岡以外でも伝統行事が無くなっています。2年生のときに集落調査で行った小代の忠宮集落でも「昔はこんな祭りをしていた。」などの話を聞きました。原因として、少子高齢化やコロナウイルスの影響、若い人たちが行事に関心がないことです。人口減少が進んでいることによる規模の縮小は避けようのないことかもしれませんが、これまで続いてきた伝統行事は継

承していくべきです。そのためには、若者が伝統行事に参加するような仕組みをつくるべきだと思います。

伝統行事以外の地域同士が交流する場も、少なくなっている気がします。私の住んでいる野々上区では数年前までは、年2回ほど公会堂での食事会やミニゲーム、カラオケ大会などが開催されていました。そこでは子供から高齢者まで集まっており数少ない世代をこえた交流の場でした。このような交流の場を住民で協力し再び構築していくべきだと思います。

また公会堂や公民館などの公共施設、地元のキャンプ場や御殿山、民俗資料館まほろばなどの公共施設の利用者も少なくなっているように感じます。それに伴って使わなくなる公共施設は増えています。2028年には香美町の小学校は香住区で一つに、村岡で一つに統合されます。今まで使われていた小学校などの施設を有効活用する方法を考えなければならぬと強く感じています。

5. 地域に必要なと思われること

地域の人特に若者が、地域のことを知り伝統を継承しようとする。地域内の施設で遊び交流したりすることが必要だと思います。若者がもっと地域のイベントに参加することで地域全体が元気になります。地域で活躍する若い人を増やすためには幼少期に地元の歴史や文化、伝統などのことを学ぶ時間も必要不可欠です。

私自身、小学生の頃にまほろばや法雲寺などの施設を見学に行きました。そうすることで地元のことをもっと知りたいたいと思うことができました。地域のことを学ぶ中で地域のことに関心、意欲のある人が増えれば伝統、文化の継承ができると思います。小学校の授業で町内の寺や

伝統的な建物について学ぶことや、学年PTAなどで伝統産業を体験すること。地元のキャンプ場でキャンプをすることなどまだまだできることはたくさんあると考えます。

6. 私の地域活性化プラン

以上を踏まえ、私の打ち出す地域活性化プランは、「地域と小・中・高等学校との連携を強化して、地域全体で教育活動をする事」です。

そのために、まずは地元のことに詳しく、郷土愛が強い人を増やしたいと考えています。私自身の経験で言っても、小さい頃から自然と触れ合い、地域に興味を持ち、地域創造系で様々な学びを得ることで地元に対する愛が強くなりました。従って小中学校で今まで以上に地域のことを学んだり、体験したりする活動を増やすべきであると考えています。

私の考えたプランは、小学校で地域のことを知り、中学校で地域の学びを深めることで、高校で地域活性化に取り組めるようにしていくものです。

具体的には、小学校では地域行事に参加し、地域の高齢者の方などと交流をします。このような地域行事に参加することで、普段あまり話さない地域の方と話す貴重な機会になり、地域の新たな一面が発見できるのではないのでしょうか。今の時代、子供は外で遊ぶことが少なく家でテレビやSNSをしていることが多いように思います。そんな子供にとっては高齢者の方との交流は新鮮であり、交流を通して子供は生活の知恵や思いやりの心を学び、高齢者の方は元気をもらえるなど双方に良い影響を与えると想像できます。

また、小学校では地域の歴史や、現状、課題を学びます。具体的には「法雲寺」や

「大雲寺」、「まほろば」などの歴史的建造物について学び昔の地域のことを高齢の方から聞いたりします。そのほかには田植えや稲刈り、地元の食材を使った調理実習、紙漉き体験など、地域の農業や、食文化、伝統産業を体験し学びます。

中学校では地域行事にスタッフとして参加し、地域の方と今の地域の課題、解決策について議論します。

そして高校では、今までの学びを活かし地域の課題解決に向けて地域活性化プランを考え実行します。

このように小中高の連結を強めることで地域愛がより強い人材を育むことができ、それがひいては地域活性化に繋がっていくと私は考えています。

また、私は将来教員となることを志しています。無事教員として地域に帰ってきた暁には、校内の授業だけでなく、地域に出て、地域の人からも教えを授けてもらいたいと考えています。地域での活動では学校で学べない多くのことが学べると思ったからです。

また小中高の児童、生徒の相互交流の場をより増やしたいと考えます。互いに感じたことを意見交換することや、先輩

が後輩に教えることで何か新しい発見や成長がきっとあります。小中高の交流や地域との連携教育を経て地域愛が強く、今後の地域を支える人づくりをしたいです。

7. まとめ

私はこの3年間の「地域探求」や「総合的な探求の時間」などの授業で多くのことを学びました。そして学べば学ぶほど地域のことを好きになりました。

今まで見えてこなかった地域の魅力をたくさん知り、地域の現状や課題も学びました。そしてなにより村岡高校に入って地域で活動する中で人と人が繋がることの大切さ、温かさを学びました。

私は将来、地域創造系での活動で習得したコミュニケーション能力、プレゼン力、問題解決能力などを生かし、立派な教員になって香美町に恩返しをしたいです。これからの香美町を担う人間の一人として一時的に香美町を離れたとしても必ず戻ってきて地域活性化に少しでも役立つよう力を尽くしていく覚悟です。

私の地域活性化プラン

～価値となるものを見つめる～

3年1組 27番 山根 恵

1. はじめに

私が地域創造系を選んだ理由は3つあります。

まず、私は養父市関宮地区に住んでいるのですが、少子高齢化が問題視されています。そこで同じ少子高齢化の進む香美町はどのようなことをしているの、知ることによって何かヒントになるのではないかと考えたからです。村岡高校に入る前の私は、香美町の存在について知っていましたが、どのような町でどのような取り組みをしているかなどは知りませんでした。そのため村地域創造系の授業を通して、村岡についても知りたいと考えました。将来的には授業の中で得た学びをもとに、関宮地区をただ「若者が住んでいる地域」ではなく「若者が主体的に動く地域」へと変えていきたいと考えました。

次に、どのように「地域を創る」知りたかったからです。この「創る」という漢字には、原型がないところから新しいものを作り上げるという意味があります。そのため地域になにもない状態から、どうやって新しいものを創り出すのか実践を通して学びたいと考えました。

最後に、「地域を創っていく人」として何ができるかを考えたからです。私たち高校生などの若者は、地域を創る上でとても重要な役割を担っています。例えば地域の資源を若者の視点から見ることで、新たな地域資源に対するアプローチの方法を生み出すことができます。私たちに今何ができるのか、何をするべ

きなのかを考えるためのヒントを得たいと思いました。

私はこの地域創造系の3年間で香美町の人や自然などに触れ、地域について様々な知識や考えを得ることができました。以下に、私が「地域探求」の授業を通して学んだこと、考えたことをまとめ、生まれ育った関宮地区の地域活性化プランを述べさせていただきます。

2. 地域探求で学んだこと

私たち61期生は「地域探求Ⅰ」の授業で徳島県上勝町に行き、マーケティングの研修を行いました。上勝町は高齢化率が56%と、徳島県内で一番高齢化が進む過疎地域です。香美町は高齢化率が約40%であるため、香美町と比較してもかなり高齢化が進んでいる地域です。そのような状況でも上勝町は、先進的なまちづくりを行う地域として全国から視察者が絶えません。上勝町は「葉っぱビジネス」の取り組みで有名です。葉っぱビジネスとは、料理に添える葉っぱ「つまもの」を生産し販売するビジネスです。この葉っぱビジネスは、平均年齢70歳を超える高齢者や女性が注文から出荷までを自分たちでしておられます。中には年収1,000万円を超えるおばあちゃんもいます。その理由はおつまものはとても綺麗で、軽いため高齢者への負担が少なくすむからです。また定年がないためずっと働き続けることができます。私たちはこの葉っぱビジネスをはじめた横石知二さんに「持続可

能な地域づくり」というテーマでまちづくりの大切なことについてお話をしていただきました。このお話の中で寒波により産業が廃れてしまった町を復活まで導いたときの経験談を聞きました。私はこのお話で学んだことが2つあります。1つめはひとりひとりに役割を持たせることが大切ということです。横石さんは、葉っぱビジネスで一人一人に役割を持たせることにしました。そうすることで町の半数を占めている高齢者や女性に、役割と同時に居場所を提供することも出来ました。また自分の役割があることで精神的にも元気になりました。山での仕事で足腰が鍛えられたことにより、健康維持と寝たきり防止にも繋がりました。その結果町には老人ホームがなくなりました。

私は以前まで高齢者にとっての「幸せな暮らし」とは、施設などで若い人たちに介護などをされながらゆっくりと過ごすことだと思っていました。しかし上勝町の高齢者は、80歳を過ぎてもPCやスマホを使いこなし元気に働き続けていました。このことを知って幸せな暮らしとは、何歳になっても働ける場所があることではないかと自分の考えが変わりました。少子高齢化との向き合い方について、どうしたら上勝町のように高齢者でも活躍できる場所を作れるか考える必要があると思いました。



写真 1. つまものの例⁷

2つめは自分の頭で考えるだけでなく、現場を見に行くことが大切だということです。現場に見に行くことで、なぜ上手くいかないのか分かるだけでなく、現場がどのようなことを求めているのか知ることができます。今では全国から注目を集めている葉っぱビジネスですが、ビジネスを初めた当初は全く売れませんでした。その原因の1つにどのようなものを出荷すればよいのか全く分からなかったからです。当時花物以外のつまもの商品は、ほとんど存在しておらず、何を出荷すればいいのか手探り状態でした。そのことを横石さんは知人に相談したところ、「実際につまものが使われている現場を見に行くべき」とアドバイスを受けました。そのアドバイスを受け料亭へ足を運び、つまものについて現場の意見を確かめることにしました。

まずつまものがいつ必要とされているのか調べてみることにしました。料亭の仲居さんの話では、日本料理は季節感を大切にしているため、45日早い季節感の先取りが求められていることがわかりました。

次にどのようなつまものが求められているかお話を聞きました。つまものを使う際に、葉っぱがきれいで、大きさや色が揃っていると使いやすいそうです。横石さんの葉っぱは、収穫してきた葉っぱを色や大きさを整えず虫に食われていてもそのまま出荷していました。そこで、パックの中の葉っぱの色や大きさをそろえるなどの工夫をしました。その結果売り上げは伸び、現在は図のように会社全体の年商は20年で、2億円に上り詰めました。

⁷株式会社いろどり HP

<https://irodori.co.jp/tsumamono/>

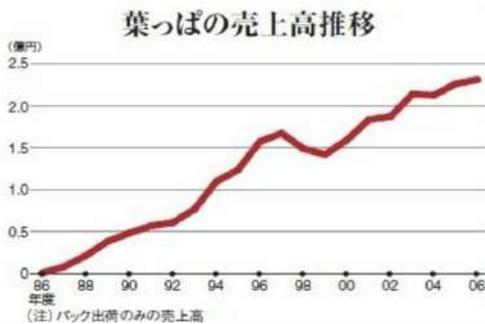


図1. つまものの売上推移

この話を聞いて、私には地域について考えるだけで実際に行動に移す力が足りていないことに気づくことが出来ました。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私は総合的な探究の時間で、3年間小代区内で集落調査を行いました。

1年生では地域おこし協力隊として活動しておられる桑原真琴さんにインタビューを行いました。地域おこし協力隊とは都市地域から人口減少や高齢化が著しい地域に移住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取り組みです。隊員を任命するのは各地方自治体であり、活動内容や条件、待遇は、募集自治体により様々で任期は概ね1年以上、3年以内です。⁸

桑原さんは兵庫県宝塚市出身です。桑原さんが、小代の地域おこし協力隊になったきっかけは大学のゼミで定期的に棚田の草取りに参加していたことでした。桑原さんは地域おこし協力隊として2年間活動しておられました。その桑原さんはインタビューの中で、やりがいを感じ

た仕事について、植物園で行った映画の上映会とおっしゃっていました。映画の上映会をはじめたきっかけは、桑原さんが勤務しておられた「たじま高原植物園」に地元の人があまり来ないことを聞いたからです。そこで植物園を訪れてもらえるように「植物園を一夜限りの映画館に」というテーマでツアーを開催しました。このツアーには大阪や神戸などの地域から10名の方が参加されました。この上映会の後に但馬牛や村岡米を使った昼食を食べました。その他にも植物園の名物である「大カツラの木」を見学、ベンチや看板を自分たちで作るなど企画しました。ただ映画を見るだけでなく、香美町の自然や、食べ物などの魅力を伝えることのできる内容になっていました。⁹

桑原さんは上映会に訪れた方から励ましの言葉をかけてもらったことで仕事のやりがいを感じたと語ってくださいました。また色々な地域の若い人にツアーで協力してもらったことで、若い人たちの中にも積極的に地域おこしを頑張ろうとしていることに気づいたと話してくださいました。桑原さんは地域おこし協力隊を辞められましたが、現在も小代に暮らしておられます。小代の人の優しさがとても魅力に感じたそうです。私は桑原さんの話を聞いたことで、若者の視点から物事を見て、それを活かした地域おこしをできる地域おこし協力隊という制度に魅力を感じました。

私は将来的には関宮にUターンして戻りたいと考えています。その際に考えた地域活性化の案については後の章で述べます。

⁸総務省「地域おこし協力隊とは」

<https://www.chiikiokoshitai.jp/about>

⁹「植物園を一夜限りの映画館に」桑原真琴

https://note.com/ridilover_local/n/nc9837f3f8891

2年生では小代区東垣集落に向かいましました。東垣集落には2021年夏現在で14世帯、28人の方が暮らしています。東垣集落の良いところは住民同士の絆がとても深いところです。道路の草刈りひとつとっても、住民同士で協力し合うほど仲が良いです。この仲の良さの秘訣は、静かでのどかな生活環境の為、おっとりして温厚な人が多いのだと語っていただきました。そのため集落の環境や住んでいる住民の人柄が良く、落ち着けるそうです。また年に1回住民同士でご飯を食べることで、計画的にコミュニティ事業を行っているそうです。この集落を訪れる前まで、私は人数が

少ない集落では住民同士のコミュニケーションは減ってしまうと思っていました。実際に訪れるとそんなことは無く、むしろ集落の人同士団結していることが分かりました。



写真2. 東垣集落 大日堂「大日如来」

田舎は人数が少ない分、「全員で集落を創る」という意識を持つことができ、まとまりやすいのは大きな魅力の1つです。どうしても、小規模集落はマイナスなイメージを持たれがちですが、住民同士の絆が深くなり、全員で地域づくりに取り組めることで強みに変えられると気づき

¹⁰関宮まちづくり協議会ホームページ
<https://www.city.yabu.hyogo.jp/material/files/group/13/sekinomiyamatizukuri.pdf>

ました。

4. 地域の現状で感じていること

私の住む関宮地区の人口は平成25年時点で、229世帯、603人です。

▲関宮地域の人口、世帯数

区分	世帯数	人口	世帯当り人口	高齢化率	65歳以上世帯	高齢者割合率
和歌山	25	62	2.7	63.55	11	44.00
尾崎	71	299	4.2	27.50	21	29.58
関宮	229	603	2.6	36.22	62	35.81
和歌山	38	106	2.8	33.94	12	31.58
八木	34	23	0.7	24.91	3	29.47
平野	23	58	2.5	41.30	7	30.43
あらかし	34	112	3.3	6.90	1	2.91
吉野	99	298	3.0	31.25	20	20.29
中野	19	177	9.3	29.55	24	34.29
計	638	1,729	2.7	32.97	187	29.45

図2. 関宮地域の人口、世帯数¹⁰

これは前の章で述べた東垣集落の約21倍です。しかしその一方で少子化についてはかなり進んでいます。参考にするために2020年に但馬初の義務教育学校として開校された関宮学園の生徒数を調べてみました。私は関宮学園に変わる1年前の令和1年度に卒業しました。その当時は1クラス20人以上、多くて30人ほどいました。しかし現在は20人以下のクラスが増加しています。このようにクラスの人数が減ることで、少子化が進んでいると感じました

令和4年度 児童生徒数

学年	男子	女子	児童生徒数	
前期課程	1年	8	15	23
	2年	13	9	22
	3年	10	11	21
	4年	14	10	24
	5年	9	8	17
	6年	10	16	26
	片芝学級 藤村学級	1 0	0 1	1 1
後期課程	7年	8	9	17
	8年	13	5	18
	9年	9	9	18
	小柴学級	2	0	2
計	97	93	190	

図3. 関宮学園生徒数¹¹

¹¹関宮学園 HP
<https://yabuboard.ed.jp/sekinomiyagakuen/wp-content/uploads/sites/11/2022/10/1c253a8>

関宮も東垣集落と同様に「人が少ないことはメリット」と捉え、地域づくりをする必要があると考えました。

私が自分の住んでいる関宮地域について3つ感じていることがあります。



写真3. 旧関宮小学校⁷

1 つめは年代を超えた人と人の繋がりが現在無くなってしまったということです。その原因に新型コロナウイルスの影響でお祭りが少なくなったことが考えられます。関宮には「関神社」という神社があり、毎年7月初めの土曜日に「祇園祭」、10月初めの日曜日に「秋祭り」が行われます。このお祭りには10代から50代まで幅広い年齢の地域住民が参加しています。祇園祭ではおもちゃのくじ引きやフランクフルトなどの屋台や、ステージで歌や楽器の演奏も行われていました。その他にも秋祭りではお神輿を担いだり、太鼓を叩いたりして地域の皆で盛り上がっていました。このお祭りを見るために、実家に帰って来ている人も見かけられました。そんなお祭りも、近年では中止になるか、規模を縮小して行われています。お祭りの規模が小さくなることで2つの影響があります。1つに中高生の参加人数が減ってしまうことです。屋台の種類が限られることで、中高生の参加者が減って

しまいました。2つに伝統文化が薄れることです。祭りの規模が縮小することで、祭りに興味を持つ人が年々減ってしまいます。そうなっていくと、お神輿や太鼓などを担ぐ人が減ってしまいます。ゆくゆくはお祭りが盛り上がりだけでなく、お祭りが消えてしまう危険性もあると感じました。

2 つめは地域にある公園の活用方法です。関宮には「ふれあいパーク」と呼ばれる2019年に出来た公園があります。



写真4. ふれあいパーク

この公園は旧関宮小学校(写真3)跡地につくられた公園で、子供から高齢者まで、多様な年代の人々が集う公園として作られました。¹²

もともとグラウンドだった場所には地域の住民で芝生を植え、遊具も新しくなっています。現在では地域の幼稚園児から中高生までの子供たちだけでなく、大人や高齢者といった幅広い年代の方が訪れます。休日にはサッカークラブの練習で地域外の人も訪れています。またふれあいパークの近くには「水辺公園」という川が流れている公園があります。この公園は春になると桜並木の綺麗な景色が見え、夏には水遊びをする家族も見受けられます。私はふれあいパークと水辺公園が見せる季節ごとの景色を上手く活用するこ

[d1ef1585d41f2ca5ae6bda881.pdf](#)

¹²Kiss PRESS 関宮ふれあいパーク公園部

「オープニングイベント」

<https://kisspress.jp/articles/21205>

とで、公園の魅力さをさらに引き出せると
思います。将来的にはただの遊び場から、
同年代の親や子の交流の場や自然の美し
さを伝える場としたいです。



写真5 .水辺公園 桜並木の一部

3つ目は生活の不便さです。不便といっ
てもお店が無い訳ではなく、お店はあつ
ても遠すぎるという点があります。私の
家から一番近いスーパーまで距離は徒歩
10分程度です。しかし冬の期間は雪が降
ることで道が滑りやすくなり、移動が困
難になります。高校生の私でも移動が困
難になるということは、高齢者の方はよ
り移動が困難になります。この生活の不
便さを解決するための方法も考えていく
必要があります。

5. 地域に必要なと思われること

今関宮地域に必要なことは、若者が地
域の中の価値のあるものを見つめること
です。ここでいう価値とは、経済活動のこ
とではなく、地域住民にとっては地域の
自慢や誇りになるもの、地域外の人にと
っては地域を訪れるきっかけになるもの
です。私は関宮の関神社にその価値があ
ると思っています。



写真6. 関神社

関宮の地名はこの関神社と深い関わりが

あります。関神社はその昔皇極天皇が西
国の悪病が都(京都)に入らないようにと
廣峯(姫路)と羽山(関宮)の地を選んで
素盛鳴命(スサノオノミコト)の御神霊を
お祀りになりました。その功あつて悪病
が都に入ることを防いだことから病を堰
き止めた都として関宮と名付けられたと
言い伝えられています。関神社は歴史
的価値の他にも文化的価値もあります。関
神社の本殿と拝殿には、兵庫県登録有形
文化財に指定されている中井正貞の彫刻
が良好な保存状態で残っています。



写真7 .兵庫県登録有形文化財

この他にも関神社には市指定文化財の大
きなカヤの木があります。この大カヤは
樹齢約500年であり、全国的にも大変珍
しい「枝垂れカヤ」です。



写真8. 市指定文化財 大カヤの木

しかしこの神社自体お祭り以外で訪れ
る機会が無いことや、その木の貴重さが
伝わっていない為、風景の一部になつて
います。地域に必要なことは大カヤの木
のように、いつも見ている景色の中から
隠れている価値を見つけることです。そ
うすることで地域の新たな魅力を気づき、

また感じた魅力を人に伝えることで人々の「地域の見方」が変えることに繋がると思います。また周りの景色をただの景色として見るのではなく、「価値になるかも」という気持ちで見ること大切だと思います。次の章では、高校生や子連れの家族、20代30代の大人を対象にした地域活性化プランを述べます。

6. 私の地域活性化プラン

まず私が提案したいのは、高校生が地域の会議へ参加することです。その理由は地域づくりの中に高校生など若い人が関わる機会が少ないからです。高校生が地域の会議に参加し地域の現状を知ってもらうことで、若者目線の意見を述べることが出来ます。

つぎに新たな企画として、2つの案を考えています。1つめは地域の公園を活用したイベントの提案です。第5章で述べたふれあいパークと水辺公園の景色をいかしたイベントを行いたいと思っています。



写真9. 夏の水辺公園

このイベントでは、主にターゲットとしては地域内の子どもと両親です。なぜ地域外の人ではなく、地域内の人に知ってもらうか。それは地域の人々が魅力を感じていないと、地域外の人に魅力を伝えることが難しいと考えたからです。公園でのイベントを季節ごとに考えています。具体例としては、春には綺麗な桜並木を活かしたお花見イベント、夏には水辺公園の綺麗で冷たい水を活かした川遊び、

秋には枯れ葉を用いて焼き芋、冬には沢山積る雪を活かした雪だるまやかまくらをつくるなどです。この1年を通したイベントに参加することで、公園の魅力や人との交流の大切さを学べると思います。また田舎に住むことの魅力を地域に住んでいる人に知ってもらうことや、子供同士やお父さんお母さん同士の交流を広げってもらうことも目的です。イベントの準備として、まず高校生が関神社など魅力的な場所や住んで良かったこと等を書きパネルで展示します。パネルの観覧後には、地域への関心度や魅力をどれくらい感じているかをまとめたアンケートを書いてもらいます。このアンケートに書いてもらうことで、地域に対する住民の関心度などを客観的に見ることが出来ます。一方で場所の確保の方法やイベント運営の方法など、高校生だけでは決めることが難しい問題があります。その問題を解決するために、地域の議会で高校生自らが企画書などを用いてプレゼンテーションを行います。地域の方に場所や日時の調整等協力していただきイベントの実行に移したいと考えています。

2つめは高齢者や体が不自由で買い物に行けない人への、買い物代行もしくは出張販売の提案です。現在高齢者が買い物に行く際に使うバスの本数は1時間に一回あるかどうかで少ないです。その為高齢者の方は長い間バスを待たなければなりません。もしこういった高齢者を支える仕組みとして、地域の人と相談したうえでの買い物代行もしくは出張販売のシステムがあれば便利だろうと考えます。そのためには、まず買い物代行ではあらかじめ必要なものをリストにして代行してもらう人に伝える必要があります。つぎに地域の商店をされている方が出張販売をする際には、一人暮らしの高齢者の

家に声掛けをしてもらう必要もあります。一方で高校生でも今できることもあります。広告や高齢者への声掛けなどです。具体的な方法として町内放送を活用した広報活動やポスターを作成し地域内の掲示板に掲示するなどです。以上の2つを活用することでよりよい地域づくりをしたいと考えています。この2つの案は、大人だけで行わず高校生も積極的に参加することで子供の視線を含めた地域全体での地域づくりを行うことが出来ると思います。

7. まとめ

私は地域創造系の授業を通して改めて地域について考えることが出来ました。とくに「都会には魅力がある一方で、田舎には魅力がないのか」という課題につい

て考えることが出来ました。一般的に田舎は車がないと生活がしにくいなど、マイナスなイメージを持たれてしまいがちです。そのイメージはあながち間違っていないかもしれませんが、しかし田舎には人の温かさを感じることができることや、空気もよくとても静かで落ち着いた暮らしができるなど、都会にはない魅力も田舎にはあります。私は進学するために都会に出ますが、将来は関宮に帰って来たいと考えています。帰って来た後は、子供の時に支えてもらった地域に恩返しをしたいと思います。若い人たちにもっと関宮地域の魅力や、人が少ないことはデメリットでは無く、むしろメリットであるということを知ってもらいたいです。

私の地域活性化プラン

～地域の一員として～

3年2組2番 井口 空羽

1. はじめに

私は地域アウトドアスポーツ類型地域創造系に入る際に、「静かな商店街を盛り上げたい。」という大きな目標を掲げて入学しました。香美町は少子高齢化、人口減少、シャッター商店街など様々な課題で溢れています。そのため地域を盛り上げるということは、道が行きかう人々にあふれ、賑わいが絶えないことだと考えました。本稿では、地域探求Ⅱの授業での活動内容や、地域活性化プランについて記述していきます。

2. 地域探求で学んだこと

まず、一年次の地域学入門では香美町の自然、歴史、課題を理解しました。入学前の印象では香美町の魅力は自然だけだと思っていました。しかし地域創造系での学びが深まるにつれて、イメージとは違った地域であることが分かりました。またそれと同時に香美町の課題も分かりました。1年次の地域学入門で印象に残っている授業としては水生昆虫の授業があります。昆陽川で指標生物である水生昆虫を採取することで、川の豊かさを知りました。この他にも武家屋敷やお寺などの歴史的建造物を実際に見ることで、村岡の山名氏の歴史について学ぶことが出来ました。

二年次の地域探求Ⅰでは、マーケティング手法を用いて地域活性化のヒントを見つけました。夏季研修では徳島県の上勝町へ行き、地元からとれる植物の葉を

販売する「葉っぱビジネス」について学習しました。



(図 1)横石氏による講義の様子

この研修では葉っぱビジネスを取り組む前の上勝町について教えてもらいました。その後は地域で活躍されている方、役場の職員や株式会社いろいろの取締役の横石氏などから、仕事の内容、株式会社いろいろの事業内容についてお話を伺いました。

この研修において学べたことは、地域活性化につながるものが身近にあるということです。横石氏の話では、地域を盛り上げるためにいいものはないか探していたところ、いつも何気なく見ていた葉っぱを商売に使ってみるとどんどん売れだしたそうです。そのことからいつも何気なく見ているものや近くにあったものに、地域を動かす力があるかもしれないのかということです。

次に、「自分自身が積極的に動くことが、住民の活気であり地域の活気に繋がるこ

と」です。葉っぱビジネスが成功する前の上勝町の方は、横石さんが地域活性化のためにチャレンジして失敗すると「やっても無駄だ」、「あきらめたほうがいい」など思っていたそうです。しかし横石さんの葉っぱビジネスが成功してからは、住民に笑顔が戻りました。その後は私もやってみようかなと住民自身で積極的に動くようになり、町が賑やかになったそうです。その話を聞いて、地域に大切なのは住民の気持ちなのだと感じました。それに加えて賑やかにさせるきっかけも大切だと考えます。上勝町では横石さんが何度も何度も挑戦し続けました。その姿を見て住民は元気をもらい、また希望をもらえました。このように一人の頑張りがきっかけになり、町全体に大きな影響をもたらしていたと思います。

地域探求Ⅰで学んだマーケティングことを活かして、地域探求Ⅱでは香美町の地域活性化をするための企画書づくりに取り組みました。講義の内容については、まず地域活性化の企画を立てるために、顧客を分類するセグメンテーションを地域内、地域外に分けました。次にセグメンテーションで分けた顧客の中から、村岡の歴史を知らない顧客にターゲットに絞りました。最後にポジショニングでは、顧客が何を求めているのか考えているのか、村岡の歴史をどんな風に捉えているか、顧客の視点に立って考えました。それぞれの講義のあとは、より学びを深めるために講師である白石先生から様々なお題を出していただきグループワークで話し合い全体に発表しました。講義とグループワークを交互に行うことで、論理的なものごとを考えられる様になりました。この論理的な考え方は、総合的な探究でなにか物事についてチームで考える際に役立ちました。

その他にも地域創造系で印象に残っている授業が2つありました。毎年香美町の町長による講演会と集落の方にインタビューし地域の魅力を発信する集落調査班での活動です。

町長講演会では毎年話されるテーマが違います。コロナによる香美町の影響や今の香美町に必要な若者の力について、少子高齢化の現状などでした。これらの話は町長から話を直接聞くことで、交通機関が少ないことや、インターネットの設備が乏しいなどより詳しく香美町の現状について学びました。また講義後には、講義の内容に沿ったテーマでグループワークを実施し班ごとに発表し合いました。この活動を通して今の香美町を見直す機会になりました。

集落調査では集落の魅力を観光客に向けて発信すること目的に、班ごとに担当する地区を決め実際に区長さんや住民の皆さんにインタビューをしました。私の班は小代の東垣で今井司郎にインタビューしました。その中で、年を重ねるごとに住民の数が減り、若者が少なくなっていること。住民の減少によって地区の行事が出来なくなる可能性があること、そのほかにも住民の中に漬物を作っていることが分かりました。インタビューの話の中では、コミュニティのことについてたくさん出てきました。地域のみんなで神社を掃除したり、困ったことがあったら助け合えるなど東垣の地区について新しい魅力を発見できたと同時に、人との関わり合いこそが地域を作っていくのだなと感じました。

3. 高校時代に地域に活動したことから学んだこと

総合的な探究の時間では、「村高発地域元気化プロジェクト」をモットーに活動していました。そのプロジェクトでは、

様々なテーマに分かれて班ごとに活動しており、私はその中の紙漉き班に所属していました。紙漉き班の目標は、今は廃れてしまった伝統産業の紙漉きを復活させ、地域活性化を行うことです。主な活動としては、地元の小学生と交流をしたり、ワークショップをしたりなど地域の方と関わり合う活動が多かったです。私たちは、漉いてできた「もの」ではなく、漉くという「こと」に中心にして活動してきました。私がその中で学んだことは大きく分けて2つあります。

1つ目は、いつも見ているものから視点をずらしてみると、新しい魅力を発見できることです。Instagramというアプリでイベントの告知や実際に活動されている風景を見かけ、10月にある村高フォーラムで行った活動内容や得られたことなど先輩方が分かりやすく説明されていました。その中には、漉いた紙で作った「和雲」という和紙に蜜ろうを塗り水に浮かべるようにしたものがあったり、地域の人をターゲットにした紙漉きのイベントを地域内でしたりなどがありました。しかし、実際に紙漉き班に入ってみると、和紙の金額設定が難しかったり、認知が薄く多くの人に買ってもらえないとものを売りにして活動することは難しいと実感しました。

そこで、班のみんなで意見を交わし合い、地域の憩いの場所を作るということを活動の中心にしました。実際に地域の人を招いた紙漉き体験ができるイベントを計画したり、小学生と交流をしたりしました。活動してみると、変わった魅力がありました。交流していると自然と笑顔が生まれたり、お互いの壁がすんなりとなくなっていました。地域の方と交流する間に紙漉きという体験を挟むことで、より人と人が関わりやすくなっているん

だと感じました。少し視点を変えてみるだけで自分が想像していたものよりも変わったものが出てきました。そのことから、ある一定の視点に縛られるのではなく、少し視点を変えてみることにより、新たな魅力を発見できることにもつながるのかと実感しました。

2つ目は、コミュニケーションの大切さです。このことはとても身近なものかもしれません。というのは、友達と会話するとき、地域の人と関わる時など、コミュニケーションは温かみを与えてくれると思うからです。しかし、そんな身近なものを紙漉き班は見落としていました。漉くことを中心に活動してから人と交流することの重要さを発見しました。それは実際にうづかの森でワークショップをした時でした。(図2)



図2.

うづかの森でのワークショップの様子

その時はコロナも落ち着いており、お客さんを呼んでするイベントは初めてでした。お客さんの中には、友達もいましたが、ほとんどが初対面の方で和やかな雰囲気を作れるのか心配でした。しかし、やってみると、作業をしているときに自然と会話や笑顔が生まれていたり、お互いにできた作品を褒め合っていたり、わからない部分は助け合っている光景が見られました。関わり合うときにお互いに

気を遣う様子もなく、壁もありませんでした。このことから、紙を漉く工程の中にはコミュニケーションがあり、そのコミュニケーションこそが憩いの場を作る種になっているのだと感じました。

4. 地域の現状で感じていること

私が主に感じている香美町の課題は観光客の減少、認知度の低下、地域の人自身

(1) 香美町への訪問経験

<図1：香美町への訪問経験>

経験	2012	2015	2018
1回	11.40%	14.40%	7.10%
2～3回	9.70%	11.10%	6.20%
4～5回	3.60%	3.40%	1.60%
6～10回	1.10%	1.40%	1.60%
11回以上	1.40%	3.20%	1.60%
知っているが行ったことがない	27.10%	18.20%	5.40%
知らないし、行ったことがない	45.80%	48.30%	76.50%

	全体	知らないし、行ったことがない
全体	5,000	76.5%
性別・計	2,658	70.7%
男性・計	1,311	77.1%
男性20代	131	81.3%
男性30歳～44歳	464	75.0%
男性45歳～59歳	663	64.6%
男性60歳以上	1,400	83.1%
女性・計	2,342	91.0%
女性20代	499	87.1%
女性30歳～44歳	801	78.5%
女性45歳～59歳	497	74.1%
女性60歳以上	545	

課題
香美町を知らない
関西エリア 57%
四国エリア 84.5%
中国エリア 77.9%
東海エリア 90.1%
東京 91.9%

課題

が自分の地域の魅力を認知していないことです。

(参考)	2012年調査	2015年調査	2018年調査
香美町を知らないし、行ったことがない人の割合			
兵庫県	15.3%	29.4%	39.8%
大阪府	28.2%	46.4%	62.2%

※「ギャップ調査」より

課題 関西エリアで57%が香美町を知らない

最初に、香美町の観光客と認知度についてです。(図3)

図3. 香美町への訪問経験
(「香美町観光振興計画」より)

香美町への訪問経験を表したデータを見てみると、年数を重ねるごとに香美町への訪問する割合が減っています。特に、

2015年から2018年からの減りが激しく、2021年のデータが出るとすれば、コロナの影響を受けさらに減ってしまっていると考えられます。訪問する割合が減っているということは観光客が減っていると同じ事が言えると思います。さらに性年齢別をみていくと、訪問するということよりも香美町を知らない割合も大きいです。男性の30～44歳、女性の20～59歳における知らない割合が80%を超えており、日本全体を見てみても一番近い関西のエリアの方でさえ、57%と半分以上の方が知っていません。このように観光客の割合の減少、ほかの地方からの香美町の認知度が大きな課題になると思います。例えば、認知度が減ってしまうことで、観光客や香美町に移住する人が減少していく問題が起きてしまうと考えます。

次に、住民自身が香美町の魅力を知れていないところです。私が地域探求Ⅱで商工会の役員の方と話し合いをした際に、「地域の方は自分の地域の魅力について認知できていない。だから、住民が自主的に動かなかつたり、商店街に活気がなくなっているんだ」と言っておられました。ほかにも、活気がなくなることによって祭りや行事がなくなってしまう可能性があると言っておられました。自分の地域を知れていないと伝統が消えてしまったり、町に元気がなくなってしまうことにつながってしまいます。なので、もう一度地域の人に魅力を認知させる機会があるのではないかと感じました。

5. 地域に必要なと思われること

今の香美町にはまずは住民に魅力を知ってもらう、住民同士が関わりあえるような憩いの場を作ることが必要だと考えます。それは住民、観光客どちらにも言えることだと思います。住民には香

美町の魅力を再認識してもらい、憩いの場で少しでも地域の温かみに触れてもらい元気を届ける。観光客には香美町を深く知ってもらう和やかな空間を提供し、もう一度来たくするような場所を作ることが必要だと思います。この中でも最も力を入れるべきなのは観光客が減っているという理由から、観光客の香美町への認知だと考えます。(図4)



図4. 香美町への未来訪理由
(「香美町観光振興計画」より)

香美町観光振興計画の香美町への未来訪理由のグラフから、香美町へ訪れない方の理由がたくさん読み取れます。例えば、香美町が山間部の地域で都会から離れてしまっていたり、電車やバスの数が少ないので、交通の便が悪い点はあるかもしれませんが、次に割合が大きいのは香美町の中身のことについてです。11.4%が「興味があるものがない」、15%

が「何があるかわからない」などこのデータからほかの地域からみた香美町は何か興味を引き付けるものがないのかと感じました。なのでこれからは、香美町の魅力を違う方法で観光客に認知させていく必要があると思います。

6. 私の地域活性化プラン

私は香美町の魅力であると考えている村岡の歴史や紙漉きなどを活用して、地域活性化していきたいと考えています。私は、ここで上勝町の横石さんがされていた身近なものに視点を向けるということ計画の中で活用してみました。すると、総合的な探究の時間で活動していた紙漉き班の紙漉き、何気なく毎日商店街で見えていた建造物や歴史、そして将来なりたいと考えている教師が浮かんできました。私は、この3つを使って地域活性化していきたいと思いました。

まず、紙漉き班でやっていた紙漉きを使って地域活性化する方法についてです。紙漉きには人と人をつなげるということ、憩いの場をつくれるという良い点がありました。その点を使って紙漉きで高校生でイベントを開き、住民にも観光客にも憩いの場となるような場所を作りたいと考えました。憩いの場を作ることで、一緒にいた観光客の方も実際に香美町の人々の温かさに触れ、もう一度来たくするような効果があると考えました。さらに、紙漉きを実施する場所を違う集落にしてみたり、有名な猿尾滝や長楽寺などに変えることによって、それぞれの地域の魅力を発見、再発見する機会となると思いました。そして、紙漉きを体験した観光客が香美町外の人に話すことによって香美町のことが広まっていくのではないかと考えました。

次に、商店街にある歴史を活用した活

性化方法です。これは、地域探求Ⅱで行っている活動を使いたいと考えています。私が地域探求Ⅱで行っている活動は、村岡で有名な山名氏の歴史や建造物をマップで示したものを鑑賞できるようにしたり、スタンプラリーを活用し、実際に建造物と説明を見てもらい商店街・山名氏の歴史について知ってもらうというものです。それに加えて、定期的に地域の方と高校生が主催するプチイベントをしたいと考えています。この活動は、最初にこの魅力を知っていない住民をターゲットにし、十分に認知させてから観光客をターゲットにしていく流れに設定しました。最初に、観光客に設定してしまうと、何も知っていない住民の方々には協力も出来ず、十分に魅力を発信することができないと考え、住民からスタートすることから始めました。しかし、この活動は短期間で成果が出るものではありません。じっくりと住民に魅力を理解してもらい、地域の方と高校生でプチイベントを開き、憩いの場を少しでも作り、そしてチラシやインターネットなどで告知をして、そこに観光客が興味を持ち、加わっていくことを目標としています。そのためには、これから高校生になる子供たちに継承してもらい、商店街の活気を継続していく必要があります。継承されていくことで、地域の方も魅力をさらに知っていけると共に、地域外の方からも参加していただける可能性もあると考えます。そして、継承だけを考えずに大学を卒業してからはUターンをして地元に戻ってきて自分自身も地域に加わって活性化していきたいと考えています。

最後に、教師の立場を利用した活性化方法を考えています。私は将来中学校理科の教師になり、地元に戻って地域の学校に就職したいと考えています。教師に

なってからやりたいことは2つあります。まず、授業の中で紙漉きを生徒に体験してもらい、地域の魅力を知ることができる授業をしたいと考えています。その授業とは、環境問題の分野で変わった資源を有効できることを趣旨にして、破棄物やごみなどを漉いてみることをしたいと考えています。私も紙漉きの魅力を見つけられたのは、体験をする中で紙漉きは違う材料でもできたり、押し花をできたりなど活動を通すことで発見できました。そのことから学校内で紙漉きをすることにより、若いころから紙漉きに興味を持たせることができると考えます。そして、この子供たちが将来村岡高校に入って紙漉き班に入って活動したり、紙漉きのことを地域の人に話して少しでも未来につながるような取り組みができるのではないかと思います。次に、地元のボランティアに参加したり、イベントに参加したいです。香住海岸でカヤック体験しながら景色を満喫できるような香美町の魅力に触れられるイベントに行って、新しい香美町の魅力を発見したら、教師の立場で生徒に発信をすることができると思います。そして、魅力を知ることができた生徒たちは自主的に魅力に触れたり、もっと知りたいと感じると考えます。その中に参加して自分も少しでも地域の力になりたいです。

この3つのことを実際に活動出来たら、地域の人にも活気があふれ、賑わいを取り戻し、ほかの地域との交流が盛んになり、人口減少や、香美町への認知度の問題など様々な香美町の問題が解決されていくと考えました。

7. まとめ

私は、高校生活でこの香美町と密接に関わってきました。総合的な探究の時間で

あったり、地域創造系の授業であったり
とさまざまな場面で香美町とつながりが
ありました。その中で、魅力を再発見し
たり、新たな課題を見つけたりしてしま
した。香美町の魅力や課題を知っている
私であるからこそ、この香美町の地域の
一員として、地域活性化に取り組みたい
です。探究の活動を続けて村岡の魅力を

知ってもらおう。そして紙漉きで地域に憩
いの場を作り、教師で地域活性化につな
がる人材を育成したいと考えています。
そのような活動を通して、少しでも香美
町が抱えている問題を解決できるような
活動をしたいです。

村岡商店街の賑わいを復活させる

～「人のつながり」を深めるために～

3年2組11番 坂中心

1. はじめに

中学生までの私は、「香美町は田舎だから、どうせ何もないだろう」と、自分の住んでいる香美町に興味を持たずにいました。しかし、この地域創造類型の「地域探求」という授業で、香美町について学んでいくなかで、この町のたくさんの魅力に気づくことができ、その魅力を、中学生の時の私のような人たちに発信し、地域に活気を取り戻せるような活動に取り組むことができるようになりました。本論では、このような「地域探求」の活動の中で、私が学び感じたことをまとめ、私の考えた地域活性化プランを述べていきたいと思えます。

2. 地域探求で学んだこと

地域創造類型では、1年生で「地域を知る」、2年生で「地域を深める」、3年生で「地域を創る」という3つのテーマで活動に取り組んできました。

1年生の時には、「地域を知る」というテーマで、香美町の自然や歴史について学びました。自然では、山・川・海の3つの自然の要素について、講義や実習を通して、様々な体験をしました。山の分野では、獣被害対策や、但馬の植生を学びました。獣被害対策では、クマの生態と獣被害対策の方法について講義を聞き、被害の大きさや人間と動物の共生の大切さと難しさを痛感しました。

但馬の植生では、但馬の植生の豊かさと、自然と動物が関わりあって豊かな生態系を保っているということを学びました。

川の分野では、実際に昆陽川に入り、水生昆虫の採取をして、川の役割と水生昆虫の種類や食物連鎖の仕組みなど、昆陽川の豊かな生物多様性を学ぶことができました。

海の分野では、夏休みにスノーケリングとシーカヤックの体験をし、海中生物の観察と海岸周辺の地形の観察を行いました。大昔から造られた地形が今も残っていることの素晴らしさと、自然の大きさに感動しました。



図1.シーカヤック体験の様子

以上のようなことから、香美町の自然は、とても豊かであること、そして何より、山・川・海は繋がっているということに改めて気づくことができました。水源となる山の豊かな木々が川を育み、川の清流が豊かな海を育んでいることは、地域探求の授業を受けていなければ、考えていなかったらということがたくさん学ぶことができました。

歴史では、まちあるきの授業で石松崇氏の説明を聞きながら、村岡高校周辺の歴史のあるお墓や、お寺、神社などを見て回

り、プレゼンテーションの授業で地域にある史跡の写真を撮り、親や祖父母に歴史を聞いたり調べたりしたことを発表しました。普段何気なく見ている町の風景でも、自分たちの生まれ育った町の歴史に気づくことができ、少し見方を変えるだけで、人それぞれに多くの疑問が生まれ、その疑問がさらに多くのことに繋がって学びが深まるということを知りました。

2年生の時には、「地域を深める」というテーマで、1年生で学んだことを活かした、活動に取り組みました。私たちは、鳥取大学の白石秀壽先生のご指導のもと、「村岡の売り出したいものを考える」などといった内容でマーケティング手法の学習、実習をたくさん行い、この学習をさらに深めるために徳島県上勝町に研修に行きました。株式会社いろどりでは「葉っぱビジネス」という、料理を彩る季節の葉っぱや花などの「つまもの」と呼ばれるものを、栽培・出荷・販売するビジネスを行っています。そのビジネスを立ち上げた横石氏に講義をしていただきました。「葉っぱビジネス」を立ち上げた横石氏の「喜ぶ出口をつくり、仕組みを考える」という言葉は、今でも心に深く残っています。また、上勝町で行われている「ゼロ・ウェイストの取り組み」について、アカデミースタッフの野々山氏に講義をしていただきました。ただごみを捨てるだけでなく、ごみの分別やリサイクルを通して、住民同士の関わりや、住民と行政の関わりができ、更に良い町を作っていくことができるきっかけになる活動であると感じました。

この研修を通して、私が感じたのは、たとえどんな取り組みをしたとしても、その地域の住民たちが喜ぶ、納得できるような取り組みでなければ、地域活性化はで

きないということです。これは地域活性化だけでなく、普段の生活でもそうです。

「喜ぶ出口をつくり、仕組みを考える」という言葉を聞いたとき、当たり前聞こえるけどなかなか行動に移すことはできないので、たくさんの方が笑顔になるような取り組みを考えたいと思いました。上勝町は、香美町と雰囲気似ていて、研修に行くまでは「ここも田舎だから何もなさそうだな」と香美町と同じように感じていました。しかし、話を聞いていると、上勝町は香美町と違い、高齢者が主体となって活動する「葉っぱビジネス」などの、地域住民が輝ける舞台・役割がたくさんあり、住民にとっての生きがいを見つけることができる、どの世代にとっても充実感を得られる地域だということに気づきました。上勝町みたいに香美町は、全ての世代が充実感を得られる地域ではありませんが、人と人とのつながりが密接なところは、上勝町と同じだと思いました。

3年生の時には、「地域を創る」というテーマで活動に取り組みました。2年生の



図 2.上勝町研修の様子

3学期から3年生にかけて、地域探求の集大成として、上勝町での学びをもとに『ひと・もの・こと』発信プロジェクト』に取り掛かりました。このプロジェクトでは、香美町に存在する資源を製品化し、

マーケティング手法を用いて分析・発信促進することを目標として活動しました。活用する資源をもとに4つのグループをつくり、地域の協力者の方々と話し合いながら、資源を製品化し、香美町の魅力を伝える活動に取り組んでいます。私たちのグループは、施設活用をテーマに、商店街の活性化に取り組みました。商店街を活性化するためには、私たちが地域のことを知らなければいけません。商工会の方に、村岡商店街周辺の歴史を聞いたところ、村岡の歴史的背景や商店街が今の場所にできた理由などを詳しく教えていただきました。

自分の生まれ育った町の歴史を知って、何とかしてこの町の活性化に関わりたいと思うようになりました。

地域を活性化させたいなら、まずは私たちがこの町に興味を持たなければならないということに気づける良い機会になりました。

現在、その話を基に歴史を伝える看板をたくさん作り、ウォークラリーを企画しています。看板に載せきれない情報や動画などのQRコードを載せることで、多くのことを知ってもらおうと考えています。他にも、商店街に人を呼び込むためのイベントとして、紙漉きや高齢者の方から昔の遊びを覚えてもらうなど、地域の方々との交流の機会を設けることを考えています。

たくさんの人々を村岡商店街に呼び込み、常に人が集まって交流できるような場所を提供できるようにしていきたいと考えています。

3. 地域に必要だと思われること

私が今の香美町に必要なと思うことは、「人のつながり」だと思います。今の香美町には人々が交流する場が限られていて、

孤独になってしまいがちなので、たくさんの方が商店街に来て交流することで、地域に賑わいが生まれ、この町に訪れる人が増え、今以上に活気ある商店街になると考えています。

そのために、人々が気軽に交流できる場所や方法を私たちが考え、実践していくことで「人のつながり」を深める機会を多く提供していきたいと考えています。

4. 私の地域活性化プラン

地域を活性化するには、どの世代の人にとっても住みやすい町をつくっていかなければならないと思います。そこで私は、どのような活動をしたら香美町が住みやすい町になるかを考え、地域活性化プランを考えています。

私は将来、地元に戻って保育士になりたいと思っています。しかし、少子高齢化が進む香美町では、保育園・幼稚園なども年々減っていってしまうのだろうと考えています。子どもの数を増やすためには、地域を出た若者が子どもを連れて帰ったり、移住してくる人を増やしたりしなければならないと考えました。私は、親子連れ、子供たちが住みやすい町にするために、今ある自然環境や、人の温かさはそのままに、親子連れに向けたイベントを増やしたり、遊びやすい場所をさらにつくったりしたいと思いました。今の香美町は、地域住民が楽しめる場所やイベントが少なく、地域の方が交流する機会がほとんどありません。だから私たちが交流できるようなイベントをたくさん考え、地域住民を牽引する人になりたいです。イベントをするにしても、遊び場、地域の方が交流する場所をつくるにしても、どんな時でも先頭に立って地域を巻き込んでいく人たちが重要です。だから、地域の歴史を活かしつつ、新しい考えを取り

入れた活動を考えていけるような人になりたいです。

具体的な交流場所のプランとしては、買い物が気軽にできるようなお店や、勉強をするための静かな図書館や、お茶を飲みながら話ができるカフェ、体を動かすことができる運動施設や、親子が共に遊べるような公園や、たくさん世代が集まって、今まで話したことの無い、会ったことの無い世代の人とも交流することができる場所が村岡商店街の中に増えてくれば嬉しいと考えています。そこで多くの人を集め、交流を増やすことで、「人のつながり」が深まり、地域の活性化に繋がると考えています。

そのために、人を集めるイベントを開催し、それらの施設が必要になるほど人を集めたいと考えています。

具体例として、「ゼロ・ウェイスト」から学んだごみを減らす活動として unnecessaryなものを捨てずにフリーマーケット、生きがいや地域住民同士の関わりを深めるために高齢者の方に昔の遊びを教えるイベント、地元の高校生の活気ある活動を知ってもらうために村岡高校の紙漉き班のワークショップ、香美町の自然を満喫できるようなバーベキューや宿泊イベント、自然との共生の楽しさと厳しさを知る狩猟体験、地元の名産品をさらにアピールするために名産品を使った料理教室、小さな子ども連れのお父さん、お母さんに向けて、子どもたちにとっても、親にとっても思い出になる、手形のペイントや、SDGsの問題も取り入れた、子どもがつくるエコバック制作や、地域の歴史を楽しく学んで、子どもだけでも安全に遊べるようなレクリエーションや、地域の行事に興味を持たせるために、縁日の出店のお手伝いや、のイベントを月に1回以上開催したいと考えています。

香美町を活性化する、という目標を持った地域を牽引する人が、多ければ多いほど、香美町は、いい方向に進んでいくと思います。香美町を牽引することは、一人の力では、難しいことだと考えています。しかし、活動を続けていくことで協力してくれる人や団体を増やし、地域全体の力で村岡商店街や香美町を盛り上げていけるように力を尽くしたいと考えています。

地域が一丸となって、住民全員が地域活性化について考えてくれるようになってくれるようになればいいなと考えています。

5. まとめ

私は村岡高校の3年間の生活で、他の高校では絶対にできない貴重な経験をさせてもらいました。地域の自然や歴史をこんなに深く学ぶ機会や人々と関わる機会は今までありませんでした。それを知ることによって地元への愛着が湧き、全力で魅力をアピールする活動を考えることができた気がします。高校に入学するまでは自分の地域に関心を持たずにいたし、新しいことを考えることも得意ではありませんでした。ただ、香美町の自然がどちらかというと好きだからという理由で地域創造類型に入りました。実際に地域創造類型に入って、講義や実習を重ねていくにつれて、香美町の魅力である山、川、海の自然の雄大さと共存に関する課題をたくさん見つけ、その課題を解決するために何をすべきなのか考えたりするうちに、自分にできることがたくさん見つけ、香美町に興味を湧かしたし、新しいことを考えることも、私にとってとても興味深いものになりました。

こんなに地域と密接に活動している高校は、全国でも村岡高校だけだと思います。

す。高校生だからこそ考えることができる、若者の目線で考えることができる、そんな考えを持って、日々地域の活性化に取り入れられる要素を見つけられるように生活していきたいと思います。そして、いつか絶対に香美町が、人が行き交うような町、笑顔があふれてにぎわいのある

町になるように、新しいことをたくさん考えていきたいです。「地域創造類型に入ってよかった」と、今なら笑顔で言うことができます。本当にありがとうございました。

私の地域活性化プラン

～外国人が働きやすい町に～

3年2年15番 田邊 怜久

1. はじめに

私が村岡高校の「地域創造類型」に入学した理由は、自然や歴史的な建造物に興味があり、香美町のいろいろな場所を訪れるたびに、香美町に興味が出てきたからです。地域創造類型での3年間の活動を通して思ったことは、地域活性化について真剣に考えなければならないということです。以下、地域探求で学んだことをまとめ、私の地域活性化プランを述べたいと思います。

2. 「地域探求」で学んだこと

地域探求で学んだことが2つあります。1つは香美町の魅力や課題、もう1つは、ひと・もの・ことを売り出す方法についてです。

香美町の魅力や課題については、高校生活全体を通して学びました。1年時には地域を知るというテーマで香美町のいろいろなところに行き、各分野の専門の方からお話を聞きました。授業の中で一番心に残っているのは、村岡の歴史について教育委員会の石松崇氏と一緒に歩きながら講義をしていただいたことです。その講義では身近な場所でも一つ一つに大きな役割や歴史があることを学びました。その例としては村岡高校の近くにある石は、県の土地と私有地を分けるしるしでした。また普段から見ている建物については実は昔の警察署でした。私は普段から歴史的な建築物に興味があったため、その授業の発表も含めさらに興味を持つことができました。その一方で最近

の若者の多くは、歴史に興味を持っていないように感じます。このような地域の歴史や建造物にはたくさんの魅力があるので、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。また、知ってもらわなければ将来なくなってしまうのではないかという不安も抱きました。



図 1. 村岡を散策する様子

また、毎年行った集落調査では、1年時には、村岡区小代に住む若者に班別でインタビューしました。私の班では、「とちの木村」で働いておられる松田拓也氏にお話を伺いました。その中で、香美町の魅力について聞いたところ、「人」とおっしゃっていました。松田氏は以前、都会に住んでいて、やりたい仕事を見つけて小代にやってきたとおっしゃっていました。その時に近所の人々が毎日挨拶してくれたり、野菜を分けてくれたりしたと聞きました。私は、この村岡で生まれ育ったので、このような生活が当たり前だと思っていましたが、改めて村岡や小代の魅力を知ることができました。また、2・3年時には、小代と村岡の集落を様々な観点から調査をして、それぞれの

集落の魅力を探し出しました。その中に、まだ知らないたくさんの魅力を見つけることができました。その活動を通して、昔の村岡と今の村岡に触れる機会があり、比較してみると、昔の村岡には素晴らしい建造物がたくさんあったということです。しかし、今ではほとんど残っていないと聞いて残念に思いましたが今の村岡にも、少しその面影がみられるということがわかり、このことも、一つの魅力だと学びました。

また、香美町の課題についても学びました。私は、香美町の課題は、「少子高齢化」だと思います。少子高齢化は香美町だけでなく、日本の課題でもあると思います。しかし、香美町では特に深刻だと思います。3年時に行った「町長講演会」で、令和2年の国税調査の結果では昭和45年から令和2年にかけて香美町の人口が12257人減っていて、またその減少率は県下1であるとも知りました。令和3年の出生者数は53人で、それに対し死亡者数は286人ということを知るととても驚きました。これらは少子高齢化によるものだと思います。少子高齢化はその地域の経済力を下げたり、若い人の負担が増えたりする大きな懸念があると思います。そのためIターンやUターンがとても大切になると思います。

もの・ことを売り出す方法は、鳥取大学白石秀壽教授のマーケティングの授業で学びました。もの・ことを売り出すには売り出す相手（ターゲット）が大切であると知り、そこで私たちはマーケティングについてより深く学ぶために徳島県の上勝町に研修に行きました。上勝町はその地域で栽培している葉っぱを料亭に売り出し、話題になり、小さい町ながら日本全国から視察が来る程の町になりました。私にとって、葉っぱは使い道がな

いものと思っていましたが、その特性を活かした用途があり、さらに商品として売ることができると学びました。またそのような一見役に立たないような物に商品価値を見出し、売ろうとする逆転の発想も地域を活性化するためには必要なのだなと思いました。



図2. 徳島県上勝町での研修の様子

また、私たちは3年次に「人・もの・こと 売り出しプロジェクト」として4班に分かれて活動しました。私の班では、小代にある「吉滝キャンプ場」の西村太一氏にご協力いただき、自分たちでキャンプを運営する中で、香美町魅力を再発見したり、発信する活動をしたりしました。その中で誰に向けて発信するのかを考えたり、決められた条件の中で何ができるのかを考えたりすることがとても難しかったのですが、どのように売り出せば、いい結果がもたらされるのかを学ぶことができました。

3. 地域での活動から学んだこと

地域での活動で学んだことは、村岡の自然の豊かさとたくさんの人を笑顔にすることのやりがいです。私は、1・3年時に「総合的な探求の時間」の授業で森と田んぼについて学習しました。木は、たくさんあった方が環境にいいと思ってい

ましたが、たくさんあることによって土壌が悪くなることを知りました。その中で、木を伐採して売ることによって、地域内で使うことのできる商品券をもらうことが出来る仕組みがあることを知りました。たくさんの方がそれをする中で、環境保護にも地域活性化にもつながると思うので、とても魅力的な活動だと思います。また、私は村岡区板仕野の区長さんをはじめ、板仕野の米農家さんのご協力をいただいて田植え体験や草取りに参加しました。



図3， 田植えの様子

機械ではなく手で行ったので大変でしたが、やりがいを感じることができました。鳥取大学の山本定博教授による講義では、おいしいお米の基準、またその基準を満たし、維持していく方法を学びました。その中で、村岡米は「コメの食味ランキング」で9年間連続、賞を取っていることも知りました。これは全国で見ても素晴らしいことで香美町が誇れるものの一つだと思います。しかし、香美町では森や田んぼで働く人が減ってきているので、こういった活動ができなくなるのではと思います。そこで、私たちは田植えや田んぼの管理、稲刈りをするボランティアを集めるための案を考えました。小さい活動ではありますが、このような活動を通して田んぼに興味を持ってもらい、香美町にも興味を持ってくれ

る人がいたら地域の活性化のもつながると思いました。

また、2年時には地域福祉に関して学びました。その中の活動で地域の子供たちと遊びを通して交流したり、地域の高齢の方に花を届けたりしました。その中で学んだことは、人を笑顔にすることのやりがいです。最近では、新型コロナウイルスの影響で地域の人たちの元気がなくなっていると思います。その中で、子供たちに自分たちで考えた遊びをやってもらい、子供たちが少しでも笑顔になってくれたことで私はとてもうれしかったです。また、高齢の方々に花を届ける中で、花を届けた人から手作りのマスクやお礼の手紙をいただきました。このような活動で、人を笑顔にするやりがいを感じることができました。香美町の人口推移(図5)によると、2,045年には65歳以上の高齢者が全人口のほとんど半分に、15歳未満の子供は約10%と予測されています。地域福祉班での活動は、このような現状の中でとても価値のある活動なのでこれからも続けていき地域をさらに活性化できる活動になればと思います。

香美町の人口推移



図4， 香美町の人口推移

また、村岡高校全体の活動として2,022年6月12日に3年ぶりに開催された「美方残酷マラソン」に大会スタッフとして参加することができました。新型コロナウイルスの影響で私にとっては最初で最後の参加で、難しいことがたくさ

んありました。しかし、応援している時に「ありがとう」と言ってくれる人がたくさんいました。地域内の人と関わることは多いですが、地域外の人とも関わるができる機会となり、また参加者のみなさんの笑顔を見ることができたのでうれしかったです。村高生として「人みな、使命あり。」を果すことができたと、思います。その中で学んだことは、コロナ禍の中ではあるけど、とても多くの参加者があり、それだけ「美方残酷マラソン」・「香美町」が他地域から愛されているということです。また、そのほかにも香美町にはたくさんの他地域からも参加できるイベントがあり、そのようなイベントを通して、香美町の魅力や良さを知ってもらうことは、香美町にとっても他地域の人にとっても効果的なことだと思いました。そして、このような活動を守り、維持していかなければという思いも出てきました。また、3年間の活動で今まで知らなかった香美町のことも知ることが出来ました。



図5， 美方残酷マラソンの様子

4. 地域の現状で感じていること

私が地域の現状において感じていることは、主に少子高齢化とそれに伴う過疎地域の増加です。香美町では、若者が町を出て行くなどして少子高齢化が急速に

進んでいます。さらに、進んでしまうと、町としての活気や力が少なくなり、香美町の経済が衰退すると思います。私は、島根大学の保母武彦名誉教授の講義で、島根県の海士町について話を聞きました。海士町では、たくさんのIターン・Uターン者がいます。それは、海士町に「みんながハッピーになる新しい仕事の在り方・生き方」を实践できる場があることによるものだと学びました。個人的な意見ですが、香美町にはそのような環境があまりないのではないかと、思っています。それが少子高齢化の原因の一つだ、と思います。

また、少子高齢化に伴い、過疎地域が増加している、と思います。過疎地域になると、その村伝統の祭りやイベントが出来なくなっています。実際に集落調査で小代区神水にて調査を行いました、そこでも少子高齢化によって祭りの規模が小さくなり、なくなってしまうかもしれないと聞きました。祭りやイベントはその地域に受け継がれてきた伝統や文化であり、また、その地域の魅力でもあり、守っていかなければならないもの、と思います。なので、村一つ一つの魅力をたくさんの人に知ってもらい、IターンやUターン者を増やすことも必要だ、と思います。

5. 地域に必要なだと思われること

地域に必要なだ、と思うことは「地域の現状で感じていること」で述べた「誰もがハッピーでいられるような働き場」と「各集落の魅力や伝統を守り、発展させていく環境づくり」だ、と思います。誰もがハッピーでいられるような働き場作りはリスクや大きな費用が生じますが、実現すると、それ以上の大きな希望が生まれてくる、と思います。また、その希望が

少子高齢化を止めるきっかけになると思います。集落の魅力や伝統を守り、発展させることは、少子高齢化が進む中でとても難しいことだと思います。そのために、今、村岡高校がやっている集落調査をすることや、別の地域に行つてほかの視点から香美町を見たり、比較したりすることはとても価値のあることだと思います。そして、集落調査のような活動を町が中心となつて行うことができれば、香美町の一体感が増し、移住者も増えてくると思います。どちらも香美町が一体とならなければできないと思います。そのために、何をやるにしても、町民全員が一体となつて活動する意識作りも必要になると思います。

6. 私の地域活性化プラン

私の地域活性化プランは、香美町と外国との接点をつくることです。日本は世界から見て、魅力的な文化や伝統がたくさんあり、また、安全で暮らしやすいと言われており、日本への移住者や観光客も増えてきています。しかし、その増加は特定の場所に限られていて、香美町にはまだ訪れる外国人は少ないと思います。なので、その数が増えれば世界からも注目され、それに伴い日本国内での評価ももっと良くなると思います。以前に外国から日本で働くために日本の田舎に移住してきた人の YouTube チャンネルを見たことがあります。その人は、田舎の空き家に住んでいて、その空き家をリフォームするという動画を出していました。その動画を見て私は、このような人が香美町にも増えればいいなと思いました。幸い香美町には人口減少による空き家や、廃校があります。その空き家や廃校を外国人が住む場所、働く場所にする事ができればそのような人が増えて、

地域も活性化すると思います。これは「地域に必要だと思われること」で述べた、「誰もがハッピーでいられるような働き場」に関わる事だと思います。

例えば、空き家を外国人の住む場所として提供して、廃校を働く場とすることを考えてみましょう。また、その働き場で働く人が使うことができる「おばちゃん食堂」のようなものを作ることで、外国人だけでなく、地域の方々にも働く場が提供でき、使わなくなる建物を減らすこともできると思います。私は、「働きやすい環境」とは、働く人が能力を最大に発揮でき、健康的に働けるような環境だと思います。香美町は、日本人にとってはとても働きやすい環境であると思いますが、会話ができないことや、文化になれないなど外国人にとってはまだ溶け込めない環境だと思います。しかし、外国語を話せる人を増やし、町全体が異文化を認められるようになれば、よりよい香美町が実現できると思います。もし、その活動が実現すれば、私も香美町で率先して外国人と交流し、地域に貢献したいです。

また、外国人と関わることで、言語や生活・習慣などの相違を越えた心と心の触れ合いが生まれ、国際社会に貢献できる人間形成をすることもできます。そうすることで、世界から注目され、地域の魅力が増えると思います。そのように大きなメリットもたくさんあると思います。また、この論文で述べたように香美町には多くの魅力があると思います。こうした活動や魅力を外国人に知ってもらうことは難しいことですが、それを伝えるブログをネットにあげたり、SNS で投稿したりすることで知ってもらえると思います。例えば、私が外国人に香美町の魅力を英語で伝えるために次のような英

文を考えました。

「In Kami Town, we can see a lot of remnants of old buildings, which have historical backgrounds, as common scenery. And we can be “one” even though we live in different cultures and lifestyles because the people in Kami Town are kind and cooperative.

Thus, I think anybody can make a comfortable life by working in unity in Kami Town.」

また、このようなことは誰にでもできることだと思うので、多くの方がすることで、さらに多くの方々に香美町を知ってもらえるきっかけになると思います。

7. まとめ

私は、香美町の自然や歴史的建物に興味があり村岡高校に入学したのですが、地域創造類型での活動を通して、香美町の厳しい現状を知ることができました。この現状を他人事ではなく、自分のこととして捉えることで地域の未来を真剣に考える機会ができ、自分の考えもより深まりました。私は将来外国、または外国語にかかわる仕事をしたいと思っています。そこで自分が生まれ育った町「香美町」の魅力や香美町で行っている活動を共有したいと思います。そうすることで、香美町に来てくれる外国人が増えれば自分の使命を果たすことができるのではないかと思います。また、近年はグローバル化で世界が一体化してきています。その中で、香美町も様々な国との接点を持つ地域になり、「誰もが働きやすい環境になれば、地域活性化につながると思います。将来、この高校3年間で学

んだことが自分のため、香美町のためになればと思っています。香美町は自然が美しく、人がやさしく、外国人にも住みやすいと思ってもらえるような自慢できる、誇りを持てる町です。そしてここで述べたことが実現できるとさらに自慢できる町になると思います。

香美町活性化計画

～誰もが帰りたくなる町香美町～

3年2組18番 中村 優月

1 はじめに

私は、生まれ育ったこの町の、「何もないからこそ落ち着く」というところに魅力を感じ、この村岡高校の地域創造類型に入りました。初めはただなんとなく何もないというところが好きだった私ですが、この「何もない」というキーワードが後に地域創造の学びの中で、田舎であるこの町香美町を売り出すために最も必要なものだ気づくところまで成長し、より地域を理解できるようになりました。そんな私が3年間学んできた地域探求の活動、地域に対する思いや願い、そして私の提案する地域活性化プランを述べたいと思います。

2 地域での活動とその学び

今まで私たちは多くの講義を聴いたり、実習やインタビュー活動を行ったりしてきました。まずはその大まかな内容を紹介していきます。

1年次は主に「地域を知る」活動を行いました。水生昆虫、獣被害防止対策、但馬の植生などについて学び、地域の基礎的な知識を身につけることで、この地域と地域を取り巻く環境との関連性を知ることができました。水生昆虫の実習では、村岡の川に棲息している水生昆虫を採取し、それを持ち帰り標本作成をしました。どの水生昆虫が生息しているのかを分析することで、その川の水質を調査することができます。調査の結果、私たちが調査した昆陽川は、棲息していた水生昆虫の種類から比較的きれいな川であることが分かりました。獣被害対策の講義では、村岡にもよく出没するツキノワグマの出没要

因と被害防止対策を教えていただきました。そのお話の中で、山の中の植物が凶作であるときにクマが人里に出没する確率が上がるというお話が印象的でした。例えば、ある集落がクマの出没に悩まされていたところ、その地域には柿の木が200本あったことが判明します。腹を空かせたクマにとっては、その集落は果樹園のように魅力的で、その柿を求めて出現するという事例がありました。また、クマの出没要因さえも植物の成長具合と関連性があるという驚きの事実を知りました。被害防止対策として、唐辛子などから抽出された辛み成分を使用したスプレーでクマが動けないようにするという事をお聞きしました。クマがよく出没するところに住んでいながらも、対策方法を初めて知りました。但馬の植生の学習では、ハチ北大沼湿原周辺で様々な植物について紹介していただき、実際に植物を観察しました。植物は、気温やその土地の状況に伴って生育状況が変化します。そこには動物たちも関わってくるため、鹿などの小動物によって植物が荒らされ、植物が絶滅してしまうこともあります。しかし、人々が人工のものを植え増やしていく取り組みがあり上手く対処されています。中でも、私はカエデについて興味をもちました。カナダのカエデは、日本では明治時代以降移入されました。しかし、樹液採取はあまり行われず、専ら街路樹として用いられています。それに比べてハチ北のウリハダカエデは、まだ雪が残っている時期に樹液を採取して煮詰めメープルシロップにすることで、近年の町おこしに役立てられています。このことから、植物たった1つにしても工夫を凝らせば町おこしにつなげることができるという

新たな発見が出来ました。さらに、1年次の大きな活動の1つとして、夏休み期間中に竹野の海でシーカヤック・スノーケリングの実習を行いました。海の中に潜って魚を観察したり、カヌーに乗って岩を観察したりと、普段とは違う視点で自然そのものを肌で感じる事が出来ました。山の樹木から落ちた葉が雨水に溶け込み、それらが川を通じて海に流れるという仕組みから、山・川・海はつながっていることを知りました。

2年次は、徳島県上勝町を訪問し、その地域の特色である「葉っぱビジネス」と「ゼロ・ウェイスト」の取り組みについて現地調査を行いました。上勝町で行われている葉っぱビジネスは、田舎ならではの「葉っぱ」を資源とした産業で、「田舎」という点では私の地元と似ていると感じました。しかし、上勝町は香美町とよく似た町なのにも関わらず、その町にある資源を上手く利用して新たなプロジェクトを作り、地方創生に大きく貢献しています。私は高校に入学し、友人や住民の方と地域について話し合う機会が増えました。そこでよく「香美町には〇〇がないからダメだ」「香美町には〇〇が必要だ」と耳にし、香美町はどこか町にないものを求めている「ないものねだり」などところがあるのではないかと感じていました。上勝町での研修を終え、町の人たちが上勝町にある資源を使ってプロジェクトを作っていることを知り、改めて「ないものねだり」ではいけないと上勝に教えてもらったような気がしました。また上勝町はゼロ・ウェイストの取り組みで、単にごみの排出量を減らすことだけを目的としている訳ではなく、町民が「要らなくなったけどまだまだ使える物」を持ちより、それらをリユースする、「くるくるショップ」という場所があり、町民参加でごみを減ら

す取り組みをしています。そこで持ち込まれた物をリメイクした服や食器などは町外の人でも無料で持ち帰ることが出来ます。



図1. 上勝町での講義の様子

町内の小さなプロジェクトに見えるこの取り組みは、ごみを減らすことを通して物を作りそれを売り出すという観点から、町外の人にも影響を与えていると思います。この徳島研修を通して、私は香美町に必要なのは足元に目を向けることだと考えました。

3年次は、鳥取大学白石教授の教えの元マーケティングについて学び、そこから4つの班に分かれてマーケティングを用いた香美町の『「ヒト・モノ・コト」魅力発信大作戦』に取り組んでいます。私はその中のジビエ班に所属し、小代区にあるスミノヤゲストハウスを運営されている田尻さんと共同で、ジビエを資源とした1泊2日のジビエツアーを計画しています。ターゲットをジビエ好きの人と設定し、「ツアーを通してジビエの魅力と生命の尊さを知ってもらうこと」を目的にツアー作成を行っており、現在は完成したツアーを田尻さんにゲストハウスで実施していただく前の段階です。このツアーでは1日目に罫仕掛けの手伝い・シカの解体ショー見学・シカ肉ハンバーグ作り・ナイトサファリ、2日目に狩猟見学・アンケ

ート調査を行う予定です。罾仕掛けの手伝いでは、田尻さんが実際罾を仕掛けるところを見学します。罾仕掛けには狩猟免許が必要ですが、簡単などころはお手伝いさせていただくことが可能です。次に、シカの解体ショー見学では解体免許を持った猟師の方に協力していただき、実際の解体の様子を見学する予定です。シカ肉ハンバーグ作りでは、夕食作りにゲストも参加することで、コミュニケーションを楽しむことができます。ナイトサファリでは、夜の森にシカを見つけるため車に乗ってドライブに出かけます。特殊なライトを使って、車の外を照らすとシカがいるときにシカの目が光るという仕組みになっています。天気良ければ満点の星空を楽しむこともできます。2日目は、1日目に仕掛けた罾にシカがかかっているかを見に行く狩猟見学をします。その後、アンケート調査を行いツアー終了となります。しかし新型コロナウイルスの影響により、夏休み実施予定のツアーは延期になりました。このような状況でも、私たちたちは出来ることに取り組んできました。現在の活動としてはナイトサファリで使うジビエ紹介パネルの作成・アンケートの内容確認・モニタリングツアーを行っています。私たちが卒業してしまっても、このプロジェクトを続けていくためにはなんらかの形で高校生の考えを残さなければならないと思い、ゲストの方によりジビエを知ってもらうためのパネル作成をしています。また、実際ツアーを実施する前に自分たちが体験することで、新たに見える改善点があるのではないかと思い、私たちがゲストとしてモニタリングツアーを実施しました。

私がこの活動を通して学んだことは、自分たちでプランを立てること、自分たちの力で地域活性化のためのプロジェク

トを生み出すことの難しさです。初めてマーケティングを学び、それを生かしたプランを作るという一通りの活動を体験しました。自分たちの力で行っている活動で地域のために役立つことがいかに難しいか改めて分かりました。このことから、香美町に本当に必要なことは何なのかを考え直し、地域のために行動に移すことが必要だと考えました。

また、私は総合的な学習の時間の班活動で、2年間集落調査班として活動してきました。集落調査班では、村岡にある集落に実際に入り現地の人の声を直接聞くことで、その集落の実態を知り、魅力を追求しています。また、そこで調査した情報を魅力発信のためのガイドブックで発信しています。私はこの2年間の活動の中で、さまざまな力を身につけることができました。例えば、コミュニケーション能力の向上・地域探求心の向上などです。まず、地域の方と高校生が直接話をする機会が少ない中でインタビュー調査を行うことで世代を超えた交流をすることができます。私はインタビュー活動を経験し、自分の集落で出会ったお年寄りと普段から挨拶や会話を交わすことを無意識に行うようになりました。集落調査を行うにあたって、アポイントメントを取るための電話から質問事項・インタビュー後のガイドブック作成・魅力発信まで全て自分たちで行わなければなりません。その中でいつも考えさせられることが、「地域とは何か、地域の魅力とは何か」、そして「それをどう伝えれば上手く伝わるのか」ということです。自分たちの力で地域について知ること、知れば知るほどもっと知りたいという探求心が芽生え、今までよりも地域について考える機会が増えました。インタビューで集落の方々の話を聞いていると、やはりまだまだ課題があ

るということに気づかされました。以下、私の感じる地域の課題を述べたいと思います。

3 地域の現状で感じていること

私が香美町の現状で感じている課題は、Uターン者やIターン者が少ないことです。よく、「都会にはこれがあるから、田舎にもつくればいいじゃないか」ということを耳にします。しかしその考え方に従うと、都会にはできても田舎にはできないことが多く、香美町は結局人の集まらない場所になってしまうと思います。例えば千葉県にはディズニーランドがあります。それと同じように香美町にテーマパークをつくるとしたらそれは不可能です。しかし、都会と方法は違って自然を使ったアスレチックテーマパークなら香美町の「田舎らしさ」を使った地域活性化が可能であると考えられます。私は、香美町に自然が多いという利点があっても、その活用法が分からずそのまましておくのはもったいないと思います。はじめにも述べた通り、私は地元の「何もないからこそ落ち着く」というところが好きで、それでいいと思っていました。町民の中には今でもそれが香美町のいいところだと思っている人がいると思います。しかし、資源があるだけで、それらが人に楽しいと思われるサービスや欲しいと思われる商品に変化しなければ、Uターン者もIターン者も香美町に魅力を感じることも集まることもないと思います。これこそが香美町にUターン者やIターン者が増えない原因だということが分かりました。

4 私の地域活性化プラン

そんな私が提案する地域活性化プランは、2つあります。

1つ目は、香美町の資源を使ったりサイクルプロジェクトです。香美町には木・竹などの自然があります。森林組合の方や役場の方と、細工が得意な人や細かい作業が好きな人が協力し、香美町の木を使ってテーブルやイスを作り、学校や商業施設・道の駅や町民が集まる憩いの場所に提供します。テーブルやイスをつくる作業を町民のボランティア制にすることで、細かい作業が好きな人や、木の細工が得意な人など、町民の趣味や特技を生かすことができ、町民が楽しく地域活性化に参加することが可能となります。また、それらは木で出来ているため香りや心落ち着く雰囲気を楽しむこともできます。竹で箸や火の灯る灯籠を作り、販売することで観光客を田舎の世界に引き込みます。

2つ目は、旅行プランで移住体験をすることです。外部から人を呼び込むためには、1度実際の香美町暮らしを体験していただくことが大事だと思います。なぜなら香美町には人の温かさ・自然の豊かさなどの魅力、さらに村岡米や但馬牛、香住ガニといったブランド品も沢山あります。このような魅力を知り楽しむためには、魅力を盛り込んだ移住体験に参加していただくことが、香美町を知る1番の近道だと考えるからです。私は旅行プランの中に、4つの田舎の良さとして1つの香美町の良さを入れたいと考えます。田舎の良さとしては、肉料理堪能・自然を使った体験型イベント・田んぼ、農業体験・映えスポット写真撮影を考えています。肉料理堪能では、猟師にお願いしジビエ料理を、また牛飼いの方には但馬牛を料理していただき、2種類の肉コース料理を堪能してもらいます。自然を使った体験型イベントでは、竹灯籠を作る体験とそれを流すイベントを実施します。田んぼでは田舎ならではの農業体験をしてもらいます。具

体的には、田んぼでは時期ごとに田植え・稲刈りなどの体験を用意し、畑では畑を耕す・野菜を収穫するなどの体験を用意します。また、香美町には満天の星空や棚田の絶景、滝や海などの自然を感じられる場所が数多くあります。それらを写真に収めることでいい思い出にもなると思います。そしてこの移住体験で最も大切にしたいことは、香美町の最大の良さである「人の温かさ」に触れることです。田んぼや農業の体験の中で移住体験をする人と町民とが密接に関わる事ができるため、人の温もりが感じられます。香美町に住みたいと思ってもらうにはここが最大のポイントだと思います。それは、自分が住みたいと思えるところには、人間関係が深く関わってくるからです。香美町の特に私の住む村岡は近所つながりもあり、優しい人で溢れています。私はこれらのプランを推奨し、多くの人がこの香美町の魅力に気づき、Uターン者やIターン者が増えることを願っています。

5 終わりに

私は香美町に生まれ育ち、村岡高校地域創造類型で地元について学ぶことができていることを、誇りに思います。「田舎の何もないところが好き」から始まった私の3年間は、「何もないところからの発見は楽しい」になりました。私は来年から新たな場所で生活する中でその地域の良さも見つけ、そしてまた地元に戻って来たときに地域活性化に役立つ知識を持ち帰りたいと考えています。私は卒業後ブライダルの専門学校に進みます。今まで18年間私自身が温かい人々に触れ、多くの愛情をもって育てられたように、多くの新郎新婦のために優しさをもって働ける人間になりたいです。

私の地域活性化プラン

～価値観の違い～

3年2組22番 西村 楓也

1. はじめに

私は、地元の香美町村岡が以前から好きだったので、地元の村岡高校の地域創造類型に入りました。私はもともと地域活性化については興味がありませんでした。しかし、1,2,3年と地域について学んでいく中で地域活性化への興味がわき、今では自分で考えるようになりました。そんな私が地域創造を学ぶ中で感じたことをまとめ、私の「地域活性化プラン」を述べたいと思います。

2. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

「地域探求」では各分野の専門の先生に授業していただき、香美町にある自然資源について学びました。また、夏休み中には「集落調査」などの活動があり、人と人とのつながりの大切さを感じられました。「地域探究」の授業を通してたくさんの学びや価値観が得られその中で印象に残ったものを紹介したいと思います。

「スノーケリング実習」

私たちは1年生の夏休みに竹野海岸に行きスノーケリング実習を体験しました。そこでは講師の本庄四郎氏によって日本海の自然環境や竹野海岸の地質・地形について学びました。



図1. スノーケリング体験の様子

この体験を通して私は印象に残ったことがあります。それは、自分の想像していた以上に海が汚れていたことです。自分

が普段見ている山よりも海のほうが汚れていることに驚きました。本庄氏の話の中にあつた、「少しのゴミで海が汚れてしまい海中生物の生活環境が汚染されてしまう現状」を目の当たりにし、それが印象に残りました。また、竹野海岸は宇日流紋岩で形成されています。実際見てみると、一つ一つの岩が模様に見え、とても自然が作り出したものとは思えないぐらいとても魅力的でした。

「獣被害講義」

1年次に私たちは香美町内で問題になっている獣被害について横山真弓氏にお話を伺いました。



図2. 横山氏による講義の様子

特に印象に残っていることは、「獣が天然記念物の植物まで食べてしまい、絶滅危惧種に陥っている」ということでした。奈良市では可愛がられているシカですが、県が違えばシカの認識が全く違うところがおもしろいと思いました。ですが、シカは繁殖力が強く、シカを最小限まで減らすことは難しいと思いました。このような獣被害が増えている理由として猟師が少ないことが考えられます。猟師を増やしていくことや、駆除をした後の活用方法を考えることが今後の課題だと思います。

「徳島県上勝町研修」

1年生の「地域学入門」を学び、私たちは2、3年生で学ぶテーマを鳥取大学地域学部地域学科地域創造コースのマーケティングが専門の白石秀壽氏と一緒に考えました。決まったテーマは「マーケティング手法を用いた地域活性」です。このテーマを学ぶために私たちは、「徳島県上勝町」に研修に行きました。

まず、「葉っぱビジネス」を行っている株式会社「いろどり」の代表取締役横石知二氏の講演を聞きました。普段目にしていないものには価値があり、自分は価値がないと思っけていても、他の人には価値がある場合もあるということが講演を通してわかり、価値観が変わりました。



図3. 上勝町での講義の様子

また、実際に「いろどり」の「葉っぱビジネス」で活躍されている西蔭さんにお話を伺いました。この講演から学んだことは、「普段見ているものには新たな価値がある」ということです。例えば「葉っぱビジネス」では「つまもの」と呼ばれる料理を彩る季節の葉っぱ（南天、もみじ、あじさいなど）を栽培し、ICTの技術を活用し出荷・販売を行っています。この「葉っぱビジネス」というのは商品が軽量なため、誰でも仕事ができるという長所があります。そのため、近年では女性や高齢者が活躍するビジネスとして注目を集めています。「仕事をすることで、健康になった」と言っておられ、ここから私は仕事

をすることでやりがいを持ち、自身の健康維持につながることを学びました。

最後に、上勝町の取り組みについて役場職員の方に「ゼロ・ウェイスト」というゴミをゼロにして「持続可能な地域づくり」をする取り組みについて話を聞きました。上勝町では2003年に日本で初めて、ゼロ・ウェイスト宣言をしました。宣言前はゴミの分別は3種類でしたが、宣言後は45種類に増やし、2018年にはリサイクル率81%を達成しました。挑戦することの大切さと、行政の取り組みに住民が協力して取り組むことが大切だと学びました。

また、横石氏は、「ものの仕組みについて考えることが大切」とおっしゃっていました。このことは、地域活性化プランを考えるときにとても重要だと思いました。上勝町の「ゼロ・ウェイスト」がここまで成功したのは、試行錯誤を重ねて得た経験を活かしたからだと考えます。横石氏は当時上勝町で「葉っぱビジネス」について説明しましたが、町民からは反対されました。ビジネスを始めたとき「つまもの」をなんとなく売っていました。しかしまったく売れず、横石氏は実際の現場で本当に必要とされているものを知るために、大阪の料亭に自費で通い勉強をしました。その結果、「つまもの」は売り上げを伸ばすことに成功しました。このことから、過去の経験は成功につなげるためにとても大切だと分かりました。

「集落調査」

地域創造類型では夏休みに「集落調査」に行きました。「集落調査」とは、小代地区・村岡地区の集落に班に分かれて調査に行き、地域の人たちに集落の現状を聞きに行くという活動です。そこで得た情報を冊子にまとめ、移住・定住を考えている人に向けて「むらの風景」という成果物

を作っています。地域の人との関わりを通して印象に残っていることは、「昔のことについて詳しく受け継がれていない」という現状です。調査をするときに昔の村の話や由来を聞いても知らないことが多いと調査を通して感じました。私たち高校生が話を聞き後世に引き継ぐことが必要だと感じました。香美町は限界集落が多く高齢化率が高い地域で受け継ぐ人がいないので、これから集落を残していくために地域に興味を持ち、調べたことを発信していくことが大切です。また、集落調査のまとめの授業を通して印象に残ったことは、地域の現状を知り、若者（高校生）の視点で考えることが重要だということです。地域活性化プランを考える際には他地域との差別化が重要だと学びました。また、授業の中での発表の時にいろいろな意見が聞けてそれぞれの価値観の違いを感じることができとてもおもしろかったです。

3. 地域の現状と課題

私が香美町に住んでいて感じている現状と課題は2つあります。

1つ目は山を活用したレジャーについてです。私の住んでいる地域にはハチ北スキー場があり、雪が降るスキーシーズンはたくさんの人でにぎわっています。ですが、雪が降っていないオフシーズンになると人があまり来ないのが現状です。このように雪だけに頼らず雪がない山を活用したレジャーが必要になってくると私は考えています。

2つ目は、香美町にはたくさんの空き家があります。今では空き家バンクなどの空き家を減らす政策がありますが、それでもまだたくさんあると思います。集落調査をした小代の神水地区にもたくさんありました。私の地域にはあまりありませんが、今後増えることが予想されま

す。空き家もそうですが、使っていない農地の存在も問題だと思います。この「空き家」「田んぼ」を有効活用すること、田舎にしかできない活用方法を考えることが今後の課題だと思います。

この課題に対して取り組む人に私は「支援」が必要だと考えます。例えば、「空き家」「田んぼ」を使ってビジネスを始める人への資金提供や、地元の人が協力できる体制が必要だと思います。また、「空き家」を減らすためには移住者が必要なので、空き家に移住してきた人に使っていない農地を使ってもらい農業をしてもらうのが田舎ならではの有効活用なのではと私は考えます。私はわざわざ田舎の土地を都会化するのではなく、田舎は田舎のままで活用したほうがいいと考えました。

4. 私の地域活性化プラン

私は地域活性化について、「地域を盛り上げる」「魅力を感じてもらおう」という2つの観点から考えました。

まず、「ハチ北スキー場」を活用した地域活性化プランです。令和3年度（令和3年12月～令和4年4月）のハチ北のスキー観光客は148,700人。「兵庫県ホームページ、令和3年度但馬地域スキー客入込状況」より

数字からわかるようにハチ北スキー場はたくさんの人に認知されており、夏にあまり人が来ないのはもったいないと思います。ハチ北は音楽フェスやキャンプなどのアウトドアが楽しめますが、私はもっと山の斜面を活用した体験ができるのではないかと考えています。

「山の斜面を活用したマウンテンバイク」

私が考えた活用方法はマウンテンバイクです。この体験の目的は、冬のイメージが強いハチ北スキー場を、冬以外でも魅力を感じてもらいオフシーズンのリピー

ターを増やすことや、非日常の体験をしてもらうことです。マウンテンバイクとは山や不整地などを走るために設計されて作られた自転車です。そのマウンテンバイクでスキー場を頂上から下れるコース(ダウンヒル)を初心者から上級者まで



対応したコースを作りレベルにあったコースを滑走してもらいます。ただスキー場を下るだけではなく、GPSでタイムを計れるようにし、タイムアタックで他人と競う競技性も体験できたらいいと考えています。

図4. マウンテンバイクのコースイメージ

夏や秋の季節にマウンテンバイクのコースを常設していつでも体験してもらいます。また、大会を開催して全国の人が参加できたらいいと思います。マウンテンバイクを体験してもらうだけではなく、夏山の景色・匂いを楽しんでももらいます。この体験を通して期待される効果は、ハチ北の新たな「魅力」に気づいてもらうこと、冬の観光だけではなくオフシーズンの観光客増加です。その結果、民宿街や道の駅への客が増え、地域経済が回り地域活性化につながると思います。

「ジビエ」

3年生の授業で各班に分かれ、マーケティングを活用し香美町を売り出す活動をしています。私たちの班は香美町内の獣被害の主要な原因であるシカに焦点を当て売り出していこうと考えています。私たちの班はジビエ単体を売り出すのでは

なく、1泊2日のツアーを売り出そうとしています。このツアーの目的は、ジビエの新たな魅力を知ってもらうことや、体験を通して命の大切さを改めて感じてもらうことです。なぜジビエに焦点を当てたかということ、香美町内で獣被害が多発しており、その獣(ジビエ)を狩猟し食べることで少しでも対策ができると思ったからです。また、シカ肉は低カロリー・高たんぱくの食材であり体に良いということから注目しました。ツアーの内容は、狩猟見学やシカ肉を使ったハンバーグ作り・ナイトサファリです。期待される効果はシカに対してのマイナスイメージをプラスイメージに変えてもらい、食を通して新たな魅力・資源価値に気づいてもらうことです。

5. まとめ

私が「地域探究」で学んだことは、今後自分が進学するときにとっても役立つと思います。地域のことについてもそうですが私が地域創造類に入って一番印象に残っていることは、「価値観の違い」です。「地域探究」の授業を通して様々な人と関わる中でいろいろな価値観の人と出会ってきました。地域創造類型に入る前に比べ、視野が更に広がりました。地域創造類型に入り良かったです。また、授業を通して人前で話すスキルやプレゼンテーション力などの、社会で必要になるスキルを身につけることができ良かったです。私の夢は放射線技師になることです。私は将来地元の病院で働き、地元に関わっていきたいと思っています。そのためにも、進学後も香美町のことを忘れずに勉強に取り組みたいと思います。また、進学後は新しい地域で生活するので、地域創造類型で学んだことを発信していきたいと思っています。これが私にできる地域活性化です

私の地域活性化プラン

～「地域コミュニティ」で地域を変える～

3年2組24番 宮脇 雫

1. はじめに

私はこの地域、地元が大好きです。落ち着く自然とおいしい食べ物、なにより家族のように温かい地域の人がいるからです。そんな環境の中で過ごしていた私にとって、この地域の魅力を学びたい純粋な気持ちから地域創造系に入りました。「楽しみながら学ぶことが出来る」地域創造系の授業は私に地域を知る楽しさだけではなく、地域活性のやりがいを教えてくれました。以下、私がこの地域創造系で学び感じたことをまとめ、私の地域活性化プランを述べていきたいと思います。

2. 地域探求で学んだこと

この地域創造系は「知識ではなく、学ぶ方法を学ぶ（課題解決能力を培う）」を趣旨としています。具体的には、生徒自らが地域に参加し、地域と関わる中で課題を見つけそこから得た学びを活用して地域活性化につなげます。1学年では地域学入門（地域を知る）、2学年では地域探求Ⅰ（地域を深める）、3学年では地域探求Ⅱ（地域を創る）とテーマを設置し、学習を進めます。

この地域活性化に取り組むにあたり、まず大前提にこの香美町という地域「郷土」を詳しく知る必要があります。そこで1年次では地域の専門家の方から香美町の自然・歴史について、山・川・海・城下町それぞれの側面から焦点を当てて講義を受けました。

まず水生生物研究家の西田昭夫氏による

「地域の自然～矢田川から学ぶ～」をテーマとした水生昆虫の講義を受けました。実際に自分たちで体験するために村岡区昆陽川周辺で水生昆虫の実地調査も行いました。私は西田氏の講義を通して「何かを通して調査し考える」という考え方を学びました。物事の視点を変えてみることで、今まで気づかなかった自然のつながりや多様性を学ぶことが出来ました。また物事の捉え方や視点を少し変えることで、視野が広がり多様な意見が生まれるということも学びました。

次に、NPO 但馬自然史研究所の本庄四郎氏によるスノーケリング・シーカヤック体験を宇日海岸で行いました。この活動は私が思うこの地域創造系の「楽しみながら学べる」という魅力そのままでした。今回実習を行った宇日海岸などの自然豊かな海は川がもたらした森の栄養によって生み出されています。しかしこの豊かな自然や海中生物も、近年は海流により流れ込んだ様々なゴミによって危険な状態にある現状を知りました。今回の探求では、宇日海岸の魅力や先ほどの抱えている問題点を把握することが出来ました。しかし問題点を把握しているだけではこの地域の現状は何も変わりません。むしろ悪くなっていくと考えられます。住民が問題意識をもって守る活動も並行して行う必要があると感じました。

この他に川や海とつながっている山に関しても理解を深めるために、兵庫県立大学の横山真弓教授による獣被害対策講座を受けました。また NPO 法人コウノト

リ市民研究所の菅原定昌氏と三木武行氏による但馬の植生・地質についての講義と実地観察を行いました。これらの講義を通してツキノワグマなどの動物と自然が関わりあって豊かな生態系を保っている相関関係を学習しました。また山・川・海のつながりについて学びました。

村岡の歴史(城下町)については、教育委員会の石松崇氏に話を聞きました。実際に村岡の町並みを歩いて調査する中で、いつも歩いている道が昔と今で全く異なっていることや、村岡城下町が如何にして外部の侵入者から防御しているのか学びました。またこの講義を通して先人たちの地域を守りたい思いが今の町の形になっているのだと感じました。

2年次では、これらの地域学入門の学びを通して得た知識をもとに、マーケティング手法を用いた地域の活性化案を考えました。鳥取大学の白石秀壽先生のご指導のもと、マーケティング手法の学習・実習を行い、これをさらに深めるために徳島県上勝町に研修に行きました。

徳島県上勝町研修では、株式会社いりどりが行っている『葉っぱビジネス』の取り組みと、その『葉っぱビジネス』に携っておられる西蔭幸代氏による講義を聞きました。その他にもゼロ・ウェイストアカデミースタッフの方々から、ゼロ・ウェイストの取り組みの講義もしていただきました。ゼロ・ウェイストとは未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を残すため、資源の無駄遣いをせず生まれ変わることのできる社会を目指す取り組みです。具体的には2020年までに焼却ゴミと埋め立てゴミを無くす最善の努力をすることを約束した『ゼロ・ウェイスト宣言』を掲げ、瓶や缶などのさまざまな「資源」を住民各自が『ごみステーション』で45種類以上に分別しています。

そして現在上勝町のリサイクル率は80%を超えています。

このような「葉っぱビジネス」や「ゼロ・ウェイスト」などの上勝町の取り組みは、町の環境を整え社会を変えていくだけでなく、住民の活気までも取り戻していました。まさに地域づくりの理想像となる魅力ある町でした。なぜこんなにも町全体が生き生きとしているのかを考えたときに、私は上勝町の取り組みにある共通点を見つけました。それは、地域づくりの主役が「人・住民」であることを軸において考え行動に移しているという点です。私は今回の研修を通して、地域づくりに大切なのは「人・住民」であって、誰でも輝ける舞台や役割を与えることがその人の生きがいとなりそれが活性化につながることを学びました。

3年次では地域探求Ⅱの活動として、地域学入門や地域探求Ⅰ、徳島県上勝町研修で学んだことを活かした『ひと・もの・こと』発信プロジェクトに取り組み始めました。このプロジェクトは、香美町の魅力的な「ひと・もの・こと」を発信するために、香美町に存在する資源を製品化します。その製品化した商品をマーケティング手法で分析・発信促進することを目指しています。活用する資源から、キャンプ・施設活用・商品販売開発(ジビエ)・商品販売開発(糶漬け)4つのグループをつくりそれぞれプロジェクトを進めました。私はキャンプ班で「脱スマホで手ぶらキャンプ」を売りにしたキャンプイベントを考えていました。その一方でスマホ世代の小中高生が、スマホを使わずにキャンプを楽しんでもらうにはどんな切り口で価値提供すればよいか、ターゲットに合わせながら考えることの難しさを感じました。

この『ひと・もの・こと』発信プロジェ

クトの活動を通して、地域づくりにおいて住人の意識など目には見えないものが大事だと気づきました。そのためには目に見えないものを動かす「仕組み」を考えてみるのが大切であって、思考して創造する力が必要になることを学びました。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

私は、この三年間の地域創造系以外で特に力をいれて取り組んだ活動があります。それは紙漉き班の活動です。紙漉き班は、総合的な探究の時間の活動です。紙漉き班の目的は香美町の長須地区で一度途絶えてしまった射添紙を復活させることです。具体的には地域おこし協力隊で活躍されていた本多秋香さんと一緒に「紙漉き」体験と紙漉きについての知識を多くの人にしてもらうために、小学生との紙漉き体験や地域施設をお借りしてワークショップといった広報活動しています。紙漉きは子供からお年寄りまでの幅広い年齢層の方が出来るため、初対面の方同士でも和気あいあいとした会話が出来ます。紙漉きは単なる地域の伝統文化にとどまらず、人と人を結びつける媒介としての働きもあるのだと改めて感じました。



図2. 紙漉きワークショップの様子

私たちは取り組んできた活動の中で、但馬牛などの香美町の名産物を使いま

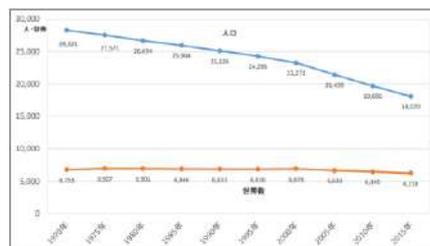
せました。なぜなら「紙漉き」という体験からくる人のつながりだけを全面的に表に出したからです。また、紙漉きの体験は紙漉きを体験する人だけでなく、私たち自身にも精神的に良い影響をもたらします。ここでの良い影響とは、物質的な豊かさではなく、心の影響を与えたり、人との良い関係を築いたりすることが出来る精神的な豊かさとのことです。私も実際にワークショップで、初対面同士でも紙漉きの楽しさを共有できることのうれしさや、多くの笑顔から溢れる人の温かさを感じました。

その様に、多くの地域の方と関わることができれば、精神的な豊かさつまり、紙漉き体験の場にしか存在しない心で繋がるぬくもりや感動を深く、強く感じる事ができると思います。

この様に総合的な探究の時間において、私は「モノ」に力を注いで売り出すことよりも、地域の方同士が自然と会話ができ自らの活力へ変えていける、そんな紙漉きの「体験」と「人と人との関わり」のみで地域活性化につながり得るということを学びました。

4. 地域の現状で感じていること・地域に必要なと思われること

私が地域の現状で感じていることは、人口減少の傾向が著しいことです。



	1975年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年
人口	28,323	27,571	26,054	25,304	25,138	24,298	23,771	21,428	19,656	18,070		
世帯数	6,753	6,907	6,301	6,446	6,833	6,816	6,878	6,430	6,443	6,228		

資料: 国勢調査

図 3. 香美町の人口・世帯数の推移¹³

年次	世帯数 (世帯)	人口(人)						
		総数	香住区		村岡区		小代区	
			男	女	男	女	男	女
昭和45年	6,753	28,321	7,514	8,054	4,323	4,684	1,808	1,958
昭和50年	6,907	27,571	7,490	8,114	4,031	4,398	1,685	1,853
昭和55年	6,901	26,694	7,510	8,010	3,819	4,111	1,528	1,716
昭和60年	6,846	25,964	7,355	7,977	3,651	3,976	1,429	1,578
平成2年	6,833	25,136	7,171	7,771	3,509	3,813	1,349	1,523
平成7年	6,816	24,296	6,935	7,567	3,384	3,686	1,282	1,444
平成12年	6,878	23,271	6,715	7,283	3,185	3,448	1,245	1,395
平成17年	6,630	21,439	6,184	6,755	2,908	3,209	1,088	1,297
平成22年	6,449	19,690	5,717	6,254	2,625	2,906	1,022	1,172
平成27年	6,223	18,070	5,410	5,807	2,333	2,555	916	1,049
令和2年	5,912	16,064	4,816	5,272	2,030	2,236	790	920

資料：国勢調査（昭和45年～令和2年）

図 4. 香美町の人口・世帯数の推移¹⁴

香美町の人口は、長年減少を続けており、特に 2000 (H12) 年以降の減少が著しくなっています。世帯数についても 1975 (S50) 年をピークに減少傾向にあります。2020 (R2) 年の人口は 16,064 人となり、2015 (H27) 年から 5 年間で 2,006 人減少しています。

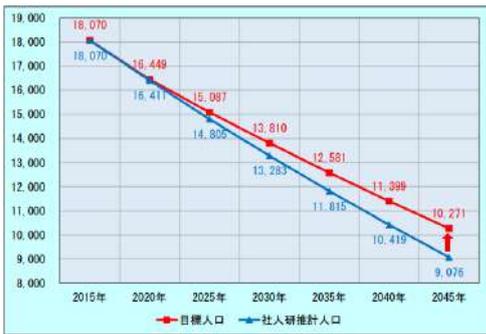


図 5. 社人研による推計人口グラフ¹⁵

また、2018 年 3 月に公表された推計値では、2045 年の人口は 2015 年の約半数の 9,076 人になると予測されています。これらの人口減少が町に与える影響として、さまざまな問題が出てくると考えられますが、その中の一つに、地域づくりについての問題も浮上してくると考えられます。具体的には、地域を支える担い手が高齢化して地域の活気が低下し、農地や森林の荒廃が進むことや地域の伝統文化が途絶えてしまうこと、そして地域住民同士

¹³ 香美町人口ビジョン 第 2 版 国勢調査

¹⁴ 香美町 令和 3 年 (2021 年) 統計資料 国勢調査 (昭和 45 年～令和 2 年)

¹⁵ 国立社会保障・人口問題研究所による人口

の関わりも薄れていくことなどです。このような問題が実際に起こってしまうと、香美町が誇れる自然や食べ物、人のつながりもすべて壊れてしまうと私は考えます。



図 6. 高校生を対象としたアンケート¹⁶

この図は平成 27 年に兵庫県立香住高等学校と村岡高等学校の生徒 487 人 (有効回答数 482 人) に若者の将来展望等についてのアンケートを実施した際の調査結果です。「香美町から外に出られる場合、その理由は何ですか」という問いに対し、「自分に向いた仕事がない」や「日常生活に不便」といった回答に続き、「まちを楽しみやにぎわいが少ない」という回答が上位に挙がっています。つまり、香美町に住んでいる高校生は自分の住む町には活気がないと思っているということになります。そこから、私が地域に必要なだと思うことはこの、今住んでいる人々の意識だと考えます。地域の人口減少を回復する時によくクローズアップされるのは、町外の人に向けて町の良さを PR することです。しかし、私は町外の人ではなく、まず地域内に焦点を当てて再構築することがこの地域の地域活性につながると考えています。なぜなら、自分の地域の魅力を共有し地域に誇りが持てるようになることや、住民同士のつながりが豊かになることで生まれる活気が、地域全体へとつな

統計

¹⁶ 香美町人口ビジョン 第 2 版

がっていくと考えるからです。

「自分には向いた仕事がない」「日常生活に不便」といった回答に関しては既に香美町が、移住・定住施策や新たな働き場の創出、子育て支援などより魅力ある香美町にしていくための政策が実施されています。なので、私はそこにプラスして、住民や地域同士のつながり、すなわち「地域コミュニティ」をより深めていくことで、さらに香美町民がお互いに支え合い、自分たちの手で自分たちの地域を変えていくことができると考えています。

5. 私の地域活性化プラン

以上を踏まえた上で考える私の地域活性化プランは、「交流」を主体とした「出張地域資源ワークショップ」を行うことです。「地域コミュニティ」とは住民の全員が自分の地域が好きで誇りを持つことができ、いつまでも笑顔があふれる未来を目指して住民や地域同士がつながることだと私は思います。町内会や自治会、婦人会、PTAなどの地域コミュニティは既にあります。しかし、私はそれらとは違い、学生主体の「出張地域資源ワークショップ」で地域コミュニティづくりを目指したいと考えています。

学生主体であることのメリットは、学生が地域を見つめ直すきっかけとなり、地域創造に対しての広い視野・新たな価値や未来への創造力が育まれることです。更にそのように、学生が意欲を持って物事に取り組む姿勢は、地域の人たちに活力を与えるなどの良い影響を周りにもたらすことができると思います。

私が考える「出張地域資源ワークショップ」は香美町の各地域に出向き、香美町の魅力ある地域資源を活用して行う“体験型”ワークショップです。私が今考えて

いる体験は、①射添紙を使った出張紙漉き体験、②子供をターゲットにした、香美町の有名人やお年寄りの方から香美町自慢や伝統などを体験も交えながら学ぶ体験学習などを考えています。ここでは、①射添紙を使った出張紙漉き体験プロジェクトを例に出して詳しく説明していきたいと思います。

紙漉き班では、年に一回地元の小学生と紙漉き体験を行っています。この体験は普段長須地区のカミドコロながすという場所で行っているのですが、今回私が考えるプロジェクトは香美町の小中学校、高校に出向き、和紙の原料である楮（こうぞ）の加工体験と紙漉き体験を生徒同士で行うという企画です。

中学生を対象にして考えた場合、時期としてはトライやるウィークの前に実施したいと考えています。トライやるウィークの前に実施する理由としては、地域資源を学ぶことで、より地域に関心を持った状態でトライやるウィークという地域実習に向かうことが出来る考えたからです。そのように地域に関心を向ける入り口として体験を組み込むことで、よりトライやるウィークで地域の良さや地域への帰属意識を実感させることが出来ると思います。入り口という役割を担うからには、楽しいという気持ちだけでは終わらない企画内容が必要だと思いました。そこで私はこのプロジェクトに紙漉き体験だけではなく、紙漉きの原料である楮の加工体験も加えたいと考えています。加工工程から学ぶことで楽しいだけではなく、地域資源に関しても五感で興味を深められると思います。

ここまで概要を述べてきましたが、このプロジェクトで一番大切なことは、「地域コミュニティ」をつくることです。中学生とのコミュニティをつくるためには、

継続的なワークショップの実施と中学生とのより深い関わりが必要とされます。なので、体験の前にはアイスブレイクを行い、打ち解けた後に交流を進めていき、交流中も積極的に中学生と話をしながらワークショップを実施したいと考えています。このように、地域を見つめる中で高校生との交流も増えれば村岡高校への興味もつながり、交流した小中学生が高校生になったときに今度は教える立場となり、学生が主体となってワークショップを行うサイクルをつくるのが出来ると期待できます。そのようなサイクルを創る事ができれば、私が目指すコミュニティが生まれ、人と人、地域と地域のつながりが壊れかけ、コミュニケーションが少なくなっていたこの地域が生まれ変わるきっかけになると考えます。

私がこんなにも“体験”にこだわる理由は、紙漉き班の活動で紙漉きワークショップをした時に参加していただいた方々の溢れんばかりの笑顔や「楽しかった！」の声を最前線で見たり、聞いたりすることが出来たからです。私は、この経験があったからこそ、紙漉きは「モノ」ではなく「体験」という舞台で輝くことができ、その体験が人と人のつながりを強め、地域を深めていると気づくことが出来ました。香美町の地域資源は、この地域の人や地域をつなげる力を持っています。私はその力を“体験”という方法を用いて地域活性化につなげたいと考えています。人口減少や少子高齢化が進み地域が危機な今、もう一度地域全体で団結しつながることが必要です。豊かな「地域コミュニティ」の実現を目指して、私はこの地域活性化プランを提言したいと思います。

6. まとめ

「積極的に」や「自ら動く」というのは口では簡単に言えるけど、行動に移すことは決して簡単ではありません。私はこの3年間でその「自ら動く」の言葉の意味の深さを知りました。地域創造系に入る前は、積極的に自分から動くことがカッコいいと思っていたし、それが自分のためになると思っていました。ですが、地域創造系で過程を考えることの必要性や難しさを知って、自分のしたいことや成し遂げたいこと、何に対しても自分の意見を持つことが大切で、それをしっかり自分の言葉で周りに伝えることが必要だと学びました。そこから私は、ただ単に動くのではなくて、現状を見つめ自分の意見を持ち周り意見交換をすることができて、それが「自ら動く」ことのスタートだと考えるようになりました。また、細かく過程を考えることを大切に、仲間の意見に耳を傾けながらプロジェクトに取り組んで行くことが、最も自分を成長させ、それが自分のためにつながると学びました。地域活性化プランを実現させるためにも、自分の意見を持ち自ら発信していくことや人のつながりを意識してこれからも前へ進んでいきたいと思えます。

香美町林業活性化プラン

～林業を通して多くの職業がある町～

3年2組26番 山田 竜平

1. はじめに

私は、村岡の町や自然が好きで、これからの村岡がどうしたら小学生の時の様な子供達が集まって遊び、学校で多くの班で班活動できるようになるのかを考え、私は子供の人数を増やしていくことが以前のような活動ができることにつながると考え、村岡高校の「地域創造系」に入りました。私が、学校指定科目「地域探求」や総合的な学習で学び感じたことや改善していかないと感じていることで、活性化プランを述べたいと思います。

2. 地域探求で学び・感じたこと

地域探求の一年次では、シュノーケリング体験・シーカヤック体験、水生昆虫などの授業で地域の特色や課題などを学び、どのような観点で地域を見ようとするのか、またどんな物が地域の特色になるかなどを授業で学びました。二年次で、徳島県の上勝町に行き、いろどりゼロウェイストについて話を聞きました。いろどりでは、仕組みを考える・仕組みを作ることの大切さや十割の完璧な事をするじゃなく、三割の物を変化に合わせて実施させていくことについて学びました。理由は、十割の物は改善することもなく完成していますが、三割の物は時代やそのときの環境などに合わせて変化させていけるからです。他にも、情報を明確に拾うことを学びました。なぜ情報を明確に拾おうとするのがいいのかというと、情報を明確に拾おうとするとその情

報が正しいのか正しくないのかを見極めようとするからです。なぜ情報を見極めようとするかという、多くの情報の中から自分の必要となる情報を集めようとするからです。ゼロウェイストでは、まねをしているのではだめだと学びました。二年次には他にもマーケティングについて学びどのように売り出していくなど考えました。三年次には、二年次に考えたマーケティングでは売り出していく物についてどんなプランにするのか、どのような年齢層に売り出していくかなどを多くの製品を通して考えました。また私たちは、三年間を通して町長講演会、教育講演会、集落調査をしてきました。町長講演会では、町長自ら今の香美町の問題や、これからの香美町の課題について話を聞き、私たちが思う解決策を考え、町長に提案させていただきました。教育講演会では、今活気が出てきている町の話聞きそのような町は、Iターンしてきた人が町をよくしているという話を聞きました。集落調査では、私たちが知らなかった小代の歴史や神社の歴史、今活躍している若者、などを学び、その情報を相手にうまく伝える文章やレイアウトの仕方なども学ぶことができました。他にも、三年次では、初めて残酷マラソンの高校生スタッフとして参加して、現地スタッフの方から高校生ボランティアがあるから残酷マラソンができるといわれました。他にも現地スタッフやランナーの方々に感謝され、とても喜びを感じました。以上のことから、高校生

ボランティアはこれからも続けていくべきだと思いました。

3. 高校時代に地域で活動したことから学んだこと

総合的な探求の授業の時間では、環境B班に所属し三年間活動していました。その中で私は、森林の役割や森林が放置されるとどうなるのかなどを学びました。まずは森林の役割と、森林を放置したらどうなるかを説明します。森林は、二酸化炭素を吸収したり大雨や大雪が起きたときに木の根などが土砂をつなぎ止め土砂災害など自然災害を防ぐ役割があります。他にも、有機物や様々な生物によりスポンジのような構造をしている為、裸地の三倍の吸水量があります。そのため洪水や濁水を緩和したり、水質を浄化するといったことができます。日本の森林は国土の約七割を占めています。その中で動植物などの多種多様な生態系が成り立っています。そしてその自然を保全する必要があります。さらに放置された人工林は植物が生えにくい為人の手入れがあると学びました。二年次と三年次に、森の中に入り植生調査などをして、森の健康診断をしたら人工林が超過密と判断できました。また、超過密の人工林の中は健康な人工林とは違い、中に入ると暗く、周りから見る青々しさとは違い、枯れ葉が地面のほとんどを覆っています。他にも木が折れていて土砂災害の時に折れた木が流れてくる恐れがあり、危ない状態です。他の植物が生える場所や地面に光が届くことがない為、晴れでも森の中は薄暗いです。このまま人工林が放置されると、大雨や台風が来たときに、手入れされた人工林は土砂災害を防ぐのに対して、放置された人工林は日光が地表に届かない為、根が丈夫にならず土砂災害を防ぐ事ができません。ま

たひどい場所では、土砂災害の際に、木が大量に流れます。現在、北但森林組合は、戦後に住宅のために植えられた杉の木を伐採し、新しく花粉の少ない杉の木に植え替えています。戦後に植えられた杉の木は花粉を多く出す為、放置していると土砂災害の危険や花粉症の原因となります。その木を切り、花粉の少ない杉の木に植え替える作業をします。理由は裸地のままにしていると雨が降ったときに直接地面に雨が当たるから、植え替え作業をしています。現在、日本では大きな杉の木を加工できる工場がなかったり、国内で木造建築率が下がったりなど、木の利用価値がすくなくなっている為、多くの木が輸出しています。他にも木をチップに変え、そのチップを燃やして火力発電のように発電するヴァイオマス発電のチップを作ったりしています。そして紅葉樹をチップに変えた物は紙を作る材料として作られています。

4. 地域の現状で感じていること

私が小学生の頃は、夏祭りや秋祭りと言った大きなイベントが多くありました。しかし現在は、コロナウイルスの影響により大きなイベントが中止となり、子供が外に遊びに行くことが減ったと感じるようになりました。他にも、商店街の中を見ても高齢化が進んでおり、店に来る人の大半は高齢者になっていると感じます。店は、高齢化や店を継ぐ人がいない為に前あった店がなくなってきています。また、前のように店に行く人が減ったり、店の品物が減ったりなどしている為、お店の売上が減っていると感じました。それらが起こっている原因の中にゴダイやローソンなどの大手の企業が経営する店ができたからだと考えました。理由としては、多くの高校生や社会人の方々が商店街で買い物をしなくなり、ゴ

ダイやローソンといった場所で買い物をするからだと考えました。そのため、商店街の店が減っていくのだと感じました。また、町を管理する人の高齢化もあり、若い人が町を引っ張っていくことがなく、祭りの規模の縮小化や消滅につながると感じました。さらに私たちが小学校の頃にしてきた大名行列と言った長年続いてきた歴史がなくなる可能性がある為、若い人が町を管理し、地域を支える場所をつくる必要があると感じました。

5. 地域に必要なと思われること

私が、これからの香美町に必要なと考ええることは三つあります。まず初めに、歴史を若者に伝えることだと思います。新たな技術が発展する社会の中で、昔にやっていたことを復活させることで若者が興味を持ったりできるような歴史などを伝えなければならぬと感じました。しかし、歴史を伝えようにもどんと若者が都会にでるため、香美町の若者が減っています。だから歴史を伝えようとするにも、伝える若者が少ないのが現状です。そこで、私は2つ目にIターンやUターンする人を増やすべきだと思います。そう考えた理由は、IターンUターンをした人にこれからの香美町の発信をすることが必要になると考えたからです。IターンUターンの人が、村岡高校と連携し、今まで村岡高校生が取り組んできたことを知ってもらって、これからの香美町に必要な政策を考えて行くことが必要だと思います。3つ目に私は、インターネットと言った通信環境の整備をするのが必要だと思います。なぜなら、現在の社会ではスマホやパソコンを一人一台持つのは当たり前になり、そのなかで仕事をしているので通信環境が整っておらず、環境が悪く、インターネッ

トが入りにくい場所だと仕事をしようにもできないと考えたからです。また、一次産業を仕事にしようと香美町に来る人も、調べものにはパソコンやスマホを使ったりする為通信環境がきちんと整えば香美町に来てもらいやすくなると考えました。以上のことをまとめると、今の香美町には高齢者が若者に歴史を伝えていく環境が必要になるため、UターンIターンをして香美町に定住する人を増やすことが一番重要なことではないかと考えました。さらに定住者を増やすためには生活環境や一次産業する人に手当てを出すなど、香美町に移住してきてすぐに生活していける環境づくりをする事が必要だと考えます。

6. 私の地域活性化プラン

私が考える活性化プランは人工林を整備し、それらの木を使った物を作ったりいと思いました。なぜなら、整備された木を活用して形のある物にすることで目的としている人を絞りやすいからです。まず初めに、私は森林の整備が必要だと考えました。理由としては三つあります。一つ目は、自然災害を減らすためです。人工林を放置していると根がしっかりと張らないため、雨や雪が降ると土砂災害が起きやすく多くの場所に被害がでると考えました。二つ目は、花粉症が抑えられるためです。花粉症は戦後に植えた杉の木が原因であることが多いため、人工林の整備をすると花粉症のアレルギー症状が抑えられると考えました。三つ目は、整備をして出てきた木をダンス、棚、コップ、箸などと言った製品にすることです。人工林を整備して出た木は、香美町独自のブランドとして売り出したりすることもできます。しかし切った木が大きすぎると輸出されてしまいます。そこで、但馬内に規格外の木を加工でき

る場所を整えることで、香美町で出た木も地元の企業が販売できるようになり木の利用価値が上がると考えました。例えば建築素材などに使うことができます。Iターンした人がすぐ住めるような家を作ったり、空き家や古民家のリノベーションに建築素材が使えます。他にも新しく事業を始めたいと考えている人は物をそろえるだけで事業を始められる為、最初に必要なお金などが減ります。そして次々と新しい企業が増え、進学の為に一旦香美町を出るけど、多くの企業が増えることにより、就職は香美町で出来るようになるため、Uターンを考えている人が、より香美町で就職がしやすくなると考えました。そのため高齢者が担っていることも若者の手が入っていく為次々と地域活性化の案が出てくるようになり、一段と香美町の活性化につながると考えました。だから、私はこれからの香美町の活性化に人工林の整備することで出てきた木材を使った建築物、箸やコップなどの食器、そして棚などの家具と言った物を作ることにより、木の利用価値も上がると考えました。そうすることにより、UターンやIターンを考えている人が住みやすい環境ができたり、新たな事業を始めやすくなると考えました。

7. まとめ

以上のことから私が考えることは二つあります。まず初めに、多くの人工林が過密なのかを調べ何処の木を切ったらいいのかを調べたら良いと考えます。理由としては、多くの木を一度にたくさん切れないため切る木を決めて切る数を少しずつ増やしていけばいいと思いました。二つ目は、電気やガスと言ったインフラや通信環境と言った必要な環境を学ぶことです。理由は、電気やガス、通信環境というものは変化していくのでこれから

の社会で必要な環境を勉強をして、その環境がその社会に、今一番合っているのかななどのことを学び香美町の木を使った家に必要な環境を学ぶと言ったことが今必要だと考えます。また、新しい事業のための建物や場所も使われていなかったり、使っていない土地もたくさんあるので、IターンUターンした人が過ごせる場所や、IターンUターンの人がやりたい事業や、田畑などができるような土地が香美町には、あると考えました。よって、以上のことより、私は今放置されて手が入っていない人工林を整備することにより出た木を使った物、建物などでUターンIターンの人がたくさんこれる環境づくりをすることが私の考える人工林を使った地域活性化プランです。

おわりに ～3年間指導して下さった鳥取大学地域学部の先生方より～

アレクサンダー・ギンナン | 鳥取大学地域学部国際地域文化コース 講師

地域創造系9期生の皆さん、3年間の地域に根差した実践的学習、お疲れさまでした。そしてその学びの集大成とも言えるこの論文集の刊行、おめでとうございます。2020年から新型コロナウイルスの流行により、世界は混乱に陥りました。それにもかかわらず、皆さんは「地域探求」を続け、岡見公園の「小人の墓」、八幡山公園の国際彫刻作品、一二峠御廟の五輪塔、町内の古墳など、地域の隠れた石造物の魅力を発見し、「バーチャル」の時代に活用できる素晴らしいDVDを制作しました。それは、地域の活性化に貢献する具体的な成果です。そして、皆さんの卒業論文を読むと、私が把握していた内容は氷山の一角にすぎず、村岡高校の活動範囲の広さに感心しました。



地域を凝視していると奥深い世界が展開します。人生の新たな局面を迎える皆さんがこのことを忘れずに、これまで暮らしてきた地域、これから暮らす地域について関心を持ち続けることを期待しています。皆さんのご発展とご活躍を祈念いたします。

白石 秀壽 | 鳥取大学地域学部地域創造コース 准教授

高校生が卒業論文を書く。初めて聞いたとき驚きました。バスケットボールに夢中だった僕の高校時代は、教室と体育館と家を行き来するだけの毎日でした。今振り返っても、体育館で練習しているか、家で寝ているかのいずれかの記憶しかありません。ですから、皆さんが、地域に出て、地域の人々に学ぶことのできる環境を羨ましく思います。ベストを尽くした人にとっても、もう少し考える余地がありそうだったと反省している人にとっても、卒業論文は高校生活の集大成のはずです。そこで是非、皆さんにお願いしたいことがあります。それは卒業論文を数年後に読み返すということです。昔を思い出してほしいからではありません。卒業論文を読み返すのは、自分の成長を実感することができるからです。きっと高校時代とは別の視点から地域を捉えたり、より本質をつかむことができるようになったりしていることでしょう。それは、村岡高校での学びが、皆さんの中に息づいているからです。地域探求という授業はもうありませんが、地域を探求する行為には終わりはありません。卒業後、皆さんが地域とどのように向き合い、どのように地域で生きていくのか。皆さんの活躍を楽しみにしています。



発行：兵庫県立村岡高等学校

兵庫県美方郡香美町村岡区村岡 2931

TEL: 0796-94-0201

協力：香美町地域おこし協力隊